

作業室甲

茨城県教育財団文化財調査報告第190集

熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

平成 14 年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第190集

くま やま
熊 の 山 遺 跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

平成 14 年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団



熊の山遺跡遠景



第4号大形堅穴状遺構出土遺物

序

茨城県は、世界的な科学研究の中心であるつくば市において、国際都市にふさわしい街づくりを推進しております。この新しい街づくりの一環であるつくばエクスプレスの整備は、つくば市と東京圏を直結させることによって、人・物・情報の交流を盛んにし、地域活性化の大きな力となるものです。そこで、平成6年7月に県、市、地権者が三者協議で開発合意に達したのを受け、新線整備と沿線開発を一体的に進める土地地区画整理事業が進められております。

この予定地内に熊の山遺跡が存在していたため、財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成7年4月から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は、すでに当財団の文化財調査報告第120集、第133集、第149集、第166集、第174集として刊行いたしております。

本書は、平成10年度に調査を行った熊の山遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から賜りました多大なる御協力に対し、心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成14年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成10年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字島名に所在する熊の山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成10年4月1日～平成11年3月31日
整理 平成13年4月1日～平成14年3月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第二課長小泉光正の指揮のもと、調査第二課第1班長横堀孝徳、主任調査員江幡良夫、藤田哲也、三谷正、川上直登、副主任調査員稲田義弘が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長瓦吹堅の指揮のもと、主任調査員稲田義弘が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、律令期における郡衙周辺域の様相及び末端支配機構については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長山中敏史氏、埼玉県埋蔵文化財調査事業団主任調査員田中広明氏に御教示いただいた。
- 6 当遺跡から出土した銅製品の金属分析は岩手県立博物館に依頼して実施し、成果は付章として収録した。
- 7 発掘調査及び整理に際し御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第K系座標に準拠し、 $X = +7,320\text{m}$ 、 $Y = +20,200\text{m}$ の交点を基準点 (A1a1) とした。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C……、西から東へ1, 2, 3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c……j, 西から東へ1, 2, 3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

その他、調査年次等による調査区の名称は第1図に示した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。




遺構 住居跡-S I 掘立柱建物跡-S B 土坑-S K 井戸跡-S E 溝跡-S D 道路跡-S F
不明遺構-S X ビット-P ビット群-P g 柱穴列跡-P r
遺物 土器・陶器-P 土製品-D P 石器・石製品-Q 金属製品・古銭-M 拓本記録土器-T P
土層 攪乱-K

3 遺構番号は、平成7年度調査からの継続である。

4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺跡全体図は500分の1、遺構は60分の1、または80分の1に縮尺して掲載した。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もある。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・旋軸		炉・火床面・炭化材(物)
	甕材・黒色処理		油煙・葦
●	土器	○	土製品
□	石器・石製品	△	金属製品
— — —	硬化面		

6 遺物観察表の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 計測値の()内の数値は既存値を、[]内の数値は推定値を示した。単位は、質量についてはcm、重量についてはgで示した。
- (2) 備考の欄は、残存率、実測番号(Pなど)及びその他必要と思われる事項を記した。
- (3) 文字資料のうち、焼成前に線刻されたものを「ヘラ書き」、焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けて記述した。

7 「主軸」は、竈を持つ堅穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

抄 録

ふりがな	くまのやまいせき							
書名	熊の山遺跡							
副書名	島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅵ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第190集							
著者名	稲田 義弘							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2002 (平成14) 年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地							
熊の山遺跡	茨城県つくば市大字島名香取南1903番地ほか	08220 - 214	36度 3分 41秒	140度 3分 46秒	19 ~ 20m	19980401 ~ 19990331	7,786㎡	島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項			
熊の山遺跡	集落跡	古 墳	壱穴住居跡 22軒	土師器 須恵器 土製品 (土鎌・土玉・支脚) 石器・石製品 (紡錘車・勾玉・砥石・石版模造品) 鉄製品	平成13年度整理分を含めて過去5か年間で、古墳時代から平安時代に位置づけられる1300軒以上の壱穴住居跡、120棟以上の掘立柱建物跡が調査されている。今年度の調査区の東部からは、掘立柱建物跡の集積域が確認されている。中心となる掘立柱建物跡は、三面庇を伴うものである。			
			奈良・平安	壱穴住居跡 88軒 掘立柱建物跡 17棟 大形壱穴伏遺構 4基 土坑 14基 溝跡 2条 井戸跡 2基 不明遺構 1基		土師器 須恵器 土製品 (土鎌・支脚) 石器・石製品 (砥石・紡錘車) 鉄器・鉄製品 (刀子・鎌・鏃・紡錘車・鏃先・釘・円金具・帯金具) 灰釉陶器 馬骨 皇朝十二銭 (鉄銭神寶) 銅製品 (鏡・腰帯具)		
	葛城	中 近 世	方形壱穴伏遺構 3基 掘立柱建物跡 1棟 道路跡 3条 井戸跡 1基	陶器 磁器 古銭				
	その他	時期不明	土坑 144基 溝跡 7条 柱穴列跡 3基					

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	6
第1節 遺跡の概要	6
第2節 基本層序	6
第3節 遺構と遺物	9
1 古墳時代の遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居跡	9
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	54
(1) 竪穴住居跡	54
(2) 掘立柱建物跡	228
(3) 大形竪穴状遺構	260
(4) 井戸跡	267
(5) 溝跡	270
(6) 土坑	272
(7) その他の遺構	284
3 その他の時代の遺構と遺物	288
(1) 方形竪穴状遺構	288
(2) 掘立柱建物跡	292
(3) 井戸跡	293
(4) 溝跡	294
(5) 道路跡	295
(6) ビット群	298
(7) 柱穴列跡	299
(8) 土坑	300
4 遺構外出土遺物	307
第4節 まとめ	319
付章 金属分析について	383
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、首都圏とつくば研究学園都市を結ぶつくばエクスプレスの早期開通をめざし、新線の建設とそれに伴う沿線開発に取り組んでいる。

平成6年8月18日、茨城県知事は、茨城県教育委員会あてに、新線沿線地域の土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成6年9月19日から27日にかけて現地踏査を行い、平成7年3月8日、島名・福田坪地区一体型特定土地区画整理事業地内に熊の山遺跡が所在する旨を回答した。さらに同日、茨城県知事から茨城県教育委員会あてに、同事業に係わる熊の山遺跡の取り扱いについて協議があった。

その結果、現状保存が困難であることから、平成7年3月9日、茨城県教育委員会は、茨城県知事あてに、熊の山遺跡を記録保存する旨を回答し、併せて調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受けた茨城県教育財団は、平成7年4月1日から熊の山遺跡の発掘調査を開始し、平成7年度は17,167㎡の調査を実施した。同様に、平成8年度は16,050㎡、平成9年度は33,421㎡の調査を実施した。

平成10年度は、当初の調査予定面積は36,451㎡であったが、遺構が多数確認されたことから、茨城県と協議の上、24,904㎡に面積を縮小して調査した。

第2節 調査経過

平成10年度の調査は、平成10年4月1日から平成11年3月31日までの1年間にわたって実施した。調査区は、2・4・8・10区である。以下、調査経過について、表に示す。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2区							表土除去					遺構調査
4区	遺構調査											
8区			遺構調査									
10区							表土除去	遺構調査				

なお、11月24日に茨城県県南都市建設事務所、茨城県教育庁文化課と三者協議を行い、遺構が多数確認されたために調査の終了が困難との見通しから、調査面積を24,904㎡に縮小することが決定された。今回報告する調査10区は、当初の予定通り、7,786㎡の調査を行った。10月以降は、調査の主力を4区から10区へと移し、8区と並行して調査を進め、3月からは2区の調査も並行して行った。

10区の調査に当たっては、遺構の覆土が薄く、遺構同士が重なり合っていることから、新旧関係の見極めに時間をかけて調査を進めた。さらに、掘立柱建物跡の集中域や遺跡の西部を南北に走る大溝と関わるような溝跡が確認されたことから、集落全体の様相を念頭に置きながら調査を進めた。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

熊の山遺跡は、茨城県つくば市大字島名字道場前1640番地ほかに所在している。

つくば市は、信仰と行楽で名高い筑波山を北端に、南西側に広がる標高約20～25mの平坦な台地上に位置している。この台地は、筑波・船敷台地と呼ばれ、東を霞ヶ浦に流入する桜川、西を利根川に合流する小貝川と、南流する二つの河川によって区切られている。それぞれの河川によって大きく開析された流域には、標高約5mほどの沖積地が発達している。両河川の間には、東から花室川、蓮沼川、小野川、東谷田川、西谷田川などの中小河川がほぼ北から南に向かって流れて、台地は浅く開析され、谷津や低地が細長く入り組んでいる。

筑波・船敷台地は、貝化石を産する海成の砂層である成田層を基盤として、その上に竜ヶ崎層と呼ばれる斜交層理の顕著な砂層・砂礫層、さらに常総粘土層と呼ばれる泥質粘土層(0.3～5.0m)、褐色の関東ローム層(0.5～2.5m)が連続して堆積し、最上部は腐植土層となっている¹⁾。

当遺跡の所在する島名地区は、つくば市の南西部、旧谷田部町域に位置する。当遺跡は、東谷田川と西谷田川に挟まれた舌状台地上の東谷田川に面した縁辺地に立地し、標高は約20mである。台地は主に畑地として耕作され、両河川の沖積低地は水田として利用されている。当遺跡の調査前の現況は畑地で、主に芝畑として利用されていた。

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺の小貝川や東谷田川、西谷田川、蓮沼川流域の台地上には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。

縄文時代には、小貝川や東谷田川、西谷田川に挟まれた台地上の縁辺部に集落が形成されるようになる。西谷田川左岸の台地上に所在する境松貝塚遺跡²⁾<2>は谷田部地区の代表的な遺跡であり、前期から中期にかけての遺構が確認され、とりわけ地点貝塚が確認されたことで注目される。熊の山遺跡周辺では、平成11年度からの茨城県教育財団の調査により、当遺跡から約1km南の島名前野東遺跡³⁾<36>、さらに500m南の島名境松遺跡⁴⁾<38>に中期や後期の遺構が存在することが明らかになった。

弥生時代の遺跡は当地域では少なく、谷田部地区では、中期から後期にかけての遺物が出土した境松貝塚遺跡などが確認されているだけである。

古墳時代になると、遺跡数は増加の傾向を見せるようになる。谷田部地区では古墳が数多く存在しており、昭和34年当時で古墳群11か所、古墳約300基が確認されている⁵⁾。それらのほとんどは径10m代の小円墳であり、地域的な群集墳のあり方を示している。当遺跡周辺では、当遺跡の北側に隣接して島名熊の山古墳群⁶⁾<18>があり、径7～12m、高さ0.5～1.2mの円墳11基が点在している。当遺跡からは、1辺が10mを超える後期の大型住居跡が複数軒確認されており、古墳群との関連がうかがえる。さらに、約1km北には島名関ノ台古墳群⁷⁾<10>があり、集落としては、今回報告する熊の山遺跡を想定することができる。

熊の山遺跡では、過去5年間の調査により、4～5世紀に台地の縁辺部に集落が出現し、6世紀になって台地上の全体に広がり、6世紀後半になり急速に発展していく様子が明らかにされている。また、熊の山遺跡周辺の古墳時代の集落跡としては、平成11年度からの当財団の調査により、当遺跡から南へ2kmの範囲内に島名前野遺跡⁸⁾<3>、島名前野東遺跡、島名境松遺跡、谷田部漆遺跡⁹⁾<39>などが所在することが明らかになった。

台地から低地へ下りる緩斜面部に立地する島名前野遺跡と島名前野東遺跡は、前期から後期にかけて断続的に生活が営まれた集落遺跡である。また、台地の縁辺部に立地する島名境松遺跡は後期、谷田部漆遺跡は中期の集落跡である。さらに、当遺跡の南に谷津を挟んで隣接する島名業師遺跡(7)からは、後期の所産と考えられる遺物が確認されている。これらの遺跡の分布から見ると、4世紀には台地の縁辺部や低地へ下りる緩斜面部に小集落が形成され、6世紀になると、熊の山遺跡に見られるように、台地のより内陸部まで開墾が進み、本格的な定住がなされて拠点的な集落形成が進められていった様子がうかがえる。

奈良・平安時代になると、律令体制の確立と共に、谷田部地区は河内郡に編入されることとなる。河内郡衙は、当遺跡から北東へ4.5kmの距離に位置する桜地区の西坪遺跡付近に所在する。『和名類聚抄』によれば、谷田部地区は河内郡八部郷に属し⁵⁾、仁徳天皇の紀八田若郎女のために八田部を置いた所と言われており、地名の語源になっている⁶⁾。さらに、島名は『和名類聚抄』にある「嶋名郷」に比定されており、当遺跡がこの地域の拠点的な集落であった可能性が高い。

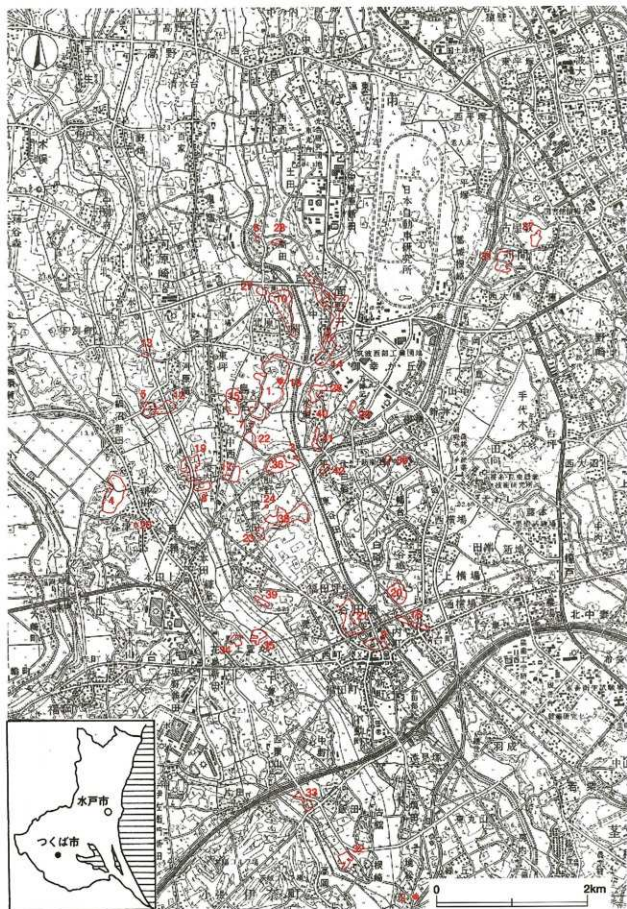
奈良・平安時代の遺跡は、近年の発掘調査の進行に合わせ、数多く確認されている。平成7年度からの当財団の調査により、当遺跡の他に、当遺跡から北東約3kmの神田遺跡、約3.5kmの刈間六十目遺跡⁷⁾(37)、約1km南の島名前野遺跡、島名前野東遺跡、約3.5km南の根崎遺跡、西栗山遺跡にこの時代の遺構が存在することが明らかになった。また、平安時代末には刈間、谷田部、小野崎などに在地領主層が出現したと伝えられており、今後の調査研究が待たれるところである。

中世になると、谷田部地区の大部分は田中荘と呼ばれることになる。鎌倉幕府の成立後、田中荘は小田氏の支配下に入り、室町時代には、小田氏配下の平井手氏が島名・面野井に住していたと伝えられている⁸⁾。中世以降の確認された遺跡は城館跡がほとんどであり、熊の山遺跡周辺では北北東へ約2kmの位置に平井手氏の居城と伝えられる面野井城跡があり、島名前野東遺跡からは方形に巡る堀を伴う居館跡が確認されている。熊の山遺跡は、中世には広大な墓城となっており、墓城に伴って地下式墳や方形竪穴状遺構が多数検出されている。当遺跡の西側には、13世紀末の開基と伝えられる妙徳寺が隣接しており、墓城との関連がうかがえる。

※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当遺跡番号と同じである。

注

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 茨城県教育財団「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第41集 1987年3月
- 3) 谷田部町教育委員会 谷田部町文化財保存会「谷田部町文化財報告Ⅰ」『古墳総覧』1960年
- 4) 茨城県教育財団「島名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第175集 2001年3月
- 5) 池邊 彌 『和名類聚抄郡里碑名考證』吉川弘文館 1981年2月
- 6) 中山信名 『新編常陸国誌』 嵩書房 復刻版 1978年12月
- 7) 茨城県教育財団「墓城一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第160集 2000年3月
- 8) 谷田部町教育委員会 谷田部の歴史編さん委員会『谷田部の歴史』1975年9月



第1図 熊の山遺跡周辺遺跡位置図

表1 熊の山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世
1	熊の山遺跡		○		○	○	○	○	22	島名八幡前遺跡				○	○	○
2	境松貝塚		○	○	○			○	23	島名タカドロ遺跡		○		○		
3	島名前野遺跡		○			○	○	○	24	島名一丁田遺跡		○				
4	真瀬山田遺跡		○						25	真瀬新田谷津遺跡		○				
5	下河原崎高山遺跡				○	○			26	水堀下道遺跡				○	○	
6	高田和田台遺跡				○	○			27	島名関ノ台遺跡				○		
7	島名薬師遺跡				○				28	高田遺跡				○	○	
8	島名榎内遺跡				○				29	水堀遺跡				○		
9	谷田部城跡						○	○	30	柳橋遺跡				○	○	
10	島名関ノ台古墳群				○				31	苜間神田遺跡	○	○	○	○	○	○
11	面野井古墳群				○				32	根崎遺跡	○	○		○	○	○
12	下河原崎高山古墳群				○				33	西栗山遺跡	○	○		○		
13	下河原崎古墳群				○				34	真瀬三度山遺跡		○		○		○
14	面野井南遺跡				○	○	○	○	35	上萱丸古屋敷遺跡		○		○		○
15	島名本田遺跡				○	○	○	○	36	島名前野東遺跡		○		○	○	○
16	谷田部台町古墳群				○				37	苜間六十目遺跡				○	○	○
17	島名榎内古墳群				○				38	島名境松遺跡		○		○		
18	島名熊の山古墳群				○				39	谷田部漆遺跡		○		○	○	
19	島名ツバタ遺跡		○		○				40	水堀屋敷添遺跡		○		○		
20	谷田部台成井遺跡		○						41	水堀道後前遺跡		○		○	○	
21	谷田部福田前遺跡		○		○	○			42	平後遺跡				○		○

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

調査区は、便宜上1～11区に分けられている(第3図)。平成7年度の調査区は1～4区、平成8年度の調査区は5～8区、平成9年度の調査区は2～9・11区、平成10年度の調査区は2・4・8・10区、平成11年度の調査区は4・5・8区である。今回報告するのは、平成10年度に調査した10区の7,786㎡分についてである。調査の結果、古墳時代、奈良・平安時代の集落跡を中心とする複合遺跡であることが確認できた。遺構は、堅穴住居跡110軒(古墳時代22軒、奈良・平安時代88軒)、掘立柱建物跡18棟(奈良・平安時代17棟、中世1棟)、大形堅穴状遺構4基、方形堅穴状遺構3基、土抗158基、溝跡7条、井戸跡3基、道路跡3条、不明遺構1基などである。出土した主な遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、埴埴、管状土鍾、支脚、紡錘車、支脚、砥石、腰帯具、鉄鍬、刀子、鎌、鉄斧、釘、門、古銭、不明銅製品などである。

第2節 基本層序

当遺跡は、標高20mほどの平坦な台地上に立地しており、その縁辺部にあたる、調査10区の南西部(Q10e3区)にテストピットを設定して、基本土層の観察を行った。土層は9層に分層され、土層断面図中、第2～7層が関東ローム層に、第8・9層が常総粘土層に相当する。以下、テストピットの観察から、層序を説明する。

第1層は、黒褐色をした耕作土層である。ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性・締まりとも弱い。層厚は8～11cmである。

第2層は、暗褐色をしたハードローム層への漸移層である。粘性は普通で、締まりは強い。層厚は15～21cmである。

第3層は、褐色をしたソフトローム層である。粘性・締まりともに強い。層厚は5～13cmである。

第4層は、褐色をしたハードローム層である。粘性・締まりともに強い。層厚は11～18cmである。

第5層は、褐色をしたハードローム層で、火山ガラス粒子をわずかに含んでいる。始良Tn火山灰(AT)を含む層と考えられる。粘性・締まりともに強い。層厚は4～7cmである。

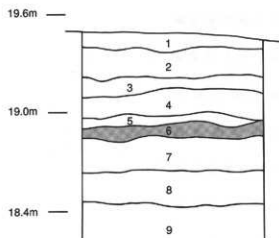
第6層は、暗褐色をしたハードローム層である。第II黒色帯に相当するものと考えられる。粘性・締まりともに強い。層厚は5～11cmである。

第7層は、褐色をしたハードローム層である。粘性・締まりともに強い。層厚は16～22cmである。

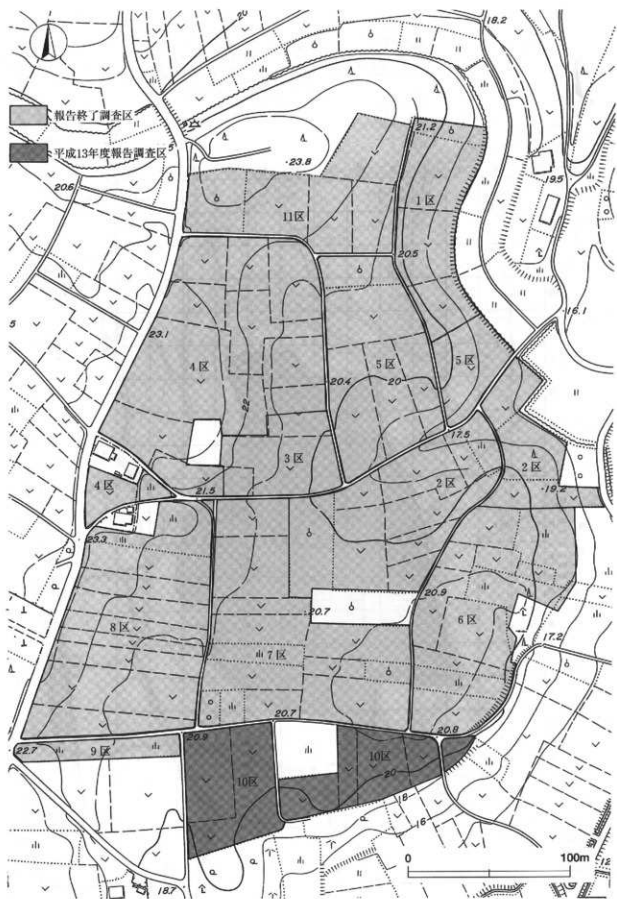
第8層は、にぶい黄褐色をした粘土層である。粘性・締まりともに特に強い。層厚は10～13cmである。

第9層は、黄褐色をした粘土層である。明黄褐色の砂粒を少量含んでいる。粘性・締まりともに特に強い。厚さは20cm以上あり、下層が未掘のため、本来の厚さは不明である。

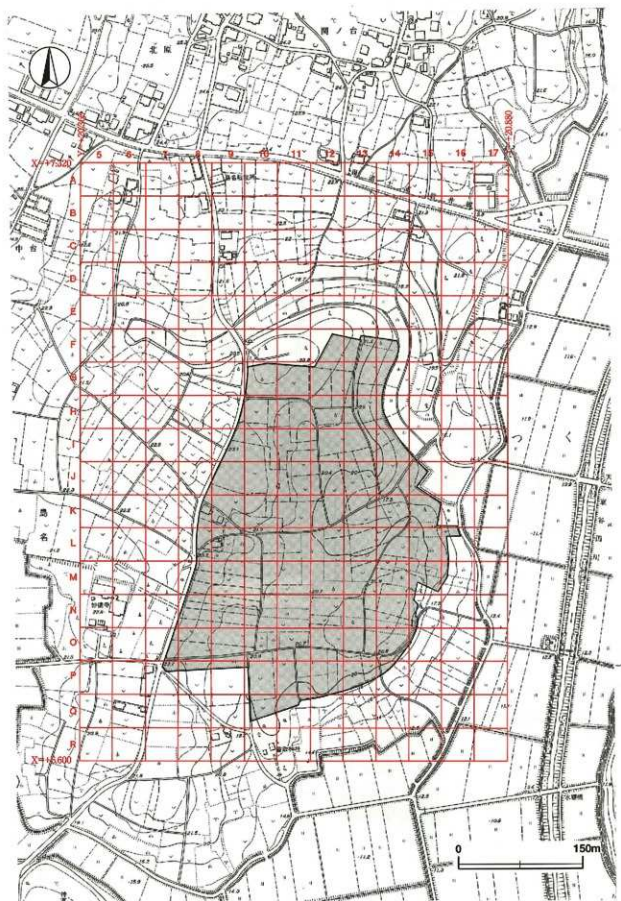
遺構は、第2層上面で確認している。



第2図 基本土層図



第3図 熊の山遺跡調査区設定図



第4図 熊の山遺跡グリッド設定図

第3節 遺構と遺物

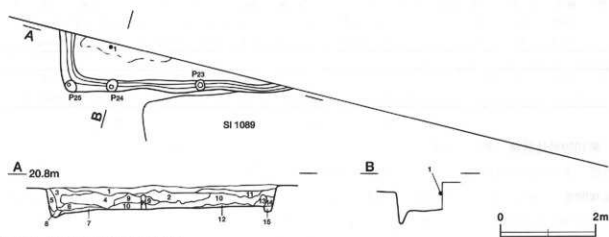
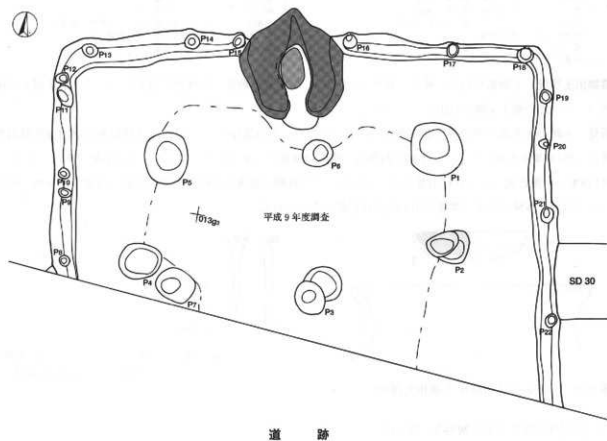
1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡22軒を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第658号住居跡（第5・6図）

位置 調査区東部のO13h2区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。本跡は調査7区と10区にまたがって位置しているため、7区の調査を平成9年度、10区の調査を平成10年度に実施した。



第5図 第658号住居跡実測図

重複関係 南側部分で第1089号住居跡を掘り込み、中央部を東西に第30号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸10.84m、短軸10.68mの方形で、主軸方向はN-11°-Wである。壁高は37~50cmで、各壁ともほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周囲している。

ピット 25か所。調査7区に位置するP1~P22は既に報告済みであり、今回の調査では新たにP23~P25が検出された。これらのピットは深さ26~30cmで、南壁際の壁溝内に位置しており、壁柱穴と考えられる。

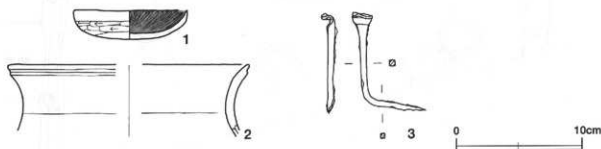
覆土 15層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量 | 9 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 2 褐色 ローム粒子多量 | 10 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 11 褐色 ロームブロック中量 |
| 4 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量 | 12 褐色 ロームブロック多量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 13 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 ローム粒子中量 | 14 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量 |
| 7 褐色 ロームブロック多量 | 15 褐色 ロームブロック多量 |
| 8 暗褐色 ロームブロック中量 | |

遺物出土状況 土師器片13点(坏6、高坏2、甕5)、釘1点が散在した状態で出土している。第6図1は南西コーナー部の覆土上層から出土している。

所見 本跡の北半部は平成9年度に調査が終了しており、その部分については、『茨城県教育財団文化財調査報告』第149集を参照されたい。本跡の時期は、甕の口縁部につまみ上げが見られ、坏が小形であることから、第149集での報告通り、7世紀前葉と考えられる。この時期の集落は遺跡の北部と南部、西部の3か所に形成されており、本跡は南部の集落の中心的な住居跡と考えられる。



第6図 第658号住居跡出土遺物実測図

第658号住居跡出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	8.0	2.2	-	雲母・長石	橙	普通	体部内面へつぎ、内面へつぎ	南西部上層	P10001, 70%
2	土師器	甕	[19.0]	(5.7)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	覆土中	P10002, 5%

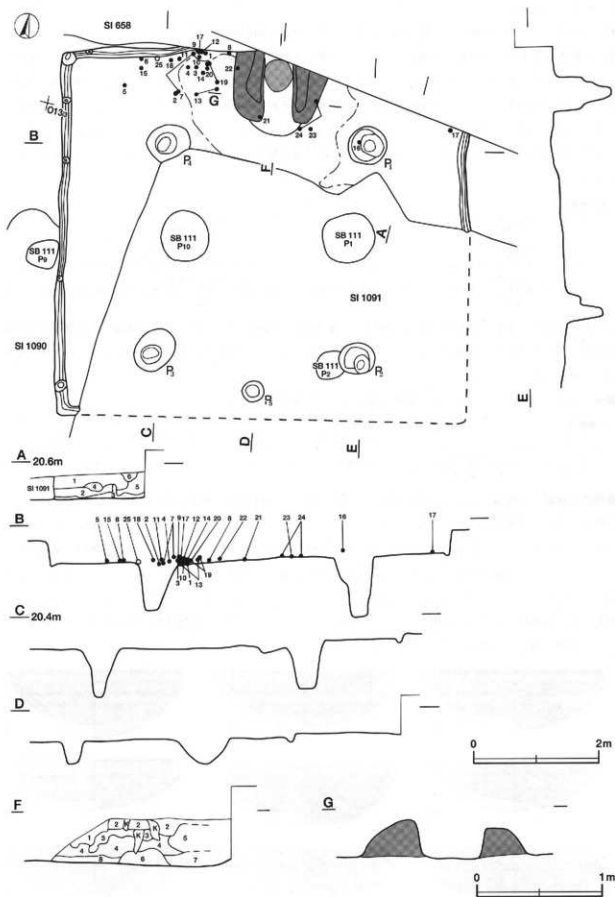
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
3	釘	11.4	5.7	0.4	16.0	鉄	頭部は叩きによる造り出し、脚部屈曲。	覆土中	M10001, 100%, P1.70

第1089号住居跡(第7~9図)

位置 調査区東部のO13i3区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 北壁際を第658号住居跡、南西部を第1090号住居跡、中央部から南部にかけてを第1091号住居跡と第111号掘立柱建物跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.53m、短軸5.78mの方形で、主軸はN-14°-Wである。壁高は12~38cmで、各壁とも外



第7图 第1089号住居跡実測图

方に若干開き気味に立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、竈の前面がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁際の中央部に砂質粘土で構築されている。竈の北側部分が調査区域外に位置しているために、壁外への掘り込みや煙道部の形状は不明であり、確認できた規模は、焚口部から火床部まで122cm、両袖幅150cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中、第4層が粘土粒子や砂粒を多量に含んでおり、天井部の崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存しており、両袖とも内側が火熱を受けて赤変している。火床面は、床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。また、火床面からは、多量の灰が検出されている。

竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒	5	灰暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
2	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒	6	暗赤褐色	灰多量、砂粒中量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
3	黒褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック・砂粒・炭化粒
4	灰褐色	粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒	8	強暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂粒・粘土粒子中量、ローム粒子少量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは60～93cmである。P5は深さ38cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。また、壁柱穴と考えられる小ピット6か所が壁溝内から検出されている。

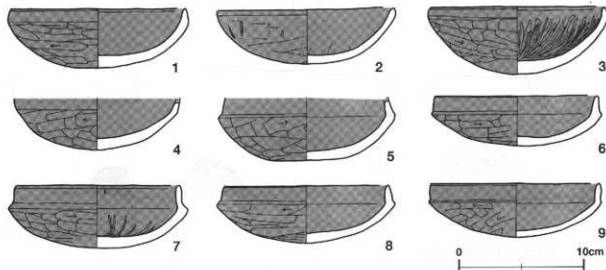
覆土 6層からなり、ブロック状の地積状況を示した人為堆積である。

土層解説

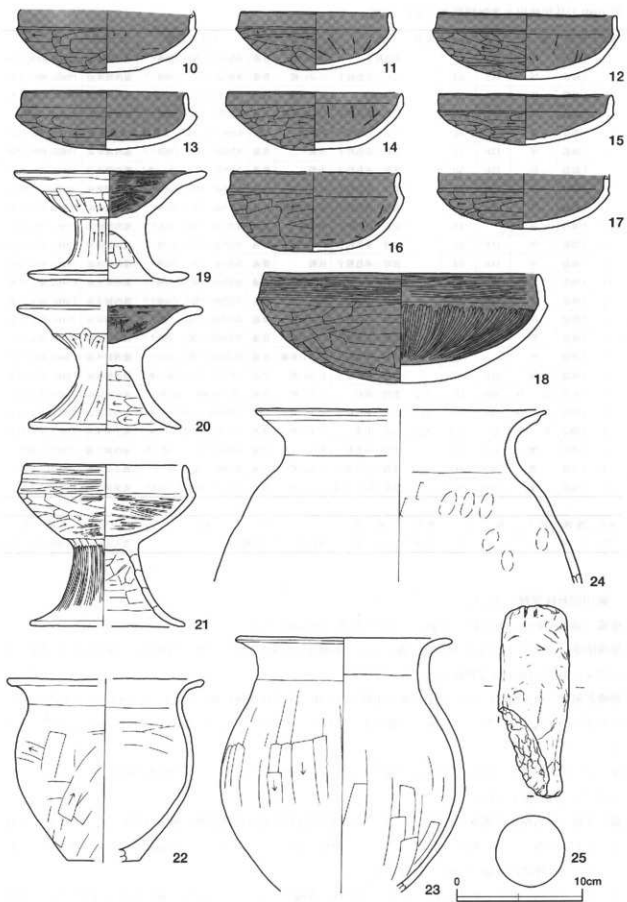
1	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子	4	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	5	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量	6	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片55点(杯28, 高杯3, 鉢1, 甕23)が竈付近の床面を中心に出土しており、図示した遺物はいずれも本跡に伴うものと考えられる。第8・9図1～15・18～20・22は竈の西側の床面からまとまって出土しており、いずれも完形、または完形に近い状態で検出されていることから、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。竈の手前からは21・23・24がいずれも破片の状態で出土している。また、火床部からは多量の灰が検出され、その中には貝殻片が微量含まれていたが、いずれも細片のため同定には至らなかった。

所見 竈の西袖脇の床面から杯類がまとまって出土しており、その付近が供膳具類の保管場所として機能していたと推測される。時期は、出土土器から6世紀後半と考えられる。



第8図 第1089号住居跡出土遺物実測図(1)



第9图 第1089号住居跡出土遺物実測図(2)

第1089号住居跡出土遺物観察表(第8・9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	13.8	4.6	-	赤色粒子	にぶい澄	普通	体部外面へう割り, 内面横ナテ	甕西側床面	P1062, 100%, PL39
2	土師器	坏	14.2	4.4	-	長石・赤色粒子	にぶい澄	普通	体部外面へう割り, 内面横ナテ	甕西側床面	P1063, 90%, PL39
3	土師器	坏	13.9	5.3	-	赤色粒子	にぶい濁	普通	体部内面横ナテ後へう磨き	甕西側床面	P1064, 80%, PL39
4	土師器	坏	-	(4.0)	-	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へう割り, 内面横ナテ	甕西側床面	P1065, 80%
5	土師器	坏	-	(5.0)	-	長石・赤色粒子	灰黄濁	普通	体部内面横ナテ, 内面へう磨き	北東部床面	P1066, 95%, PL39
6	土師器	坏	13.0	3.9	-	長石・赤色粒子	灰濁	普通	体部外面へう割り, 内面横ナテ	甕西側床面	P1067, 100%, PL39
7	土師器	坏	13.0	5.0	-	雲母・赤色粒子	赤濁	普通	体部外面へう割り, 内面へう磨き	甕西側床面	P1068, 95%, PL39
8	土師器	坏	13.0	4.6	-	雲母・赤色粒子	にぶい濁	普通	体部外面へう割り, 内面横ナテ	甕西側床面	P1069, 95%, PL39
9	土師器	坏	13.4	4.3	-	雲母・赤色粒子	にぶい赤濁	普通	体部外面へう割り, 内面横ナテ	甕西側床面	P1090, 95%, PL39
10	土師器	坏	-	(4.8)	-	長石・赤色粒子	明赤濁	普通	体部外面へう割り, 内面ナテ	甕西側床面	P1061, 90%, PL39
11	土師器	坏	11.5	4.5	-	雲母・赤色粒子	にぶい濁	普通	体部外面へう割り, 内面横ナテ	甕西側床面	P1062, 95%, PL39
12	土師器	坏	14.0	5.1	-	雲母・赤色粒子	灰濁	普通	体部外面へう割り, 内面横ナテ	甕西側床面	P1063, 90%, PL40
13	土師器	坏	12.9	4.8	-	長石・赤色粒子	にぶい澄	普通	体部外面へう割り, 内面横ナテ	甕西側床面	P1064, 80%, PL40
14	土師器	坏	14.0	4.5	-	雲母・赤色粒子	濁灰	普通	体部外面へう割り, 内面横ナテ	甕西側床面	P1065, 70%, PL40
15	土師器	坏	13.8	4.0	-	雲母・赤色粒子	にぶい濁	普通	体部外面へう割り, 内面ナテ	甕西側床面	P1066, 70%, PL40
16	土師器	坏	[13.5]	6.5	-	雲母・赤色粒子	にぶい濁	普通	体部外面へう割り, 内面ナテ	北東部下層	P1067, 50%, PL41
17	土師器	坏	-	(4.4)	-	長石・赤色粒子	にぶい赤濁	普通	体部外面へう割り, 内面ナテ	甕西側床面	P1068, 40%, PL41
18	土師器	鉢	21.8	8.7	-	雲母・赤色粒子	にぶい濁	普通	体部外面へう割り, 内面へう磨き	甕西側床面	P1069, 70%, PL40
19	土師器	高坏	15.0	13.7	11.2	雲母・長石	にぶい澄	普通	口縁部・胴部横ナテ, 底部内面へう磨き	甕西側床面	P1070, 95%, PL40
20	土師器	高坏	[14.0]	9.8	11.6	石英・赤色粒子	にぶい澄	普通	口縁部外面へう割り, 内面へう磨き	甕西側床面	P1071, 70%, PL40
21	土師器	高坏	12.7	12.8	[12.3]	長石・石英	にぶい澄	普通	口縁部外面へう割り, 内面へう磨き	甕手前床面	P1072, 80%, PL40
22	土師器	甕	[15.7]	14.4	[5.7]	雲母・赤色粒子	澄	普通	胴部内面横ナテ, 内面へう磨き	甕西側下層	P10073, 50%
23	土師器	甕	16.5	(20.2)	-	雲母・赤色粒子	にぶい澄	普通	体部外面へう割り, 内面へう磨き	甕手前床面	P10074, 40%
24	土師器	甕	[23.0]	(14.7)	-	雲母・長石・石英	にぶい澄	普通	胴部横ナテ, 内面へう磨き	甕東側床面	P10075, 20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
25	支脚	15.1	5.5	5.6	(441.0)	土製	円筒状, ナテ, 被熱痕有り。	甕火床面	DP1004, 90%, PL66

第1090号住居跡(第10図)

位置 調査区東部のO13i3区に位置し, 平坦な台地の南端部に位置している。

重複関係 北東部で第1089号住居跡を掘り込み, 東側部分を第1091号住居跡, 西側部分を第1096号住居跡, 北側部分を第111号掘立柱建物跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は3.30mで, 東西軸は東側部分を第1091号住居跡に掘り込まれ, 3.00mだけが確認できた。西側部分の形状から, N-9°-Wを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は15cmで, 各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 甕の前面から出入り口施設にかけてよく踏み固められている。壁際は確認された壁際を巡り, 全周していたと推定される。

竈 北壁に砂質粘土で構築されている。竈の中央部を第111号掘立柱建物跡に掘り込まれているために, 火床部の様相は不明であり, 袖部の遺存状態も悪い。規模は焚口部から煙道部まで85cmで, 壁外への掘り込みはほとんどなく, 煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

ピット 3か所。P1とP2は深さがそれぞれ12cmと20cmで, いずれも南壁際の竈に対する位置にあり, 硬化面を挟むように東西に並列していることから, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。P3は深さ37cmで,

形状から主柱穴の可能性はあるが、対応する柱穴は認められない。

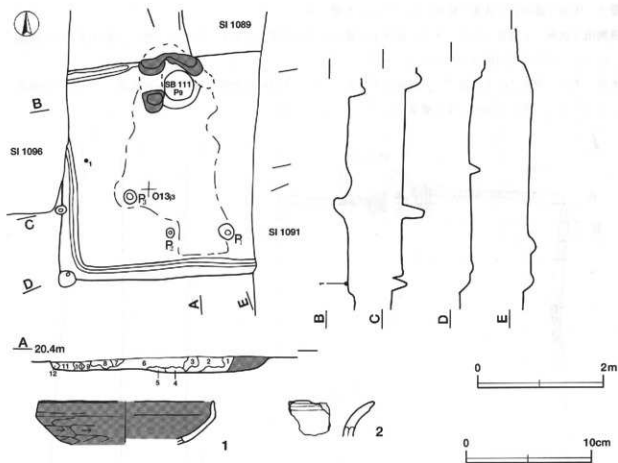
覆土 12層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 褐色 | ローム粒子多量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 褐色 | ローム粒子多量 |

遺物出土状況 土師器片63点(杯10, 高杯2, 甕51)がほぼ全域から散在した状態で出土している。それらの大部分は細片で、破断面が摩滅しており、本跡の廃絶後に混入したものと考えられる。図示できた土器は2点で、第10図1は西壁際の床面から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から6世紀後葉から7世紀前葉と考えられ、本跡はこの時期にあっては最も小形の住居跡である。



第10図 第1090号住居跡・出土遺物実測図

第1090号住居跡出土遺物観察表 (第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	[13.8]	(3.4)	-	長石・赤色粒子	にぶい地	普通	体部外面へう張り、内面ナデ	西壁際床面	P10076, 5%
2	土師器	甕	-	(3.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ	南西部覆土中	P10077, 5%

第1092号住居跡 (第11図)

位置 調査区東部のP13e7区に位置し、南に傾斜する台地の縁辺部に立地している。

重複関係 中央部を南北に第73・74号溝跡、西部を第1088号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 後世の耕作あるいは整地により南側部分を削平されているため、東西軸は4.65m、南北軸は2.60mだけが確認され、北側部分の形状からN-14°-Wを主軸とする方形または長方形と推定される。壁の立ち上がりは北壁と西壁の一部で確認され、壁高は4cmのため、立ち上がり具合は判然としない。

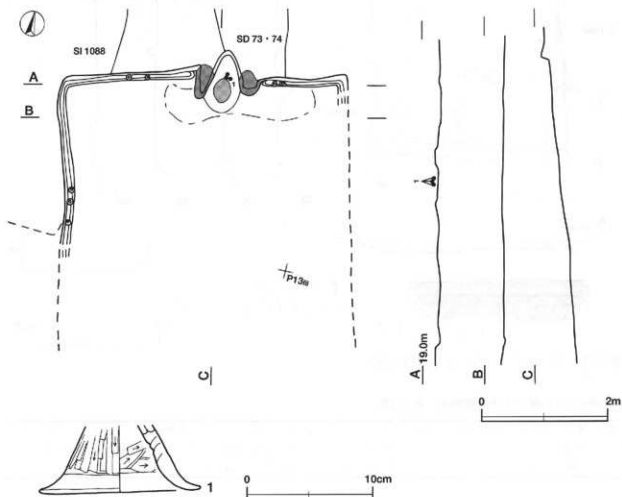
床 竈の周囲から硬化面が確認され、それ以外の部分は床面まで削平されているために不明である。壁溝は確認された壁際を巡っている。

竈 北壁中央部を壁外に30cmほど掘り込んで、砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm、両袖幅110cmである。袖部の遺存状態は良好で、床面と同じ高さの地山面の上に砂質粘土を用いて構築されている。火床面は北壁ラインより内側に位置しており、床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けてわずかに赤変している。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

覆土 床面が露出した状態で検出されたため、不明である。

遺物出土状況 土師器片5点(杯2, 高杯1, 甕2)が火床部から出土しただけである。第11図1は火床面から出土した破片3点が接合されたものである。

所見 本跡の時期は出土土器から6世紀後半と考えられ、本跡の南側部分は台地から低地へ下りる急斜面面であることから、黒色土層中に床が構築されていたと考えられる。



第11図 第1092号住居跡・出土遺物実測図

第1092号住居跡出土遺物観察表(第11図)

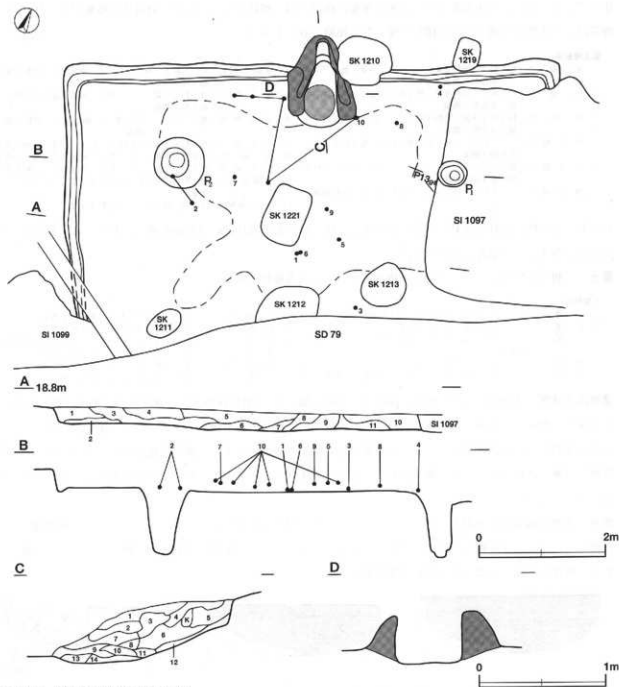
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏	-	(52)	120	赤色粒子	にぶい橙	普通	縦筋内・外面へり張り, 下溝線ナシ	竈火床面	P10100, 20%

第1098号住居跡(第12~14図)

位置 調査区東部のP13g3区に位置し, 南側に傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 東側部分を第1097号住居跡, 北壁部を第1210・1219号土坑, 中央部を第1211・1212・1213・1221号土坑, 第79号溝跡, 西側部分を第1099号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 本跡の南側部分が後世の耕作あるいは整地により削平されているために, 東西軸は8.25m, 南北



第12図 第1098号住居跡実測図

軸は4.60mだけが確認され、北側部分の形状からN-22°-Wを主軸とする方形または長方形と推定される。壁の立ち上がりは北壁と西壁の一部で確認され、北壁の最も残りのよい部分の高さが31cmで、いずれの壁も直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除きよく踏み固められている。壁溝は、確認された壁際を巡っており、全周していたと推定される。

竈 北壁の中央部を壁外に50cmほど掘り込んで構築されており、規模は、狭口部から煙道部まで140cm、両袖部幅105cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中、第1層が粘土粒子や砂粒を多量に含み、天井部の崩落土と考えられる。袖部は遺存状態が良好で、床面から火床部に向かって緩やかに傾斜した地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は床面の高さから10cmほど皿状に掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。また、火床面直上からは灰が多量に検出され、層状をなしており、貝殻片が微量出土している。煙道は、火床部から緩やかに外傾した後、急な傾斜で立ち上がる。

覆土層解説

1	暗褐色	粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	7	極暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量、粘土粒子微量
2	暗褐色	粘土粒子・砂粒多量、焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	8	暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子・粘土粒子微量
3	暗褐色	粘土粒子多量、砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	9	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック微量
4	暗赤褐色	ローム粒子・砂粒中量、焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	10	暗赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂粒微量
5	暗赤褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子・砂粒少量、粘土粒子微量	11	黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化微量
6	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、砂粒微量	12	暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量
			13	極暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、灰少量、ロームブロック微量
			14	にぶい赤褐色	灰多量、焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 2か所。主柱穴はP1・2の2か所で、深さはそれぞれ100cmと103cmを測る。P1・2に対応する主柱穴は、削平により遺存していない。

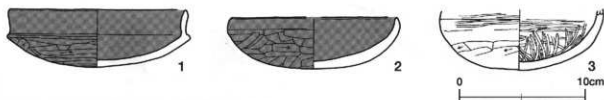
覆土 11層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

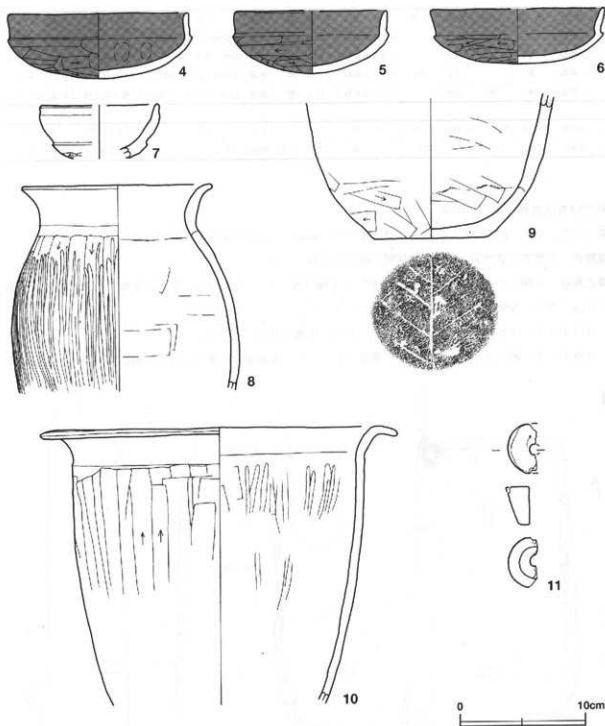
1	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量	6	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土ブロック・砂粒微量	8	黒褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・砂粒微量
4	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	9	黒褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
5	黒褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・砂粒微量	10	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量
			11	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片79点(坏7, 高坏4, 甕67, 甌1), 土製紡錘車1点, 鉄滓1点が覆土下層を中心に、北部域から散在した状態で出土している。坏は黒色処理が施された模倣坏が主体を占め、第13・14図1~4・6は床面直上からの出土である。8と10は竈付近の覆土下層から出土した破片が接合されたものであり、出土位置から竈で使用されていたと考えられる。また、火床部から灰とともに検出された貝殻片は、微小のため同定には至らなかった。

所見 本跡の南半部分が削平されているために、全体の形状を把握することはできなかったが、東西軸が8mを超えていることや主柱穴の深さが1mに達することなど、作りの堅固な大形の住居跡であったことが推測される。時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第13図 第1098号住居跡出土遺物実測図(1)



第14図 第1098号住居跡出土遺物実測図(2)

第1098号住居跡出土遺物観察表(第13・14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	13.9	4.4	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へう割り, 内面横ナデ	中央部床面	P10127, 95%, PL41
2	土師器	坏	[13.3]	4.0	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面へう割り, 内面横ナデ	北西部床面	P10128, 60%
3	土師器	坏	-	(4.7)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面へう割り, 内面へう割り	中央部床面	P10129, 60%
4	土師器	坏	[14.1]	5.1	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へう割り, 内面横ナデ	北壁際床面	P10130, 65%
5	土師器	坏	[12.0]	5.0	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へう割り, 内面横ナデ	中央部下層	P10131, 40%
6	土師器	坏	[13.9]	4.3	-	赤色粒子	黄灰	普通	体部外面へう割り, 内面横ナデ	中央部床面	P10132, 30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	土師器	坏	[9.2]	(4.2)	-	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へうすり、内面黄ナデ	北西部下層	P10133, 20%
8	土師器	壺	13.0	(16.3)	-	石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面へうすり(赤へり巻)、内面黄ナデ	壺東側床面	P10134, 50%, PL41
9	土師器	壺	-	(11.2)	9.6	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へうすり、内面黄ナデ	中央部下層	P10135, 20%
10	土師器	瓶	28.3	(22.0)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	細頸へうすり、内面黄ナデへり巻	壺手前下層	P10136, 40%, PL41

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
11	紡錘車	(4.0)	3.0	0.9	(22.6)	土製	ナデ、にぶい橙色を呈する。	北西部覆土中	DP0012, 45%, PL67

第1251号住居跡 (第15・16図)

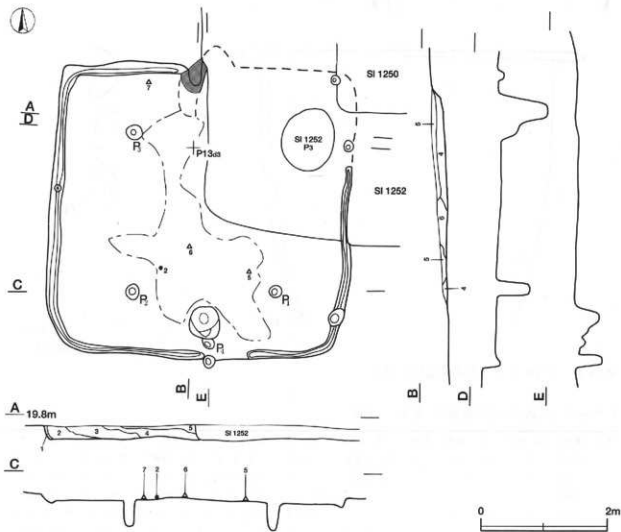
位置 調査区東部のP13d2区に位置し、南に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 北東部を第1250・1252号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.20m、短軸7.02mの方形で、主軸はN-3°-Eである。壁高は北壁の最も残りのよい部分で21cmを測り、各壁とも外方に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁中央部を掘り込んで、砂質粘土で構築されている。東側部分を第1252号住居跡に掘り込まれているた



第15図 第1251号住居跡実測図

めに、西袖の一部が確認できただけである。

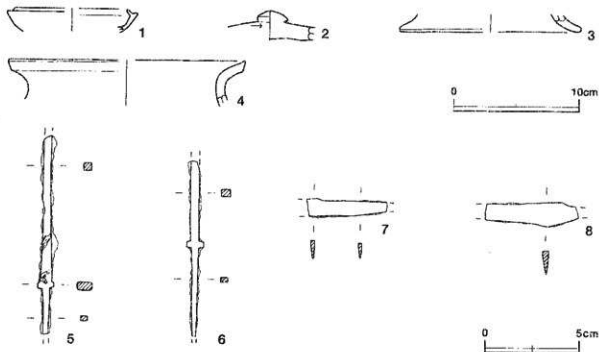
ピット 4か所。主柱穴はP1～P3が相当し、深さ43～54cmである。北東コーナー寄りに配されていたと推測される主柱穴は、第1250号住居跡によって掘り込まれており、検出されなかった。P4は深さ39cmで、南壁跡中央部の竈と対する位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。また、深さ10cmほどの小ピット4か所が壁溝内から検出されており、壁柱穴と考えられる。

覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | |
|---------------|----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量、砂粒微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 5 黒褐色 ローム粒子少量、砂粒微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量 | 6 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片15点(坏6, 高坏1, 甕8), 須忠器片4点(坏身1, 坏蓋1, 壺2), 鉄鏃2点, 刀子2点が床面を中心に散在した状態で出土している。いずれも細片のため、図ができたのは4点だけである。第16図2の須忠器坏蓋は南西部の床面から出土しており、天井部に扁平な腰宝珠状のつまみを有している。所見 本跡の時期は、出土土器から7世紀後半と考えられる。この時期になると、小形住居が増加する傾向にあり、本跡もその典型である。



第16図 第1251号住居跡出土遺物実測図

第1251号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	使成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須忠器	坏身	8.8	(1.8)	-	長石	黄灰	普通	体部ロケナデ	南西部覆土中	P10145, 5%
2	須忠器	坏蓋	-	(2.3)	-	長石・石英	灰	普通	天井部を覆うの同軸へう張り	南西部床面	P10146, 10%
3	土師器	高坏	-	(1.4)	(14.2)	長石・石英	にぶい橙	普通	甕部横ナデ	北東部覆土中	P10147, 5%
4	土師器	甕	18.8	(3.6)	-	安母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	北東部覆土中	P10148, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	鏃	(10.5)	0.5	0.4	(10.0)	鉄	覆土層から基部にかけての破片, 破片質付着, 軸孔潤有り。	南東部床面	M10037, PL09

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
6	鏃	(9.3)	0.5	0.4	(6.8)	鉄	刃部から基部にかけての破片、棒状開有り。	中央部床面	M10038, PL69
7	刀子	(4.3)	0.9	0.3	(3.7)	鉄	基部の破片、片開。	北壁部床面	M10039
8	刀子	(5.0)	1.4	0.4	(6.2)	鉄	刃先部・茎尻部欠損、両開。	覆土中	M10040

第1254号住居跡 (第17~19図)

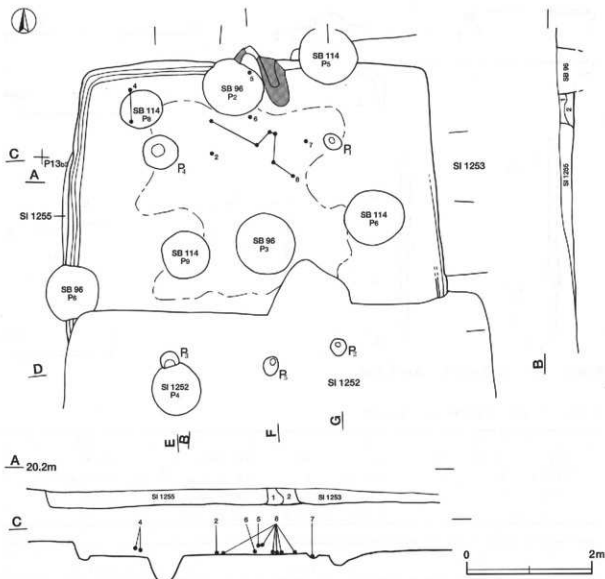
位置 調査区東部のP13b3区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 南側部分を第1252号住居跡、北東部を第1253号住居跡、西側部分を第1255号住居跡、中央部から北側部分にかけてを第96号掘立柱建物跡と第114号掘立柱建物跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 南側部分を第1252号住居跡に掘り込まれているため、南北軸は前述住居跡の床下から検出された出入口ピットの位置から5.50m前後と推測される。東西軸は6.02mであり、 $N-5^{\circ}-W$ を主軸とする方形と考えられる。壁高は最も残りのよい北壁で23cmを測り、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、全体的によく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部を壁外に20cmほど掘り込んで砂質粘土で構築されている。中央部から西側部分を第96号掘立



第17図 第1254号住居跡実測図

柱建跡に掘り込まれているため、東袖部と煙道部の一部のみが確認された。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

ピット 確認されたピットは5か所で、そのうちP1は第1253号住居跡の床下から、P2・3・5は第1252号住居跡の床下から検出されている。土柱穴はP1～P4の4か所が相当し、P4だけは他遺構との重複を受けずに本来の形状を留めて深さ44cmを測り、その他の柱穴の深さは21～32cmである。竈と対する位置にあるP5は深さ16cmで、竈に向かって斜めに掘り込まれており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

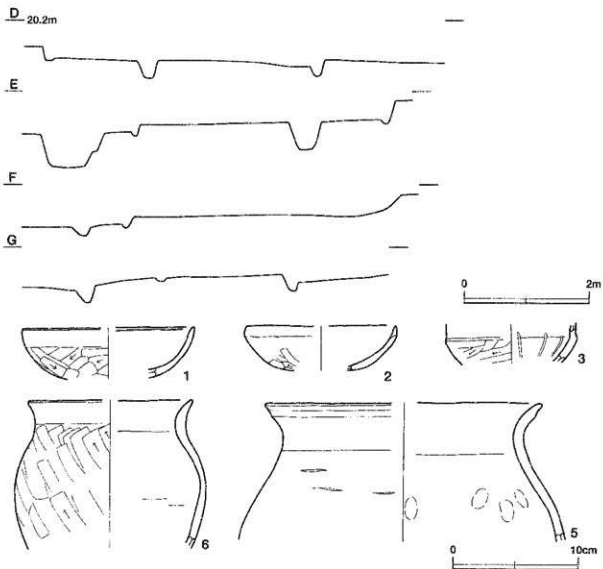
覆土 2層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

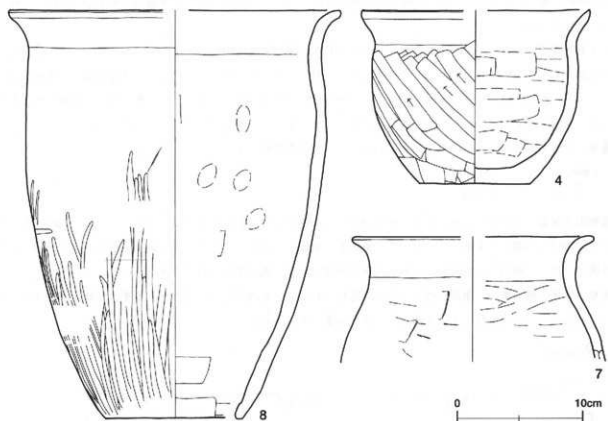
- 1 暗褐色 1mm粒中量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片55点（杯38、甕16、瓶1）が北壁寄りの覆土下層を中心に出土している。竈周辺では、第18・19図5が竈の火床部、2・6・7が竈手前の床面から出土し、また、8が竈手前の床面から破碎された状態で一括して検出されており、これらは出土位置から見て竈で使用されていたものと考えられる。

所見 本跡で他遺構との重複を受けていない部分はわずかに北西部分だけであり、本来の形状を把握することはできなかった。時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第18図 第1254号住居跡・出土遺物実測図



第19図 第1254号住居跡出土遺物実測図

第1254号住居跡出土遺物観察表 (第18・19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[13.6]	(4.0)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外壁ヘラ削り、内面練ナデ	P 4 覆土中	P10177, 70%
2	土師器	坏	[12.0]	(3.5)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部外壁ヘラ削り、内面練ナデ	覆土前床面	P10178, 20%
3	土師器	坏	-	(3.2)	-	雲母	褐色	普通	体部内面ヘラ削り、内面練ナデ	覆土中	P10179, 20%
4	土師器	甗	[18.2]	13.7	9.0	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外壁ヘラ削り、内面ヘラナデ	北西部下層	P10180, 60%, PL1-64
5	土師器	甗	[22.0]	(10.9)	-	雲母・長石・石英	灰褐	普通	体部外壁ヘラ削り、内面練ナデ、内面削り	竈火床部	FIG. 25, 80% (FIG. 26)
6	土師器	甗	[13.0]	(11.8)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外壁ヘラ削り、内面練ナデ、内面削り	覆土前床面	P10182, 30%
7	土師器	甗	[19.0]	(10.0)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ヘラナデ	覆土前床面	P10183, 10%
8	土師器	甗	[26.0]	32.5	10.6	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外壁ヘラ削り、内面練ナデ、内面削り	覆土前床面	P10184, 50%, PL1

第1303号住居跡 (第20・21図)

位置 調査区西部のQ10b8区に位置し、東側の埋没谷に向かって緩やかに傾斜した台地の南端部に立地している。

重複関係 西側部分を第1304号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.42m、短軸5.31mの方形で、主軸はN-9°-Wである。壁高は最も残りのよい部分で5cmしかなく、壁の立ち上がりは判然としない。

床 はほぼ平坦で、竈の前面から硬化面が検出されたものの、それ以外の床はやや軟弱である。壁溝は、確認された壁際を巡っていることから、全周していたと推定される。

竈 北壁の中央部を壁外に15cmほど掘り込んで、砂質粘土で構築されている。焚口部から煙道部まで65cmを測

り、袖部は遺存状態が悪いために、その痕跡が確認されただけである。付近の床面から粘土粒子や砂粒が検出されており、竈材の一部と考えられる。火床部は床面よりわずかに低くなっており、火熱を受けて赤変しているが硬化しておらず、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック中量 | 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | | |

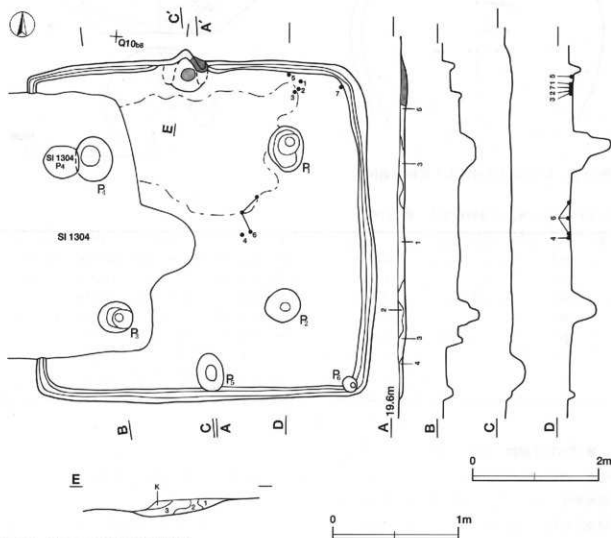
ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、P1・2の深さはそれぞれ62cmと34cmで、P3・4は第1304号住居跡の床下から検出され、深さ35cmと28cmである。P5は深さ27cmで、南壁際中央部の竈と対する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P6は深さ30cmで、南東コーナー部の壁溝内から検出されており、壁柱穴と考えられる。

覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

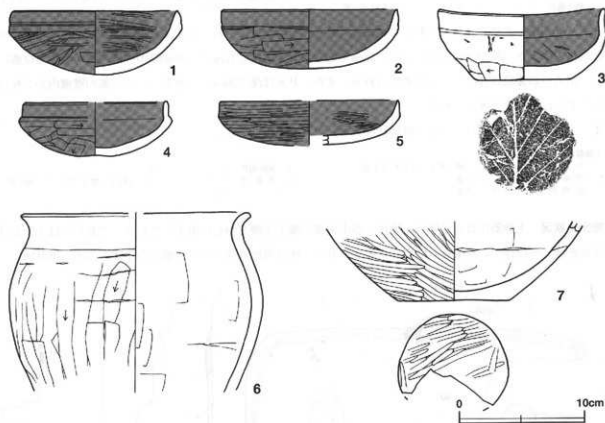
遺物出土状況 土師器片21点(坏11, 甕10)が中央部の覆土下層を中心に出土しており、これらのほとんどは住居廃絶後の埋設途中に投棄されたものと考えられる。坏は黒色処理された模倣坏が主体を占め、第21図1～



第20図 第1303号住居跡実測図

3は北東部の床面に重ねられた状態で検出されている。さらにその東側の床面から7が出土しており、これらは住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡は、床が軟弱であることや庵の火床部に使用した痕跡があまりみられないことなどから、存続期間が短かったと推測され、時期は出土土器から6世紀後半から7世紀前半と考えられる。



第21図 第1303号住居跡出土遺物実測図

第1303号住居跡出土遺物観察表(第21図)

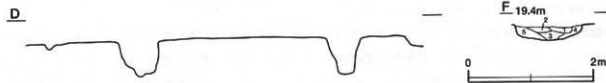
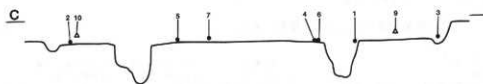
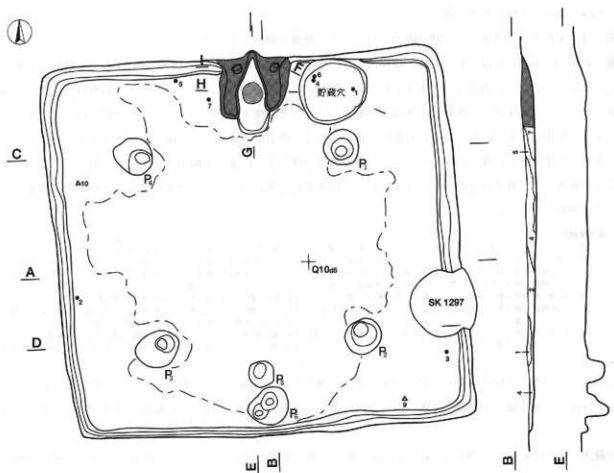
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	130	5.0	-	石英・長石	にぶい桜	普通	体部外へラ磨き、内面ヘラナデ	北東部床面	P1020, 90%, PL42
2	土師器	坏	139	4.7	-	石英	にぶい黄橙	普通	体部外へラ磨き、内面ヘラナデ	北東部床面	P1021, 90%, PL42
3	土師器	坏	130	5.6	7.4	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外へラ、下へラ磨き、内面ヘラナデ	北東部床面	P1022, 90%, PL41
4	土師器	坏	[112]	4.3	-	赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外へラ磨き、内面ヘラナデ	中央部床面	P10213, 30%
5	土師器	坏	[143]	(3.4)	-	長石	にぶい桜	普通	体部内・外面へラ磨き	北東部床面	P10214, 30%
6	土師器	甕	[178]	(14.2)	-	長石・赤色粒子	にぶい桜	普通	体部外へラ磨き、内面ヘラナデ・輪縁み肌、底部ヘラ磨き	中央部床面	P10215, 40%
7	土師器	甕	-	(6.3)	8.8	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外へラ磨き、内面ヘラナデ・輪縁み肌、底部ヘラ磨き	北東部床面	P10216, 10%, 体部外側灰化物付着

第1305号住居跡(第22・23図)

位置 調査区西部のQ10c4区に位置し、南に向かって緩やかに傾斜した台地の南端部に立地している。

重複関係 東側部分を第1297号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.46m、短軸5.97mの方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は最も残りのよい北壁



第22图 第1305号住居跡実測图

で28cmを測り、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、規模は、焚口部から煙道部まで130cm、両袖幅110cmで、壁外への掘り込みは認められない。袖部は、火床部に向かって傾斜した地山面の上にローム土混じりの砂質粘土を用いて構築されている。火床部は、床面から20cmほど掘りくぼめた後、焼土混じりのローム土を床面と同じ高さまで埋め戻して使用しており、作り替えの可能性が指摘される。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がり、その北寄りの部分からは深さ25cmのビット2か所が煙道を挟むように並んで検出されている。両ビットとも粘土部分を貫通して、底部は地山面まで達しており、防火壁的な施設のビットの可能性も考えられるが、用途については判然としない。

竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量	8	暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量	9	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
3	にぶい赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子中量、ローム粒子少量	10	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
4	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量	11	暗褐色	粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子少量
5	暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量	12	灰褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子少量
6	にぶい赤褐色	焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量	13	にぶい赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量
7	暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量	14	暗赤褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量
			15	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・焼土粒子少量

ビット 6か所。主柱穴はP1～P4の4か所で、深さは59～67cmである。P5・P6は、深さがそれぞれ29cmと36cmで、南壁際の中央部に主軸と同じ方向に並んで位置しており、出入り口施設に伴うビットと考えられる。

貯蔵穴 径100cmほどの円形で、深さは25cmを測り、竈の東側に付設されている。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

1	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	4	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量	5	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
3	暗赤褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量			

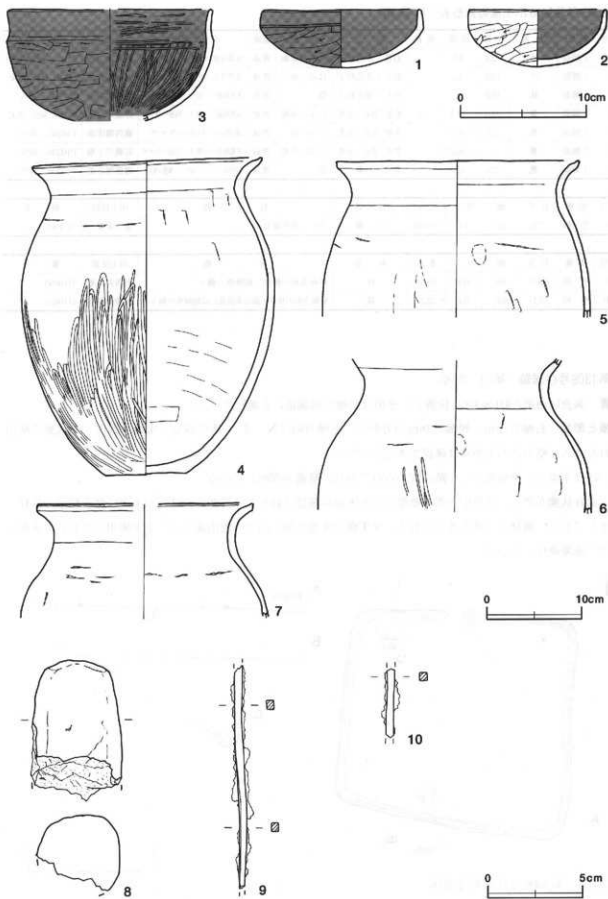
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック少量	5	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子中量	6	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
3	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	7	強暗褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
4	強暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量			

遺物出土状況 土師器片57点(坏2,鉢1,甕54),不明鉄製品2点,土製支脚1点がほぼ全域から散在した状態で出土している。第23図2は西壁際の床面直上からの出土である。甕は竈周辺に集中しており、とくに6は竈東側の貯蔵穴から破片の状態で一括して検出されている。また、7は西袖部付近、8の支脚は火床部から出土しており、いずれも竈で使用されていたものと考えられる。9の不明鉄製品は南壁際の覆土上層から出土しており、長さ12cmほどの棒状を呈し、紡錘車の紡輪の可能性が高く、投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。本跡は、他の住居跡と重複しておらず、7世紀代の住居の形態や土器の様相を窺い知ることのできる良好な資料といえる。また、本跡の西側は調査区域外になっており、当該期の集落はさらに西方に広がる可能性がある。



第23图 第1305号住居跡出土遺物実測図

第 1305 号住居跡出土遺物観察表 (第 23 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	124	4.5	-	石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	貯蔵穴上層	P10233, 100%, PL42
2	土師器	坏	108	4.5	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	西壁際床面	P10234, 80%, PL42
3	土師器	鉢	[160]	(8.7)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面へラ削り、内面へラ磨き	南東部床面	P10235, 20%
4	土師器	甕	24.0	33.3	8.4	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面へラナデ	貯蔵穴上層	P10236, 60%, PL42
5	土師器	甕	[25.6]	(16.7)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部内・外面へラナデ	竈西側床面	P10237, 20%
6	土師器	甕	-	(16.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面へラナデ	貯蔵穴上層	P10238, 20%
7	土師器	甕	[22.8]	(12.0)	-	長石・石英	橙	普通	体部内・外面へラ削り、内面へラナデ	竈西側床面	P10239, 20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
8	支脚	(7.5)	(4.8)	(4.1)	(144.0)	土製	ナデ、被熱痕有り。	竈火床部	DP10011

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
9	不明	(11.9)	0.6	0.5	(9.5)	鉄	断面方形の棒状、紡錘車の軸。	南西部上層	M10050
10	不明	(3.1)	0.5	0.4	(2.2)	鉄	断面方形の棒状、竈の基部成いは紡錘車の軸。	西壁際中層	M10051

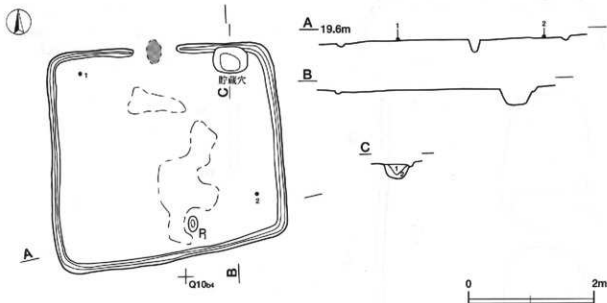
第1309号住居跡 (第24・25図)

位置 調査区西部のQ10a3区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長軸3.75m、短軸3.48mの方形で、主軸方向はN-4°-Wである。床面に露出した状態で検出されたため、壁の立ち上がりは確認できなかった。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 遺存状態が悪く、北壁中央部の壁際から火床面が確認されただけである。付近の床面に粘土粒子や砂粒が散在しており、竈材の一部と考えられる。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。



第24図 第1309号住居跡実測図

ピット 1か所。P1は深さ21cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 長軸50cm、短軸40cmの長方形で、深さは28cmであり、北東コーナー部に位置している。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

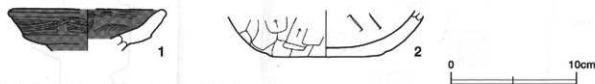
貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片8点(高坏1, 甕7)が床面から散在した状態で出土している。第25図1は北西コーナー部の床面, 2は南東コーナー部の床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、壁穴部に主柱穴をもたない小形の住居跡である。時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。



第25図 第1309号住居跡出土遺物実測図

第1309号住居跡出土遺物観察表(第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏	[122]	(32)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	坏内・外面へラ磨き	北西部床面	P10254, 10%
2	土師器	甕	-	(3.6)	[8.6]	雲母・長石	灰褐	普通	坏内・外面へラ磨き, 内面へラ磨き	南東部床面	P10255, 5%

第1317号住居跡(第26図)

位置 調査区西部のP10h7区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 西側部分を第1318号住居跡、北側部分を第1102号土坑、中央部を第1287号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.70m、短軸4.40mの方形であり、主軸方向はN-3°-Eである。壁の残存高は最も残りの良い部分で5cmのため、壁の立ち上がり具合は判然としない。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は周回している。

竈 北壁際に竈材の一部と考えられる粘土粒子や砂粒が散在していることから、北壁の中央部を第1102号土坑に掘り込まれたことにより覆滅したと考えられる。

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4で、深さは50~64cmである。P5は深さ19cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

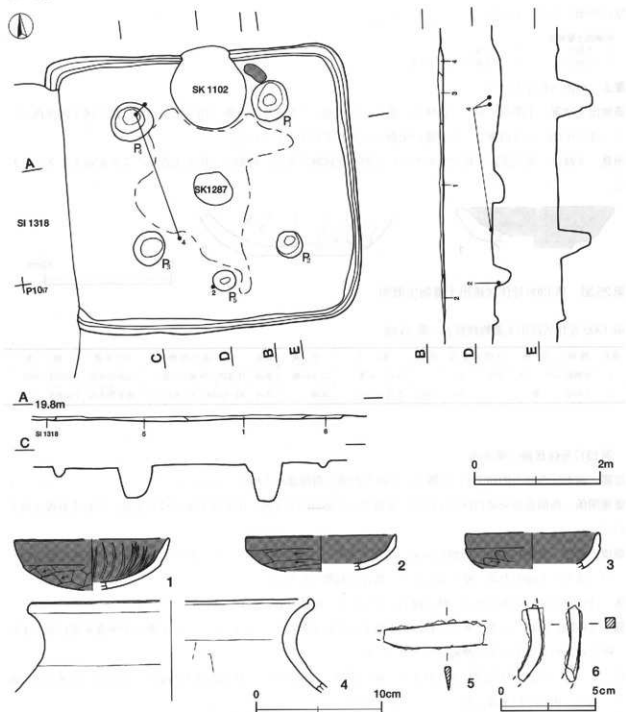
- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
3 黒褐色 ローム粒子少量
4 暗褐色 ロームブロック少量
5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
6 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片27点(坏9, 高坏1, 甕15, 甕2), 土製支脚2点, 刀子1点, 不明鉄製品(釘カ)

1点が床面や覆土下層を中心に出土している。第26図3・6はP3の覆土中から出土しており, 4は北西部の

覆土下層と中央部の床面から出土した破片が接合されたものである。

所見 本跡の竈部分は土坑に掘り込まれており、様相は不明である。時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。



第26図 第1317号住居跡・出土遺物実測図

第1317号住居跡出土遺物観察表(第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[12.2]	(4.0)	-	赤色粒子	黒灰	普通	外部内へラ削り、内面削り肌	覆土中	P10315, 30%
2	土師器	坏	[11.9]	(2.7)	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	外部内へラ削り、内面削り肌	南壁際床面	P10316, 10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土師器	環	[10.6]	(2.9)	-	雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	外部外唇へリ取り, 内面横ナデ	P 3 覆土中	P10317, 5%
4	土師器	甕	[22.2]	(7.4)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	外部外唇ナデ, 内面ヘラナデ	北部・中央部床面	P10318, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
5	刀子	(5.5)	(1.3)	0.3	(7.8)	鉄	刃部の破片, 刃先部欠損。	覆土中	M10070, PL68
6	釘	(4.0)	0.6	0.5	(5.4)	鉄	頭部欠損。脚部は彎曲。	P 3 覆土中	M10071

第1320号住居跡 (第27・28図)

位置 調査区西部のP11e2区に位置し, 南東側の埋没谷に向かって緩やかに傾斜した斜面部に立地している。
重複関係 南側部分を第1319号住居跡, 第1149・1230・1231号土坑, 北側部分を第1147・1148号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.80m, 短軸5.69mの方形で, 主軸方向はN-78°-Eである。壁の残存高は18~37cmで, 各壁とも直立する。

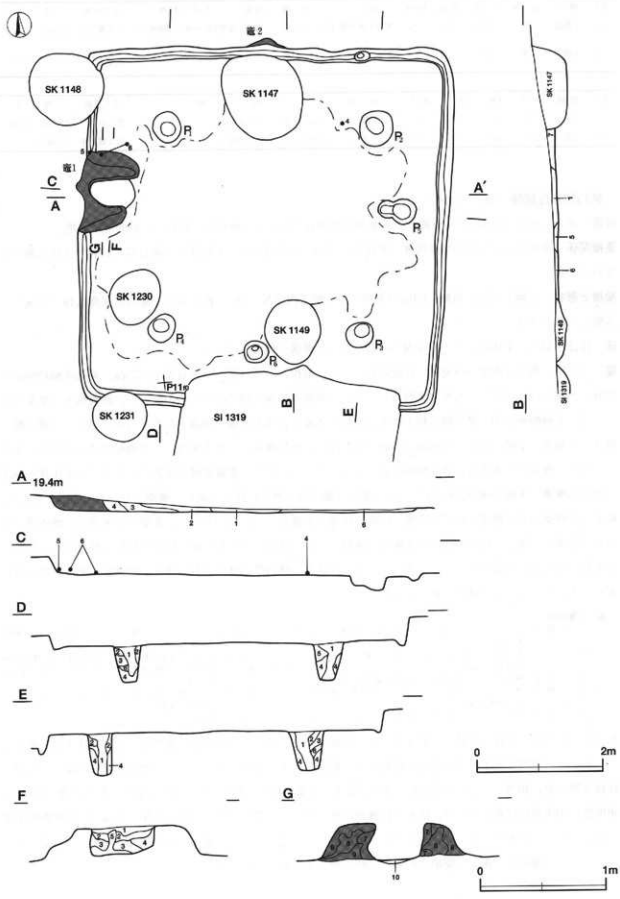
床 はほぼ平坦で, 全体的によく踏み固められており, 壁溝が周回している。

竈 2か所。竈1は西壁の中央部に付設されている。規模は, 焚口部から煙道部まで75cm, 両袖部幅120cmで, 壁外への掘り込みはない。天井部は崩落しており, 袖部は床面と同じ高さの地山面の上に砂質粘土で構築されている。土層断面図中, 第7層が粘土粒子や砂粒を多量に含み天井部の崩落土と考えられ, 第6~9層は断ち割りした袖部の土層である。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し, 火熱を受けてわずかに赤変しており, 煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。また, 竈構築材を除去したところ, 火床部や袖部の下から壁溝と床面が確認されたことから, 竈1は竈の作り替えに伴って新たに構築されたものと考えられる。竈1への移築以前に使用されていた竈2は既に破壊され遺存していないものの, 北壁の中央部から煙道部と思われる赤変した部分と付近の壁面や床面から竈材の一部の流出とみられる粘土粒子や砂粒が検出されており, 北壁際の中央部に付設されていたと考えられる。火床部や焚口部と推定される部分の痕跡は, 第1147号土坑に掘り込まれたことにより確認されなかった。

竈1土層解説

1 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化粒子・砂粒少量	6	にぶい赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量
2 灰褐色	粘土粒子・砂粒多量, ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量	7 暗赤褐色	焼土粒子多量, 粘土粒子・砂粒中量, 炭化粒子少量	
3 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量, 炭化物少量	8 灰褐色	粘土粒子・砂粒多量, ロームブロック中量, 焼土粒子少量	
4 暗赤褐色	焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化物・粘土粒子・砂粒少量	9 灰褐色	ローム粒子多量, 粘土粒子・砂粒中量, 焼土粒子・炭化粒子少量	
5 暗赤褐色	焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子・灰少量	10 暗赤褐色	焼土粒子多量	

ピット 6か所。主柱穴はP1~P4で, 深さは60~68cmである。土層断面の観察からは, 柱抜き取り痕が認められ, その周囲は粘土粒子を含んだ暗褐色土と褐色土で突き固められている。土層断面図中, 第1~3層が柱抜き取り痕に相当し, しまりが弱い。また, 第4~6層が埋土に相当し, しまりは強い。P5は深さ22cmで, 東壁際の中央部に位置しており, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ36cmで, 南壁際中央部の竈2に対する位置にあり, 硬化面の下から検出されていることから, 竈2の存続時には出入り口施設に伴うピットとして機能し, 竈2が廃絶されると同時に埋め戻されたと考えられる。



第27图 第1320号住居跡実測図

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|------------------------------|------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 褐色 | ロームブロック多量, 粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量 | 5 褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 6 褐色 | ロームブロック多量, 粘土粒子中量 |

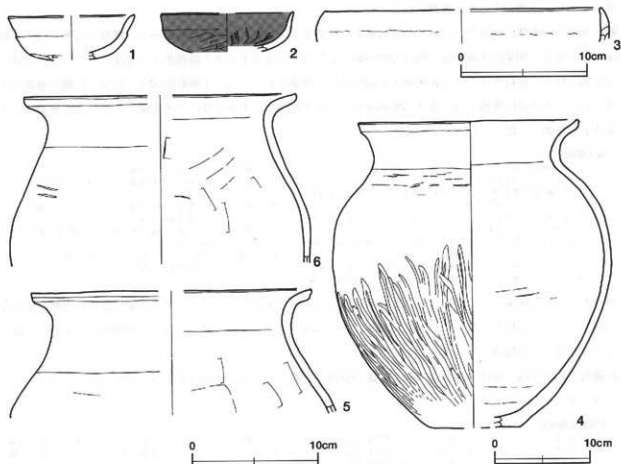
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 焦暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片54点(杯32, 鉢1, 甕21)が北部から西部にかけての覆土下層を中心に出土している。とくに竈1付近からの出土が顕著であり, 第28図1・2は竈1の覆土中, 5・6は竈1の北側の覆土下層から出土している。また, 4は北東部の床面からつぶれた状態で出土しており, 本跡発掘時に遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡は, 竈の作り替えに伴って出入り口施設に伴うピットも移動していることから, 住居を建て替えた可能性がある。時期は, 出土土器から7世紀後半と考えられる。



第28図 第1320号住居跡出土遺物実測図

第1320号住居跡出土遺物観察表 (第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	[10.0]	(3.5)	-	長石・石英	橙	普通	外壁へう張り, 内面滑ナテ	竈1覆土中	P10326, 20%
2	土師器	杯	[10.4]	3.0	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	外壁へう張り, 内面滑ナテ	竈1覆土中	P10327, 15%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土師器	鉢	[22.0]	(27)	-	石灰・赤色粒子	橙	普通	口縁内・外縁ナナリ・輪縁ナナリ	北東部覆土中	P10328, 5%
4	土師器	壺	[23.0]	32.3	[10.0]	雲母・灰石・石灰	にぶい赤褐色	普通	胴縁ナナリ・口縁ナナリ・輪縁ナナリ	北東部床面	P10329, 60%, PL42
5	土師器	壺	[22.2]	(9.9)	-	雲母・灰石・石灰	にぶい橙	普通	体部外面ナナリ, 内面ヘラナダ	壺1北側床面	P10330, 10%
6	土師器	壺	[21.6]	(13.4)	-	雲母・灰石・石灰	にぶい赤褐色	普通	体部内・外面内面ヘラナダ	壺1北側床面	P10331, 10%

第1321号住居跡 (第29・30図)

位置 調査区西部のP1019区に位置し、南東側の埋没谷に向かって緩やかな斜面部に立地している。

重複関係 北東部を第1323号住居跡、東部を第1325号住居跡、南部を第1326号住居跡と第10号道路跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 1辺が5.50mほどの方形で、主軸はN-1°-Eである。壁の立ち上がりは北西部と南東部で確認され、いずれも外方に開き気味に立ち上がり、壁高は15~20cmを測る。

床 やや東に傾斜した平坦な床面であり、ピットの内側がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っており、全周していたと推測される。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで150cm、両袖部幅120cmで、壁外への掘り込みは40cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面の上にローム土を主とする暗褐色土を基部にして、その上部に白色粘土粒子と砂粒を主とする灰褐色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中、第8~10層が袖部の土層である。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|---------------------------------|----|------|---------------------------------|
| 1 | にぶい赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 7 | 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 8 | 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子・焼土ブロック少量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量 | 9 | 黒褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・少量 |
| 4 | にぶい黄褐色 | 粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 10 | 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 5 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量 | 11 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 6 | 黒褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | | | |

ピット 5か所検出され、そのうちP1は第1325号住居跡の床下から、P3とP5は第1326号住居跡の床下から確認された。主柱穴はP1~P4で、深さは38~63cmである。P5は深さ31cmで、東壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 長径70cm、短径50cmの楕円形で、竈の東側に位置している。底面は東部が一段低くなっており、その部分の深さが23cmである。

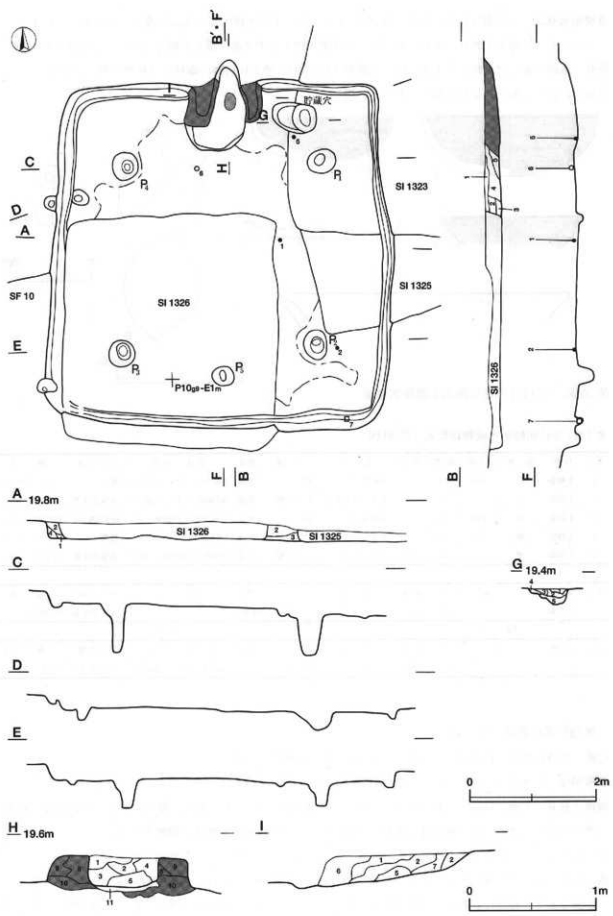
貯蔵穴土層解説

- | | | | | | |
|---|-------|-----------------------|---|------|-------------------------|
| 1 | 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子中量 | 4 | 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量 |
| 2 | 暗赤褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量 | 5 | 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 | 極暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | | | |

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

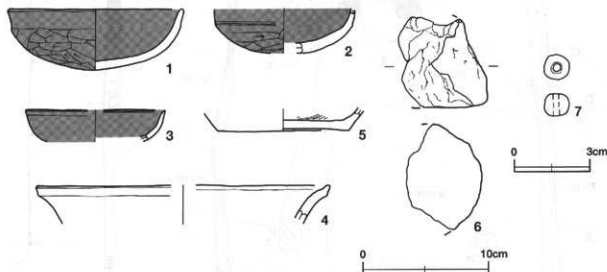
- | | | | | | |
|---|-----|---------------------|---|--------|-----------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 | にぶい黄褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | | | |



第29图 第1321号住居跡実測图

遺物出土状況 土師器片41点(坏23, 甕18), 小玉1点, 土製支脚1点が北部の覆土下層を中心に出土している。ほとんどが細片であり, 完形に近いものでは第30図1が中央部の覆土下層から出土しただけである。

所見 本跡の竈は白色粘土を主体に用いて構築されており, 他の住居跡の竈材とは材質が明らかに違っている。時期は, 出土土器から7世紀前半と考えられる。



第30図 第1321号住居跡出土遺物実測図

第1321号住居跡出土遺物観察表(第30図)

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	13.8	4.8	-	赤色粒子	橙	普通	体部外面へう張り, 内面ナデ	覆土中	P1032, 100%, PL43
2	土師器	坏	-	(3.5)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へう張り, 内面ナデ	南西部床面	P10332, 10%
3	土師器	坏	[11.0]	(2.5)	-	赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	南西部覆土中	P10333, 5%
4	土師器	甕	[23.1]	(3.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	覆土中	P10334, 5%
5	土師器	甕	-	(1.8)	[10.6]	長石・石英	にぶい橙	普通	顔面細り, 体部細り, 口縁ナデ	北東部床面	P10335, 10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	支脚	(72)	(7.3)	(8.4)	(309.0)	土製	上部欠損, 焼痕あり。	電手前床面	DP10014

番号	器種	径	長さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	小玉	1.0	0.9	0.3	0.9	蛇紋岩	穿孔部周辺に若干の平面を貫く球状, 両面穿孔。	南西部壁溝内	Q1000, 100%, PL48

第1327号住居跡(第31図)

位置 調査区西部のP11b1区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 北側部分を第1329号住居跡と第1234・1235・1243号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.70m, 短軸4.50mの方形で, 主軸はN-2°-Eである。壁の立ち上がりは北壁と西壁の一部でわずかに認められ, 壁高はいずれも3cmほどで, 立ち上がりの様子は判然としない。

床 はほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められており, 壁溝は北壁際を除いて周囲している。

竈 北壁の中央部に構築されており, 規模は焚口部から煙道部まで65cm, 両袖部幅90cmで, 壁外への掘り込みは40cmである。袖部は砂質粘土で構築されており, 火床部は浅い皿状に掘り窪められ, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道は, 上部が傾平されているために, 緩やかに外傾して立ち上がる様子が若干認められる程度で

ある。

覆土層解説

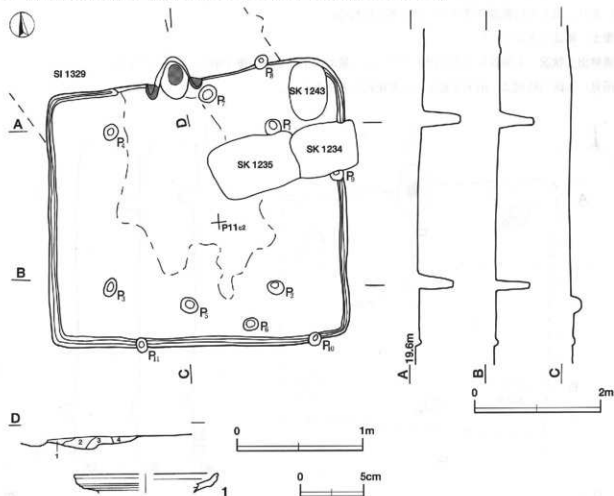
- 1 にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土粒子中量、炭化物少量 3 にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘土 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量
 粒子・砂粒少量

ピット 11か所。支柱穴はP1～P4が相当し、深さ50～62cmである。P5は深さ18cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・7は不明である。P8～P11はいずれも深さ15cm程度で、壁溝内に位置していることから、壁柱穴と考えられる。

覆土 床面がほぼ露出した状態で検出されたため、確認できなかった。

遺物出土状況 土師器片7点(坏4, 甕3), 須恵器片1点(甕)が出土している。第31図1はP6の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土した土師器片がいずれも古墳時代後期の所産と考えられることや、竈の煙道が壁外へ大きく掘り込まれて新しい様相を呈していることから、7世紀代と考えられる。



第31図 第1327号住居跡・出土遺物実測図

第1327号住居跡出土遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	甕	[11.4]	(1.5)	-	長石	灰	良好	口縁部内・外面クロコナデ	P6覆土中	P10372, 5%

第1332号住居跡（第32図）

位置 調査区西部のP10a8区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され、壁の立ち上がりが確認されなかったため、暗褐色をした床面の広がりやピットの位置から見て、 $N-0^\circ$ を主軸とする長軸4.30m、短軸4.00mの方形と推定される。

床 中央部にわずかに踏み固められた面が認められるだけであり、調査前に硬化面の大部分が削平されたことが考えられ、壁溝も認められない。

竈 北壁際の中央部に付設されており、遺存状態が悪く、火床面が確認できただけである。火床面は床面から若干掘り窪められて赤変硬化しており、付近の床面には竈材の一部と考えられる粘土粒子や砂粒が散在している。

覆土層解説

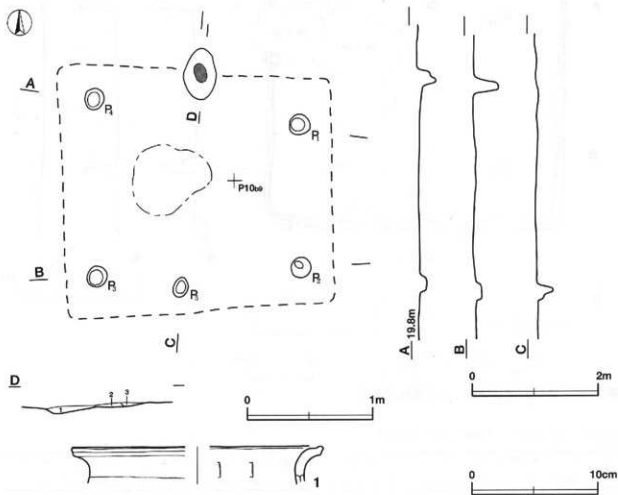
- | | | | |
|--------|--------------------------|----------|--------------------|
| 1 暗赤褐色 | 黄土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・砂粒少量 | 2 にくい赤褐色 | 黄土ブロック・炭化粒子中量、砂粒少量 |
| 3 暗赤褐色 | 黄土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量 | | |

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは12～40cmである。P5は深さ25cmで、竈に対する位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 確認できなかった。

遺物出土状況 土器器片4点が出土している。第32図1はP3の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から7世紀代と考えられる。



第32図 第1332号住居跡・出土遺物実測図

第1332号住居跡出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	[19.8]	(3.0)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	P3 覆土中	P10404, 5%

第1334号住居跡(第33図)

位置 調査区の西部, P11b4区。平坦な台地上に立地している。

重複関係 西側部分を第1337号住居跡, 東壁部分を第1339号住居跡, 南部の東寄り部分を第1109号土坑, 竈部分を第1110号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され, 壁の立ち上がりが確認できなかったため, 暗褐色を呈した床面の広がりやピットの位置から見て, $N-6^{\circ}-E$ を主軸とする1辺が4.20mの方形と推定される。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

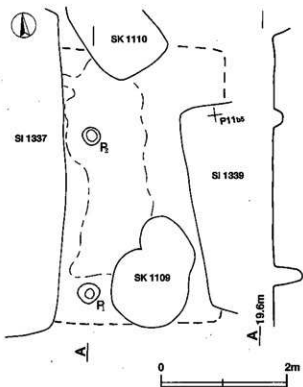
竈 第1110号土坑によって掘り込まれたと考えられ, 北部の床面に粘土粒子や砂粒が散在している。

ピット 2か所。P1は深さ43cmで, 南壁際と推定される位置にあり, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2は不明である。

覆土 確認されなかった。

遺物出土状況 土師器片6点(坏1, 甕5)が床面から散在して出土している。出土した土器はいずれも細片である。

所見 本跡の時期は, 重複関係から判断して6世紀代と考えられる。



第33図 第1334号住居跡実測図

第1337号住居跡(第34・35図)

位置 調査区西部のP11a3区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 東壁部分で第1334号住居跡を掘り込み, 北西コーナー部の覆土上層を第1338号住居跡, 北西コーナー部を第1118・1119号土坑, 中央部の西寄りを第1121号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.38m, 短軸5.10mの方形で, 主軸は $N-5^{\circ}-E$ である。壁高は10~15cmで, 各壁とも外方向に開き気味に立ち上がる。

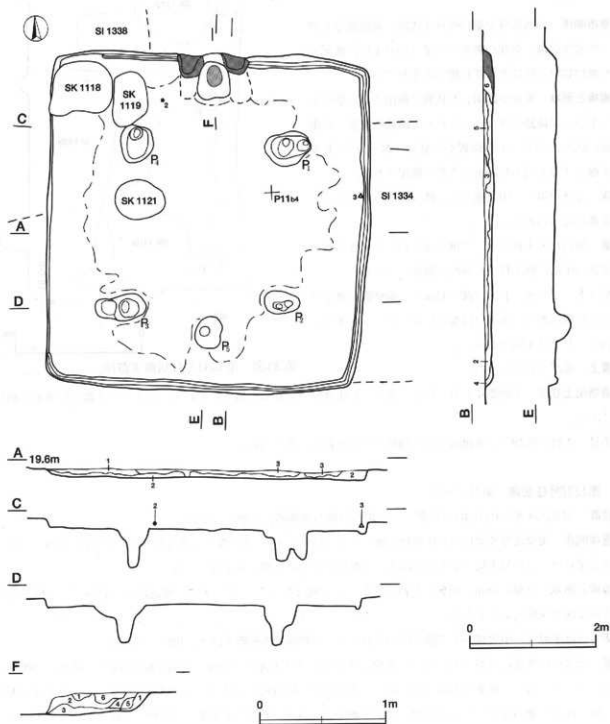
床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められており, 壁溝は西壁際を除き, 周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており, 規模は焚口部から煙道部まで70cm, 両袖幅105cmで, 壁外への掘り込みはほとんどない。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し, 赤変硬化しており, 煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------------|----------|--------------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 | 4 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物・粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 極暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 | 5 にぶい赤褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化物少量 | 6 にぶい赤褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量 |

ピット 5か所。主柱穴はP 1～P 4が相当し、深さは50～63cmであり、P 1・2からは柱の圧痕が2か所ずつ確認されている。P 5は深さ23cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第34図 第1337号住居跡実測図

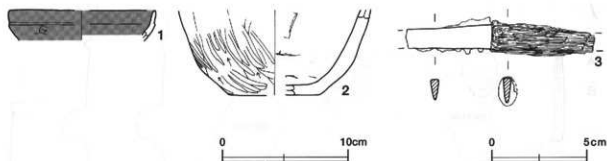
覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。土層断面図中の第6層に含まれる焼土や粘土粒子、砂粒は、竈から流出したものと考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	5 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量	6 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂少量
3 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量		
4 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量		

遺物出土状況 土師器片6点(坏4, 高坏1, 甕1), 刀子1点が散在して出土している。第35図2は甕手前の覆土中層から出土している。3の刀子は基部に木質が付着した状態で東壁際の覆土上層から出土しており、住居断絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 本跡からは柱の圧痕が2か所ある主柱穴が検出されており、立て替えが行われたことが想定される。時期は、出土土器から7世紀代と考えられる。



第35図 第1337号住居跡出土遺物実測図

第1337号住居跡出土遺物観察表(第35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[11.6]	(24)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へう張り, 内面焼ナシ	東家跡覆土中	P10783, 5%
2	土師器	甕	-	(6.8)	[7.2]	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面へう張り, 口部へう張り	甕手前中層	P10784, 5%

番号	器種	長さ	幅	重ね	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3	刀子	(10.0)	1.5	0.4	(18.0)	鉄	切先・果実欠損, 葉部柄木残存。	東壁際上層	M10081, PL68

第1342号住居跡(第36図)

位置 調査区北部のO11g3区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。また、本跡の北東10mの距離には6世紀後半と考えられる第1383号住居跡が位置している。

重複関係 東部を第1123号土坑、南西部を第1124・1125号土坑、中央部を第1126号土坑、南部を東西に第77号溝跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 北側部分が調査区域外に延びているため、東西軸は4.89m、南北軸は3.80mだけが確認され、南側部分の形状からN-13°-Wを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は30cmほどで、各壁とも外方に閉き気味に立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っており、全周していたと推測される。

竈 調査区域外に存在していると考えられ、検出されなかった。

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、P3は第77号溝跡に掘り込まれたことにより深さ20cmで、そ

れ以外の深さは30~41cmである。P 5は深さ13cmで、南壁際の中央部に位置しており、入出口施設に伴うピットと考えられる。

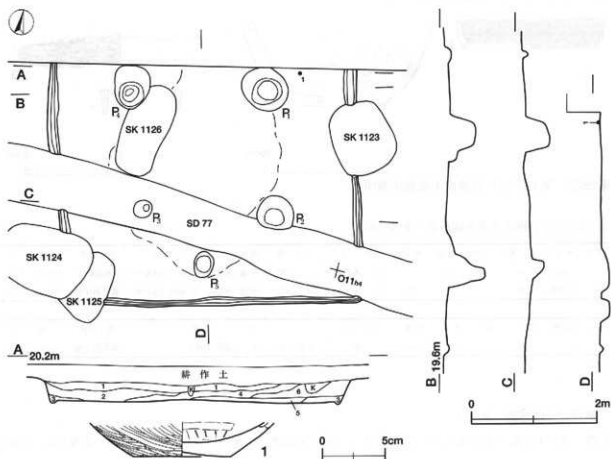
覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量 |

遺物出土状況 わずかに土師器片5点(坏2, 甕3)が出土している。第36図1はP1の東側の床面から出土している。

所見 木跡の時期は、出土土器が古墳時代後期の所産と考えられることや、近接する第1383号住居跡と住居の形態や主軸方向が近似することから、6世紀後半の可能性が高い。



第36図 第1342号住居跡・出土遺物実測図

第1342号住居跡出土遺物観察表(第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	-	(2.7)	[7.8]	雲母・長石・石英	にぶい水褐色	普通	鉢・甕類へのうねり、内面へのうねり	東壁際床面	P10424, 5%

第1366号住居跡(第37・38図)

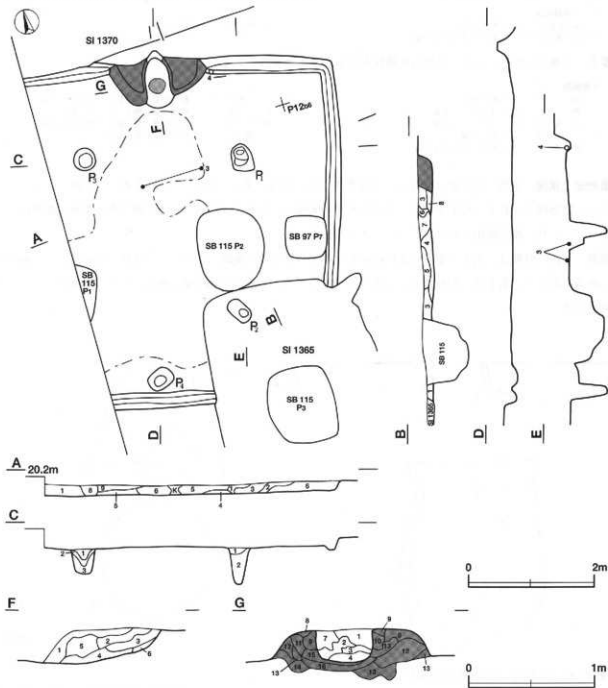
位置 調査区東部のP12b5区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 南東部を第1365号住居跡、北側部分を第1370号住居跡、中央部を第97・115号掘立柱建物跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 西側部分が調査区域外に延びているため、南北軸は5.48m、東西軸は4.94mだけが確認され、東側部分の形状から、N-17°-Eを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は10~12cmを測り、各壁とも外方に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っており、全周していると推定される。

竈 北壁に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで90cm、両袖部幅160cmである。袖部は、床面から20cmほど不整形に掘り込んだ部分にローム土を主体とした暗褐色土を充填し、その上部に砂質粘土混じりのローム土を用いて構築されている。火床面は床面と同じ高さの平坦面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。



第37図 第1366号住居跡実測図

竈土層解説

1 深 暗 赤 褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子少量	9 にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
2 暗 赤 褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	10 暗 赤 褐色	焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
3 暗 赤 褐色	焼土粒子少量, ローム粒子少量	11 灰 黄 褐色	ローム粒子・砂粒中量, 焼土粒子・粘土粒子少量
4 暗 赤 褐色	焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量	12 褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子・砂粒少量
5 暗 赤 褐色	ローム粒子・焼土粒子中量	13 暗 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
6 暗 赤 褐色	焼土粒子少量	14 灰 褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子・砂粒少量
7 暗 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	15 暗 赤 褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子少量
8 褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子・砂粒少量	16 にぶい赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット 4か所。主柱穴は西側部分が調査区域外に位置しているため3か所だけが確認され、P1～P3が相当する。深さは42～60cmを測り、推定される柱の径は約10cmである。P4は深さ13cmで、南壁際の竈と対する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

1 深 暗 褐色	ローム粒子少量	3 暗 褐色	ローム粒子少量
2 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量		

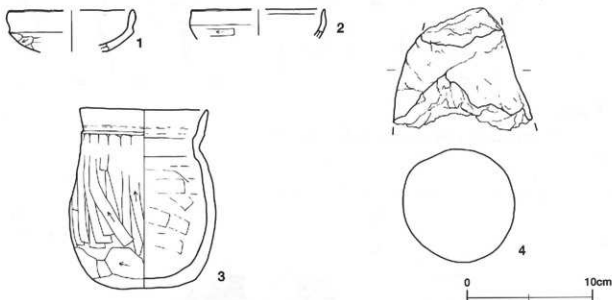
覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 褐色	ローム粒子中量	6 にぶい褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
2 褐色	ローム小ブロック中量	7 褐色	ローム粒子中量, 焼土ブロック少量
3 灰 褐色	ローム小ブロック中量	8 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
4 にぶい褐色	ローム粒子中量	9 灰 褐色	ローム粒子中量, 砂粒少量
5 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量		

遺物出土状況 遺物の出土量は少なく、土師器片13点(坏9, 甕3, 壺1), 土製支脚1点が出土しただけである。第38図2はP1の覆土中から、3は中央部の床面から出土している。4の支脚は竈の東側の壁溝内から出土しており、竈で使用されていたものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土土器から7世紀後半と考えられる。当遺跡におけるこの時期の住居跡は、主軸方向が真北を指すか、若干西に振れるものがほとんどであるが、本跡の主軸は東に触れており、集落内において特異である。



第38図 第1366号住居跡出土遺物実測図

第1366号住居跡出土遺物観察表 (第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[9.6]	(3.3)	-	赤色粒子	橙	普通	体部外壁へリ廻り, 内面横ナデ	北東部覆土中	P10500, 5%
2	土師器	坏	[10.6]	(2.1)	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	P1覆土中	P10501, 5%
3	土師器	壺	10.2	14.2	4.8	雲母・赤色粒子	灰	普通	唇部・底面へリ廻り, 内面へリナデ	中央部床面	P10502, 70%, P1.42

番号	器種	高さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4	支脚	(9.7)	(11.4)	(11.1)	(57.4)	土製	下半部欠損, ナデ, 被熱痕有り。	東東部壁溝内	DP10020

第1378号住居跡 (第39・40図)

位置 調査区東部のO12h8区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 北側部分を農道が通っているため, 南東-北西軸2.20m, 南西-北東軸3.30mが確認されただけであり, 南側部分の形状から, N-28°-Wを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は南東壁・南西壁ともに25cmで, いずれも外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で, 壁際を除きよく踏み固められており, 壁溝は確認された壁際を巡っている。

竈 農道下の北壁際に付設されていたと推定される。

ピット 1か所。P1は深さ12cmで, 南コーナー部の壁溝内に位置しており, 壁柱穴と考えられる。また, 壁溝内からは深さ10cmにも満たない小ピットが16か所確認されている。

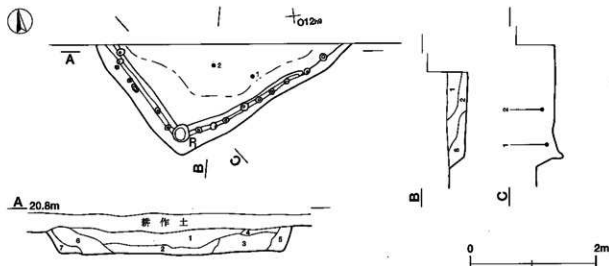
覆土 8層からなり, レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量 | 5 灰暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | 6 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量 | 7 褐色 ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量 | 8 褐色 ローム粒子多量 |

遺物出土状況 出土遺物は少なく, 土師器片13点(坏1, 鉢1, 甕11)が出土しただけである。第40図1と2は, いずれも南東壁寄りの覆土下層から出土している。

所見 本跡の大部分は幅2~3mほどの農道の下層にあり, その北側からは遺構が検出されていないことから, 本跡は小形ないし中形の住居跡と想定される。時期は, 出土土器から6世紀後葉から7世紀前葉と考えられる。



第39図 第1378号住居跡実測図



第40図 第1378号住居跡出土遺物実測図

第1378号住居跡出土遺物観察表(第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[135]	4.2	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面へう割り、内面へう磨き	西奥障子下層	P10573, 40%
2	土師器	碗	[128]	(4.1)	-	石英	にぶい黄橙	普通	体部外面へう割り、内面磨ナテ	南部下層	P10574, 20%

第1380号住居跡(第41~44図)

位置 調査区東部のP13a1区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 北東部を第111号掘立柱建物跡と第1182号土坑、南東部を第96号掘立柱建物跡、南西部を第98号掘立柱建物跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 1辺が5.65mほどの方形で、主軸はN-15°-Wである。壁高は30~52cmで、南壁は外傾し、それ以外の壁は直立する。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 2か所。竈1は北壁中央部やや東寄りにつ設されている。南東部を第1182号土坑に掘り込まれているために、火床部の北側部分から煙道部にかけてと西袖部が確認できただけである。西袖部は、床面から10cmほど掘り込んだ部分にローム土を主体とした暗褐色土を床面の高さまで充填し、その上に砂質粘土を用いて構築されている。火床面は火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。竈2は、竈1の西側である北壁の中央部から検出されている。煙道部は壁外へ長く延びて緩やかに立ち上がる形状で、壁外への掘り込みは140cmを測る。天井部や袖部は遺存しておらず、火床部が想定される位置には壁溝が巡っており、後述する出入口施設に伴うピットが竈2と対する位置にあることから、竈2から竈1への作り替えが行われたことが想定される。

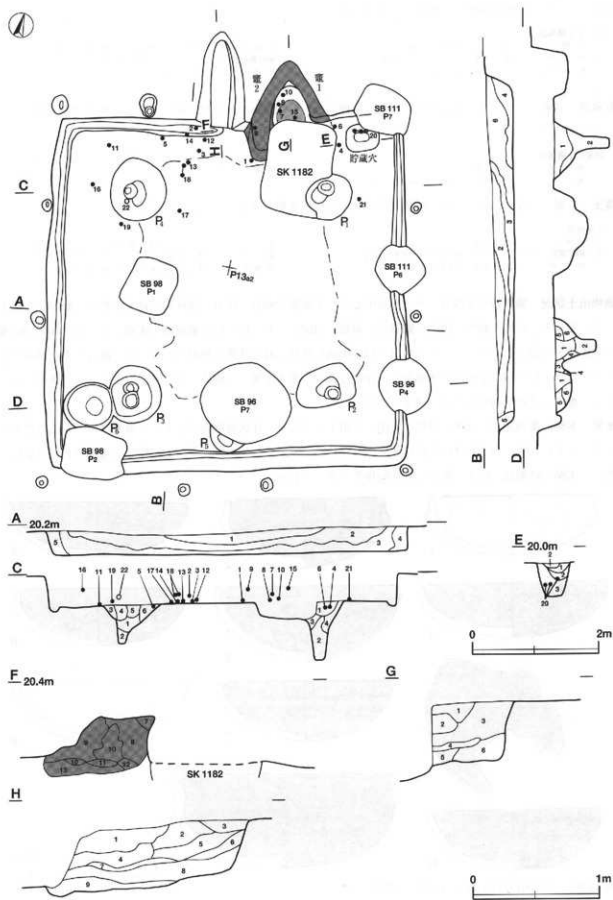
竈1土層解説

1 黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	7 灰黄褐色	粘土粒子多量、砂粒中量
2 黒暗褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量	8 暗赤褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量、炭化粒子少量
3 暗赤褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・炭化物少量	9 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子中量、砂粒少量
4 黒褐色	炭化粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量	10 にぶい黄褐色	粘土粒子多量、砂粒中量、ローム粒子少量
5 にぶい赤褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・砂粒少量	11 褐色	ローム粒子中量
6 灰黄褐色	炭化粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子少量	12 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量
		13 暗褐色	ローム粒子中量

竈2土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量、砂粒少量	6 灰褐色	ローム粒子・砂粒中量、粘土粒子少量
2 灰黄褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量	7 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、砂粒少量
3 灰褐色	ローム粒子・砂粒中量、焼土粒子・粘土粒子少量	8 灰褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量
4 灰褐色	ローム粒子・砂粒中量、焼土粒子・粘土粒子少量	9 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒中量、粘土粒子少量
5 灰赤色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒中量		

ピット 6か所。主柱穴はP1~P4で、深さ63~96cmである。土層断面の観察から柱抜き取り痕を確認することができ、推定される柱の径は約15cmである。P5は深さ25cmで、南壁際中央部の竈2と対する位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ27cmで、P3の西側に位置しており、補助的な柱穴と考えられる。また、壁の外側には径20cm、深さ17~23cmのピット10か所が、1~2mの間隔で住居を囲むように



第41图 第1380号住居跡実測图

検出されており、壁を構築した壁柱穴と想定される。

ビット土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量 |

貯蔵穴 北東コーナー部に付設されている。長軸55cm、短軸45cmの長方形、深さ52cmで、底面は中央部がややくぼんでいる。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量 | | |

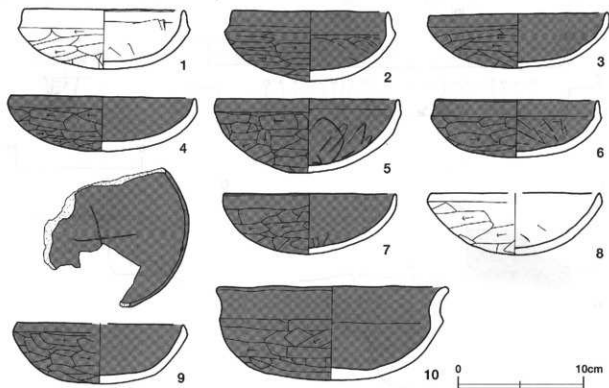
覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

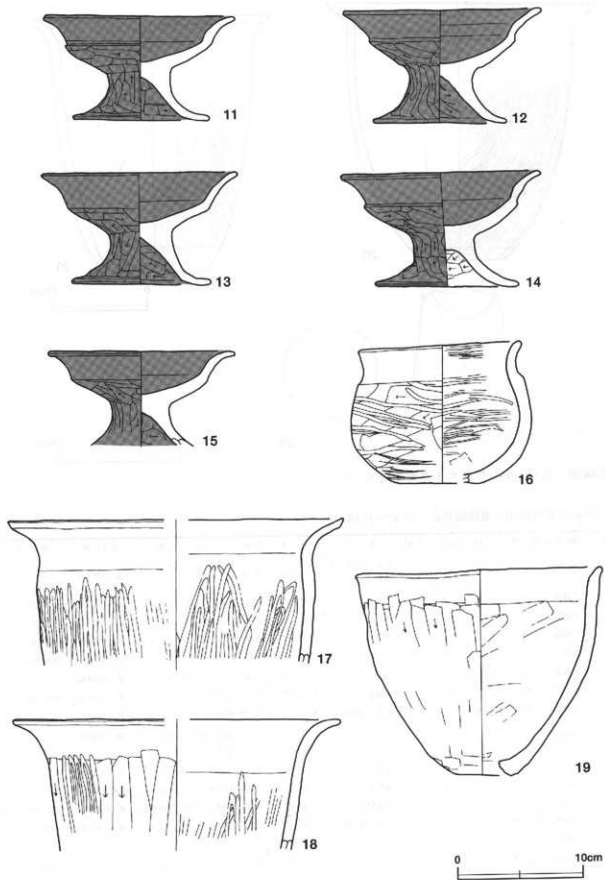
- | | | | |
|--------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量 | 4 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 竈周辺や北西コーナー部を中心に、土師器片82点（坏31、高坏13、鉢1、甕16、甔21）が出土している。とくに坏や高坏の出土が顕著で、第42～44図1～6・13・14は竈周辺の床面、7・8・10・15は竈の火床部から出土しており、そのうち11と14は床面に伏せられた状態で検出されている。甔は5点を図示することができ、17・19は北西部の床面から、20は貯蔵穴の覆土中層から破砕された状態でまともまて検出されている。甕はいずれも細片のため、図示できなかった。

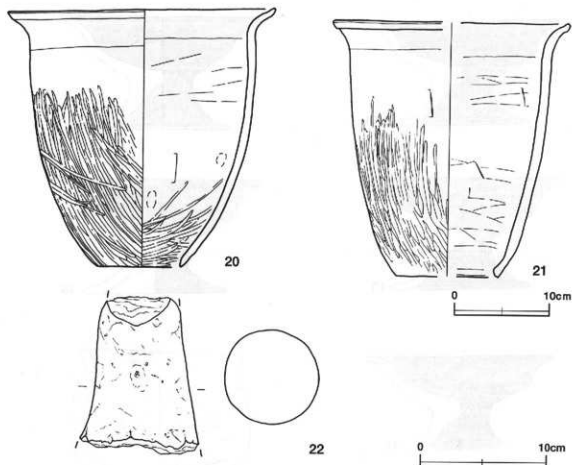
所見 本跡の竈周辺からは坏や高坏が集中して出土しており、住居廃絶時にまとめて遺棄されたものと想定される。とくに、11・14の高坏は床面に伏せられた状態で検出されており、意図的に伏せて遺棄された可能性がある。本跡の時期は、出土土器から6世紀後半と考えられる。



第42図 第1380号住居跡出土遺物実測図(1)



第43图 第1380号住居跡出土遺物実測図(2)



第44图 第1380号住居跡出土遺物実測図(3)

第1380号住居跡出土遺物観察表(第42~44图)

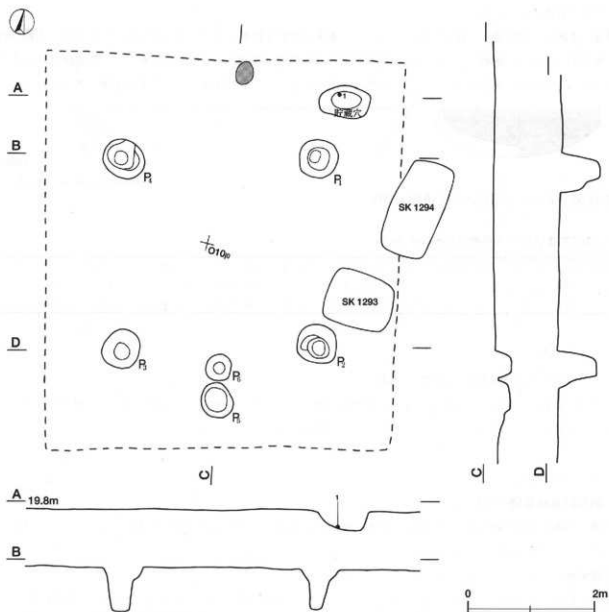
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	126	48	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面へラナゲ	竈1西側床面	P10577, 100%, PL43
2	土師器	坏	123	5.5	-	雲母	黒褐	普通	体部外面へラ削り、内面へラナゲ	竈2手置下層	P10578, 100%, PL43
3	土師器	坏	143	4.2	-	赤色粒子	褐灰	普通	体部外面へラ削り、内面削ナゲ	竈2手置床面	P10579, 95%, PL44
4	土師器	坏	145	4.3	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面削ナゲ	竈1東側床面	P10580, 80%, PL43
5	土師器	坏	144	5.8	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り、内面削ナゲ	竈1東側床面	P10581, 90%, PL44
6	土師器	坏	128	4.5	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面へラナゲ	竈1東側床面	P10582, 80%, PL44
7	土師器	坏	137	4.8	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面へラナゲ	竈1火床部	P10583, 60%, PL44
8	土師器	坏	[134]	4.9	-	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面へラ削り、内面へラナゲ	竈1火床部	P10584, 50%
9	土師器	坏	[131]	4.7	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面削ナゲ	竈1西側部上層	P10585, 40%, 内面へラ削り「×」, PL43
10	土師器	鉢	18.1	7.5	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面削ナゲ	竈1火床部	P10586, 100%, PL44
11	土師器	高坏	14.6	8.3	10.0	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	坏部外面へラ削り、内面削ナゲ	北西部床面	P10587, 100%, PL43
12	土師器	高坏	15.6	9.1	[10.3]	赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部外面へラ削り、内面削ナゲ	竈2西側床面	P10588, 80%, PL43
13	土師器	高坏	15.1	8.9	[10.0]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部外面へラ削り、内面削ナゲ	竈2手置床面	P10589, 80%, PL43
14	土師器	高坏	15.4	9.2	10.8	長石・石英	にぶい褐	普通	坏部外面へラ削り、内面削ナゲ	竈2西側床面	P10590, 70%, PL43
15	土師器	高坏	14.4	(7.5)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部外面へラ削り、内面削ナゲ	竈1火床部	P10591, 40%
16	土師器	小形壺	12.7	11.3	[6.5]	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部外面へラ削り、内面削ナゲ、口縁部外面へラ削り、胴部外面へラ削り	北西部中層	P10592, 80%, PL42

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
17	土師器	瓶	[26.4]	(11.4)	-	雲母・長石・石英	灰黄緑	普通	体部内・外面へう磨き	北西部床面	P10593, 10%
18	土師器	瓶	[25.6]	(10.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へう磨り後一部へう磨き、内面へう磨き	竈2手前中層	P10594, 10%, 内外面灰化物付着
19	土師器	瓶	19.2	16.9	4.5	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へう磨り、内面へうラナテ	北西部床面	P10595, 70%, PL45
20	土師器	瓶	28.0	27.4	9.2	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面へう磨り、内面へうラナテ	貯蔵穴中層	P10596, 80%, PL44
21	土師器	瓶	[24.6]	26.5	[10.6]	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へう磨き、内面へうラナテ	北東部床面	P10597, 30%

番号	器種	高さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
22	支脚	(12.5)	9.4	3.9	(735.0)	土製	ナデ, 被熱板有り, にぶい橙色を呈する。	北西部下層	DP10021, PL66

第1383号住居跡 (第45・46図)

位置 調査区西部のO10i9区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。



第45図 第1383号住居跡実測図

重複関係 東部を第1293・1294号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 硬化面まで削平されているため、主柱穴の位置と暗褐色をした床面の広がりから推定し、N-10°-Wを主軸とする長軸6.20m、短軸5.72mの方形と考えられる。

床 耕作等により上部が削平されており、硬化面や壁溝は確認されなかった。

竈 北壁中央部と推定される位置のやや内側から、火床面だけが検出された。付近の床面には粘土粒子や砂粒が散在しており、竈材の一部と考えられる。

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは62～71cmである。柱間寸法はいずれも2.5mを測り、規則的に配されている。P5・6はそれぞれ深さ20cmと23cmで、竈に対して同一軸線上に並んでおり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 竈の東側に付設され、長径82cm、短径50cmの楕円形、深さ30cmで、底面は浅い皿状を呈している。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片10点(坏3、甕7)が出土している。第46図1は貯蔵穴の底面、2はP1の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、硬化面まで削平されているため、本来の形状を把握することができなかったものの、主軸方向や規則的な主柱穴の配置、ピットが2か所並ぶ出入り口施設、貯蔵穴や火床面の位置など、当遺跡における古墳時代の住居形態の典型を示している。時期は、出土土器から6世紀後葉ないし7世紀前葉と考えられる。



第46図 第1383号住居跡出土遺物実測図

第1383号住居跡出土遺物観察表(第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	-	(39)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外壁へう張り、内面滑ナデ	貯蔵穴底面	P10066、80%、PL4
2	土師器	甕	[26.0]	(3.6)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面滑ナデ	P1覆土中	P10007、5%

2 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡88軒と掘立柱建物跡17棟、土坑14基、大形竪穴状遺構4基、井戸跡2基、溝跡2条、不明遺構1基を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1081号住居跡(第47図)

位置 調査区東部のO145区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。また、本跡の東側部分は調査区域外に延びている。

重複関係 北西コーナー部で第1082号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東側部分が調査区域外に延びているため、南北軸は3.52mで、東西軸は3.22mだけが確認され、N-6°-Eを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は2～10cmで、壁は外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、竈の手前から出入り口施設にかけてよく踏み固められており、壁溝が周回している。
 竈 北壁に構築されており、焚口部から煙道部まで106cm、両袖部幅120cmである。壁外への掘り込みは50cmほどであり、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は北壁ライン上に位置し、火熱を受けて赤変硬化している。

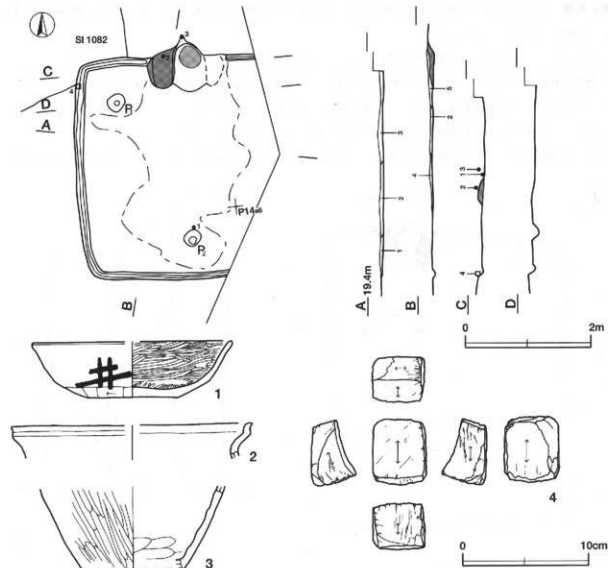
ピット 2か所。P1は深さ12cmで、形状から主柱穴と考えられるが、対応する柱穴は検出されていない。P2は深さ31cmで、南壁際の竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層に分層され、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子多数 | | |

遺物出土状況 土器器片20点(坏12, 甕8), 須恵器片3点(甕3), 砥石1点が出土している。遺物はほぼ全域に散在しており、そのほとんどが細片である。そのうち図示できたものは4点で、第47図1は南部の床面から出土しており、体部に正位で「井」と墨書されている。また、2は竈の西袖の上面、3は竈の北側、4は北西部の覆土上層からそれぞれ出土している。



第47図 第1081号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡から出土した土器の構成比をみると、煮炊き具類には須恵器が若干含まれ、供膳具類は土師器だけで占められ、須恵器生産の終末期の様相を窺うことができ、本跡の時期を10世紀前半に位置付けられる。

第1081号住居跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[15.6]	4.5	7.0	長石・石英	にぶい橙	普通	外部外面コロナナ、下帯手持ちヘリ磨り、底部二方向のヘリ磨り	南壁寄り表面	P1003, 30%, 外部外面磨き[非], PL45-64
2	土師器	甕	[19.0]	(2.8)	-	雲母・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	庭西縁部上面	P1004, 5%
3	土師器	甕	-	(6.6)	[8.0]	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	外部外面ヘリ磨り、内面ナデ	庭北縁上層	P1005, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4	砥石	(3.2)	4.3	3.6	(98.0)	凝灰岩	縦面6面, うち1面に筋状の研ぎ痕有り	北西部上層	Q1001, PL67

第1082号住居跡(第48・49図)

位置 調査区東部のO14J5区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

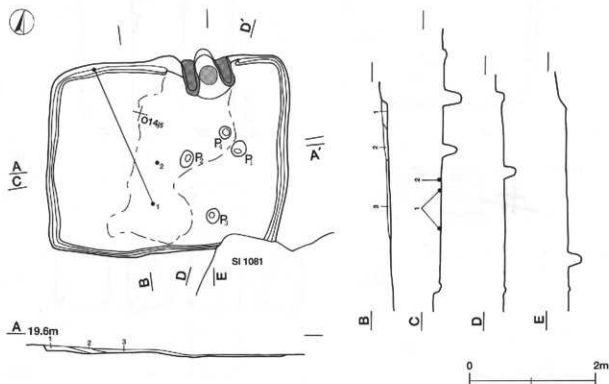
重複関係 南東コーナー部を第1081号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.82m、短軸3.09mの東西に長い長方形で、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は3~13cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、竈手前から南壁の中央部にかけてよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の東寄りに付設されており、規模は焚口部から火床部まで86cm、両袖部幅80cmである。壁外への掘り込みは20cmほどで、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は北壁ラインの内側に位置し、火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。

ピット 4か所。P1~P4は深さ19~30cmで、形状から見て柱穴の可能性はあるが、いずれも中央より東側



第48図 第1082号住居跡実測図

に位置しており、配置が不自然なため断定できない。

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子少量、炭土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片14点（坏1，甕13），須恵器片5点（坏2，甕2，瓶1），灰陶陶器片1点（瓶）が西部の覆土下層を中心に出土している。第49図1は北壁際と中央部南寄りの床面から出土した破片が接合されたものである。

所見 本跡の時期は出土土器から9世紀後葉と考えられる。本跡の西側や北側からは同時期の住居跡は検出されておらず、また東側と南側は崖状になって集落の広がりと考えられないことなどから、単独で存在したことが想定される。



第49図 第1082号住居跡出土遺物実測図

第1082号住居跡出土遺物観察表（第49図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[13.0]	(3.5)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	体部ロクロナデ、下端手持ちヘラ削り	北壁際・中央部床面	P10006、5%
2	須恵器	甕	-	(7.9)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	外側縦位の平行引き、内面ナデ	中央部床面	TP10001、5%

第1083号住居跡（第50～52図）

位置 調査区東部のO1316区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。本跡から南へ10mの距離には同時期と考えられる第1087号住居跡が位置している。

重複関係 南西コーナー部を第95号掘立柱建物跡、東壁際を南北に第73号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 北側部分が調査区域外に延びて、東側部分を第73号溝跡に掘り込まれているために、東西軸は5.53m、南北軸は5.10mだけが確認された。主柱穴4か所や竈が確認されており、確認規模よりやや大きいN-2°-Wを主軸とする方形と推定される。壁高は22～37cmで、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁に付設されており、北側部分が調査区域外のため確認された規模は焚口部から火床部まで58cm、両袖部幅105cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面の上に砂質粘土で構築されており、火床面は浅い皿状に掘り窪められ、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部の形状は不明である。

遺土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、粘土粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
3 灰褐色 粘土粒子・砂粒中量
4 灰褐色 粘土粒子中量、砂粒少量
5 暗褐色 炭化物多量、ロームブロック・焼土ブロック・灰少量
6 灰褐色 灰多量、粘土粒子・炭化粒子少量

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4で、深さ60～85cmである。P5は深さ32cmで、竈と対峙する位置にあり、

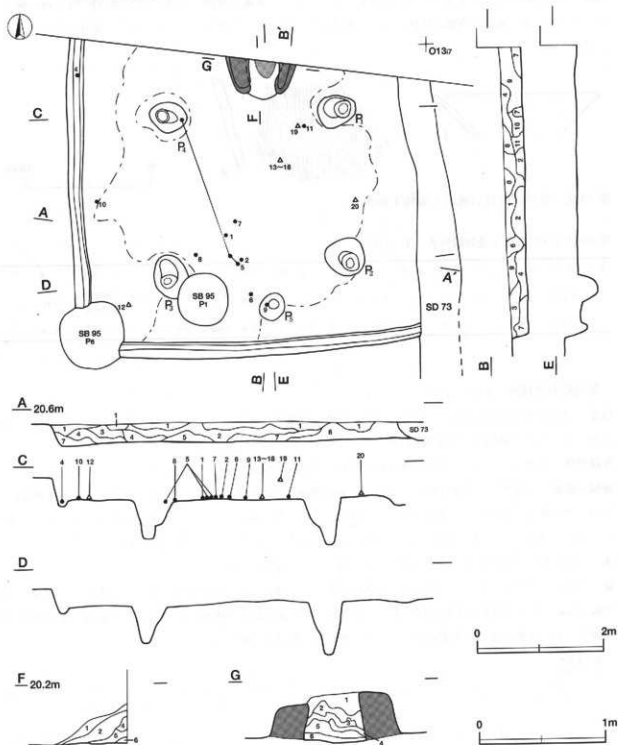
出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ17cmで、補助的な柱穴と考えられる。

覆土 11層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 7 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子・粘土ブロック微量

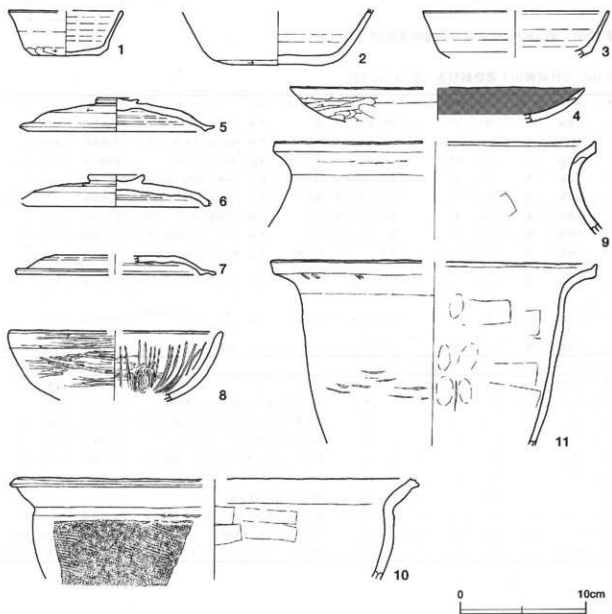
- 8 黒褐色 ロームブロック粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量、粘土粒子微量
- 10 暗褐色 ロームブロック・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 11 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量



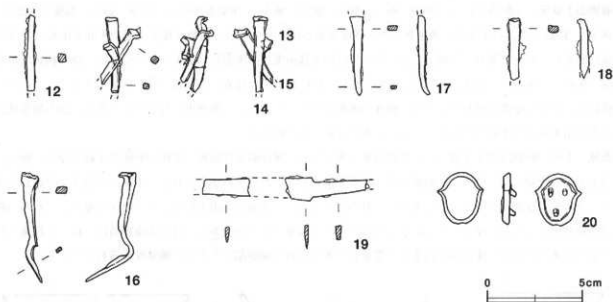
第50図 第1083号住居跡実測図

遺物出土状況 土器器片73点（杯39，碗1，盤1，甕31，瓶1），須恵器片62点（杯36，蓋16，高盤2，甕7，鉢1），鉄釘7点，刀子1点，帯金具1点，鉄滓2点が出土している。遺物は覆土下層や床面を中心にほぼ全域に散在しており，第51・52図1・2，5～9は中央部南寄りの床面から出土している。13～18の鉄釘は中央部の床面から重なって出土しており，そのうち13～15は錆により付着しているため，分離できない。これらの鉄釘はいずれも頭部が潰れていたり，脚部が屈曲したりしており，一度使用されたものである。20の帯金具は中央部南東寄りの床面から出土しており，裏には紙が3か所ある。

所見 本跡の時期は出土土器から8世紀前葉と考えられ，第1087号住居跡と住居の形態や主軸方向が一致し，出土土器の時期も同じであり，両跡は同一集落を構成していたことが想定される。本跡から出土した鉄釘7点はいずれも一度使用されたものであり，それらがまとめて床面から出土していることから見て，これらの鉄釘は再利用するために保管しておいたものがそのまま遺棄されたか，あるいは住居廃絶時に一括して投棄されたものと考えられる。床面から出土した帯金具と考えられる銅製品とともに，興味深い資料といえる。



第51図 第1083号住居跡出土遺物実測図（1）



第52図 第1083号住居跡出土遺物実測図(2)

第1083号住居跡出土遺物観察表(第51・52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[9.0]	3.6	5.2	雲母・長石・石英	灰	普通	細口縁付、口縁部へリ張り、口縁部へリ張り	中央部床面	P10007, 60%
2	須恵器	坏	-	(4.3)	9.8	雲母・長石・石英	灰黄	普通	体部下縁・底部縁部へリ張り	中央部床面	P10008, 30%
3	須恵器	坏	[14.8]	(3.7)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	体部口ロナデ	北西部覆土中	P10009, 10%
4	土師器	皿	[23.6]	(2.7)	-	雲母・赤色粒子	にぶい澄	普通	口縁部欠損、口縁部へリ張り、口縁部へリ張り	西壁際床面	P10010, 5%
5	須恵器	蓋	14.0	2.7	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	天部縁部へリ張り、つまみ縁部	中央部床面	P10011, 60%, PL45
6	須恵器	蓋	(14.2)	2.5	-	雲母・長石・石英	灰白	普通	天部縁部へリ張り、つまみ縁部	産層寄り床面	P10012, 40%
7	須恵器	蓋	[15.8]	(1.5)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	口ロナデ、天部縁部へリ張り	中央部床面	P10013, 10%
8	土師器	碗	[16.8]	(5.5)	-	雲母	明赤褐色	普通	体部内・外面へリ張り	南西部床面	P10014, 10%
9	土師器	甕	[25.6]	(7.2)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい澄	普通	口縁部欠損、口縁部へリ張り、口縁部へリ張り	産層寄り床面	P10015, 5%
10	須恵器	鉢	[31.4]	(8.0)	-	雲母・石英	灰	普通	口縁部口ロナデ、口縁部外部欠損、口縁部へリ張り	西壁際床面	P10016, 5%
11	土師器	瓶	[26.0]	(14.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい澄	普通	口縁部欠損、口縁部へリ張り、口縁部へリ張り	産層寄り床面	P10017, 10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	不明	(4.1)	0.5	0.4	(1.8)	鉄	断面方形の棒状、釘或いは紡錘車の軸。	南西部床面	M10004
13	釘	(3.3)	0.8	0.4	3点 で、	鉄	頭部は薄く叩き伸ばされ、屈曲する。13-15は断面により特徴	中央部床面	M10005, 20%
14	釘	(4.0)	0.7	0.5	(5.5)	鉄	頭部は薄く叩き伸ばされ、屈曲する。	中央部床面	M10006, 70%
15	釘	(1.1)	0.7	0.3		鉄	頭部欠損、頭部は薄く叩き伸ばされ、屈曲する。	中央部床面	M10007, 60%
16	釘	7.5	0.9	0.5	(3.6)	鉄	頭部は薄く叩き伸ばされ、屈曲する。	中央部床面	M10008, 100%
17	釘	(4.1)	0.8	0.4	(1.7)	鉄	頭部欠損、先端部は尖る。	中央部床面	M10009, 60%
18	釘	(3.1)	0.5	0.4	(2.2)	鉄	頭部欠損、頭部は薄く叩き伸ばされ、屈曲する。	中央部床面	M10010, 30%
19	刀子	(7.2)	1.2	0.3	(5.4)	鉄	刃先・茎欠損、両側有り。	産層寄り上層	M10011, 60%
20	帯金具	2.7	2.5	0.7	(7.8)	銅	模印を呈し、上左を左右に突出させる。裏に筋3か所有り。	中央部床面	M10012, 90%, PL20

第1084号住居跡 (第53・54図)

位置 調査区東部のP13a5区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 西壁際の南寄りから東壁際の北寄りにかけて第95号掘立柱建物跡を掘り込み、北壁際を第1202号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.40m、短軸3.68mの東西に長い長方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は5~13cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで86cm、両袖幅97cmである。壁外への掘り込みは70cmほどで、袖部は砂質粘土で構築されている。火床面は浅い皿状に掘り窪められ、火熱を受けて赤変しており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

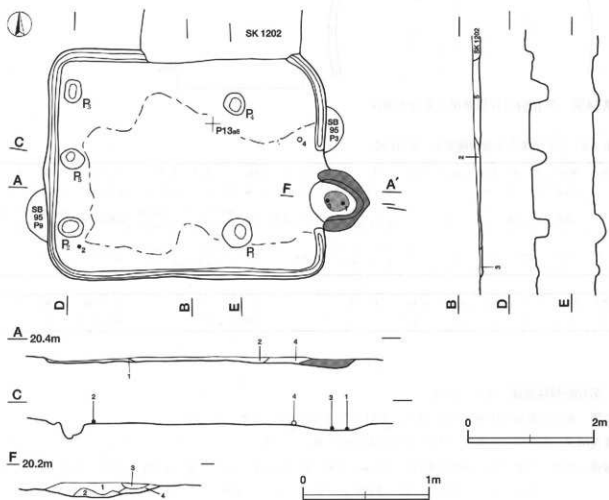
竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子少量

- 3 ぶい褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量
4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4で、深さは15~30cmである。P5は深さ25cmで、竈と対峙する位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。



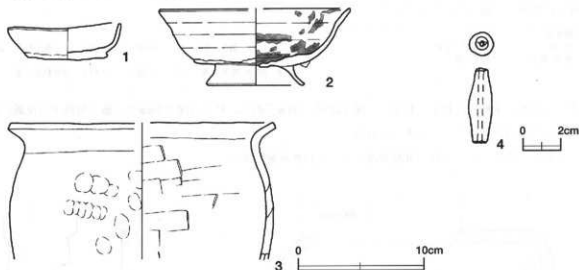
第53図 第1084号住居跡実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子少量
 3 褐色 ロームブロック中量
 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
 5 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片53点（小皿1，碗38，甕14），管状土鉢1点，銅滓1点が甕付近や北東部を中心に出土している。竈の火床部からは第54図1と3が出土している。2は南西コーナー部の床面，4は東壁際の床面から出土しており，2の体部内面には漆が付着している。

所見 本跡からは漆付着土器が出土しており，当調査区からは他に第1088・1091・1253・1323・1325号住居跡からも出土している。東壁と柱穴が離れている住居形態から見て，漆関連の工房跡の可能性も想定される。本跡の時期は，出土土器から10世紀後半と考えられる。



第54図 第1084号住居跡出土遺物実測図

第1084号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	小皿	9.9	2.9	6.3	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部ロクナデ，底面縦ヘリ取り	竈火床部	P1001A, 80%, PL45
2	土師器	高台付碗	[15.0]	5.0	7.5	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部ロクナデ，底面縦ヘリ取り後，高台取り付け	南西部床面	P1001B, 50%, 内面漆付着, PL45
3	土師器	碗	[20.8]	(10.7)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ナデ・底面縦，内面ヘリナデ	竈火床部	P1002D, 10%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4	管状土鉢	3.9	1.3	0.3	(5.4)	土製	ナデ，にぶい黄橙色を呈する。	東壁際床面	DP1001, 90%, PL45

第1085号住居跡（第55・56図）

位置 調査区東部のP13b5区に位置し，平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 中央部と北西部で第95号掘立柱建物跡の掘り方を掘り込んでいる。

規模と形状 北壁の竈の西側は東側より75cmほど奥へ掘り込まれており，竈の東側には棚状の施設が付設されていたことが想定される。規模は，竈の東側の南北長が3.00m，西側では3.75mを測り，東西長は3.25mである。主軸方向はN-7°-Eであり，棚状の施設を含めた平面形は南北に長い長方形を呈している。壁高は北

壁で20cmを測り、壁はほぼ直立している。また、南壁の立ち上がりは傾斜した地形のため確認されなかった。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は竈の東側を除いて周回している。

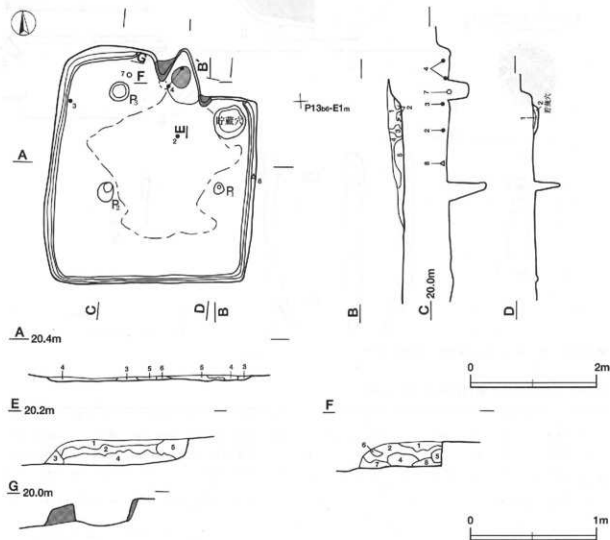
竈 北壁中央部のやや東寄りに設けられており、焚口部から煙道部まで87cm、両袖部幅90cmである。天井部は崩落しており、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変しており、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|--------|--|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子・粘土粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子・粘土粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 7 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、粘土ブロック微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量 | 8 灰褐色 | 粘土ブロック・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |

ピット 3か所。主柱穴はP1～P3が相当し、深さは33～65cmである。棚状施設付近にも主柱穴が想定されるが、検出されていない。

貯蔵穴 平面形は径50cmほどの不整形を呈し、棚状施設の手前に付設されている。深さは10cmで、底面は皿状を呈しており、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。



第55図 第1085号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

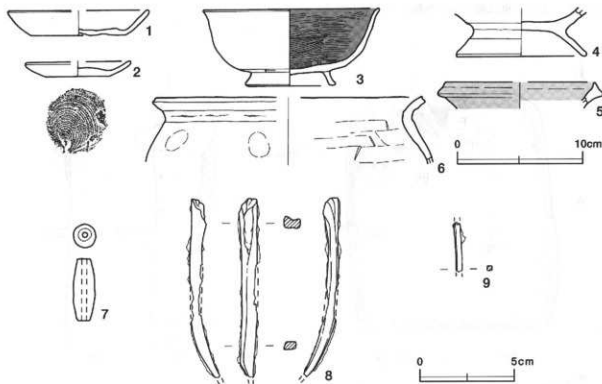
覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
 2 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量、砂粒微量
 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子少量
 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
 6 暗褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片186点（碗49、皿2、甕135）、灰釉陶器片1点（長頸瓶）、釘1点、棒状鉄製品1点、管状土錐1点が北側部分の覆土下層を中心に出土している。とくに竈周辺からの出土が顕著であり、第56図2は竈手前の覆土下層、4は火床部からそれぞれ出土している。また、5の灰釉陶器長頸瓶は南西部の覆土中から出土している。

所見 本跡は棚状施設を有しており、この特徴は当遺跡において10世紀以降に取り入れられる住居形態の一類型である。本跡の時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第56図 第1085号住居跡出土遺物実測図

第1085号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	小皿	[11.0]	2.0	7.4	雲母・長石・石英	にぶい赤褐色	普通	体部コクロナテ、底部転ヘラ製り	覆土中	P10021, 20%
2	土師器	小皿	[8.2]	1.2	5.0	赤色粒子	暗褐色	普通	体部コクロナテ、底部転ヘラ製り	竈手前下層	P10022, 40%
3	土師器	高台付碗	13.8	6.1	7.0	雲母・石英	にぶい褐色	普通	下層部ヘラ製り、裏面刷り付ナテ	西側際下層	P10023, 70%, PL45
4	土師器	高台付碗	-	(3.8)	10.4	雲母・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	高台貼り付け後、ナテ	竈火床部	P10024, 30%
5	灰釉陶器	長頸瓶	[120]	(2.1)	-	緻密	灰白・オリーブ灰	良好	口縁部コクロナテ、内・外面施釉	東西側覆土中	P10025, 5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
6	土師器	甕	[21.3]	(52)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ナデ・指張痕、内面ヘラナデ	覆土中	P10026, 5%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	管状土師	3.3	1.2	0.3	4.4	土製	ナデ、におい橙色を呈する。	北西部床面	DP0002, 100%, P1.65

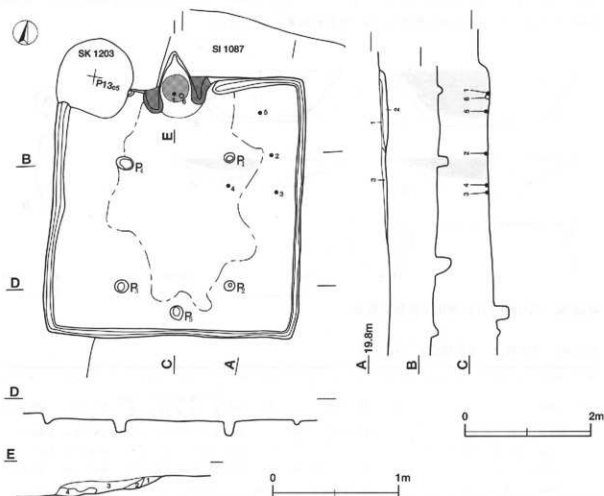
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
8	釘	(9.5)	1.0	0.7	(16.0)	鉄	頭部欠損、脚部先端屈曲。	東壁階壇溝内	M10014, 70%
9	不明	(2.6)	0.4	0.3	(1.0)	鉄	断面方形の棒状、鏝の基部。	覆土中	M10015

第1086号住居跡 (第57・58図)

位置 調査区東部のP13c5区に位置し、南に緩やかに傾斜した台地の南端部に立地している。

重複関係 西壁寄りを除く大部分が第1087号住居跡を掘り込んでおり、中央部を第1094・1095号住居跡、北西コーナー部を第1203号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.15m、短軸3.96mの方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は北壁で12cmを測り、壁はほぼ直立している。南壁の立ち上がりは確認できなかった。



第57図 第1086号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅100cmである。壁外への掘り込みは70cmほどで、袖部は床面と同じ高さの地山面の上に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は緩やかに外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂粒少量
2 にぶい赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4で、深さ18～28cmである。P5は深さ22cmで、竈と対峙する位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。

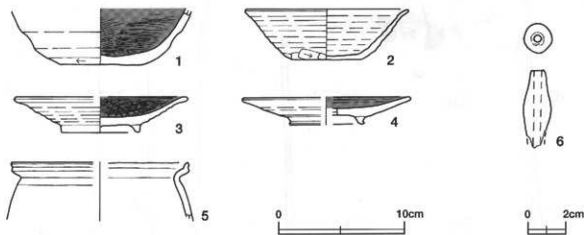
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子少量
3 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片38点(碗2, 皿2, 甕9), 須恵器片18点(杯13, 甕5), 球状土錘1点が竈内や北東部の覆土下層を中心に出土している。竈の火床部からは第58図1・6, 東壁寄りの床面からは2～5が出土している。

所見 本跡は他遺構との重複が多く、本来の形状を明確に把握することはできなかったが、竈内や北西部から土器が多く出土し、良好な資料を得ることができた。本跡の時期は、供膳具に占める土師器の割合が須恵器を上回っていることや出土土器の形状から見て9世紀後半と考えられる。



第58図 第1086号住居跡出土遺物実測図

第1086号住居跡出土遺物観察表(第58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	碗	-	44	66	雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	外部下層回転へう削り, 底層回転へう削り, 手持ちへう削り	竈火床部	P10027, 40%
2	須恵器	碗	12.8	4.0	4.5	雲母・長石	黄灰	普通	底部二方向のへう削り	東壁際床面	P10028, 90%, PL06
3	土師器	高台付皿	[13.4]	2.8	6.2	長石	にぶい褐色	普通	底層回転へう削り, 高台削り付	東壁際床面	P10029, 60%
4	土師器	高台付皿	[13.2]	2.1	[5.8]	雲母・長石	黄灰	普通	高台削り付後, ナデ	東壁寄り床面	P10030, 10%
5	土師器	甕	[13.9]	4.6	-	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	外側外側ナデ, 内面ヘラナデ	北東部床面	P10031, 5%

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	管状土版	(4.1)	1.5	0.4	(6.8)	土製	ナデ、橙色を呈する。	竈火床部	DP1003, 90%, PL65

第1087号住居跡 (第59～61図)

位置 調査区東部のP13c6区に位置し、南西へ傾斜した台地の南端部に立地している。また、本跡の北10mには同時期と考えられる第1083号住居跡が位置している。

重複関係 西側部分を第1086・1094・1095号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.32m、短軸6.20mの方形で、主軸方向はN-7°-Eである。壁の立ち上がりは西壁と北壁で確認でき、いずれも直立し、壁高は30～40cmを測る。南壁の立ち上がりは、傾斜した地形のため確認されなかった。

床 ほほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで130cm、両袖部幅160cmで、壁外への掘り込みはない。天井部は崩落しており、土層断面区中の第15層が天井部の崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。袖部は10～15cmほど掘り窪めた部分にローム土と砂質粘土を用いて床面と同じ高さまで埋め戻し、その上にさらに砂質粘土を用いて構築されている。火床面は10cmほど皿状に掘り窪められ、火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、砂粒少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	8 濃い黄褐色	粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 濃い赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量	9 灰褐色	粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
3 濃い赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量、砂粒微量	10 灰褐色	粘土粒子多量、砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 灰褐色	ロームブロック・砂粒少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	11 濃い赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
5 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、砂粒微量	12 灰褐色	粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子・炭化粒子微量
6 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・灰少量、粘土粒子・砂粒微量	13 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化物・粘土粒子少量、ロームブロック・砂粒微量
7 暗赤褐色	灰中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子	14 灰褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量

ピット 7か所。主柱穴はP1～P4で、深さ55～62cmである。P5～P7は深さ16～32cmで、いずれも竈に対峙して一直線上に並んでおり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

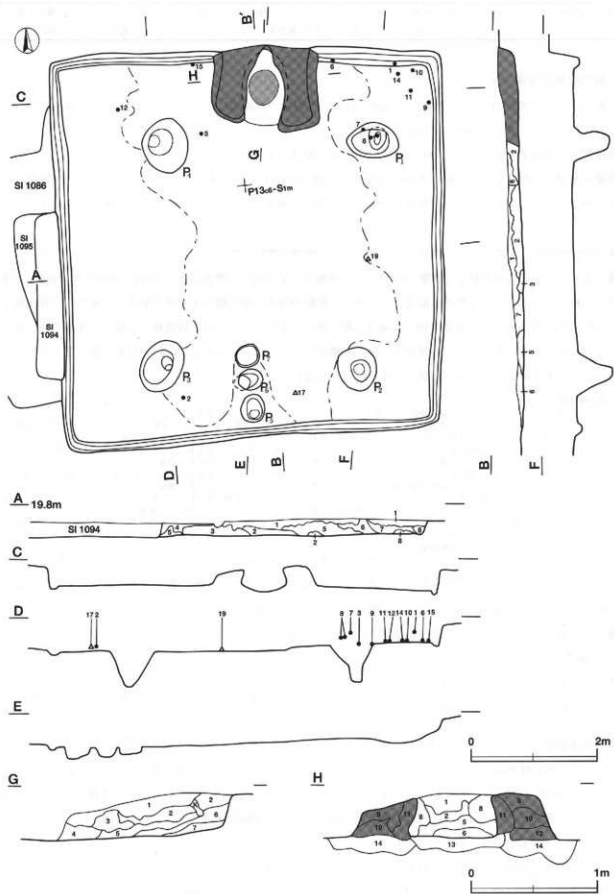
覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

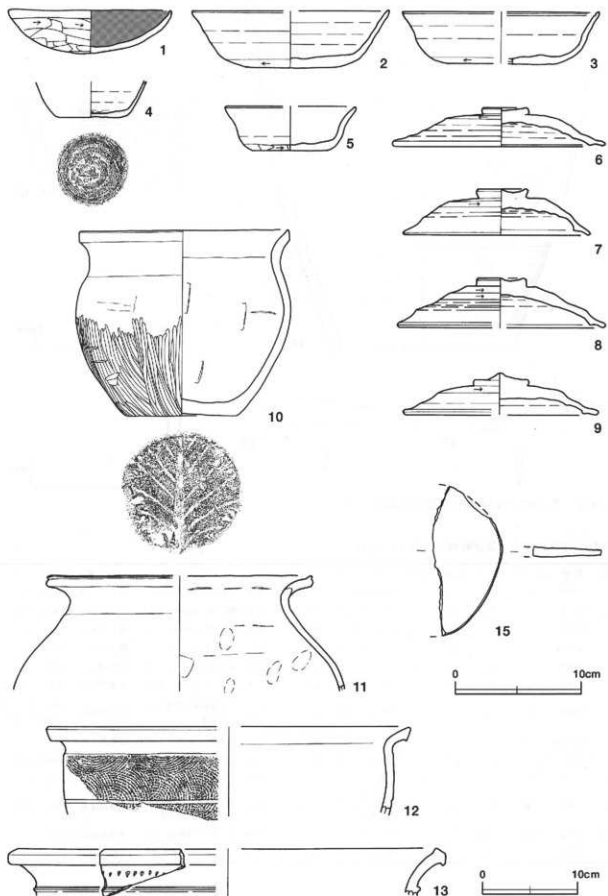
1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	5 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗赤褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量	6 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	7 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	8 黒褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片164点(坏107, 甕56, 甕1), 須恵器片206点(坏69, 蓋80, 甕56, 甕1), 鉄鏝1点, 刀子1点, 棒状鉄製品(釘カ)1点, 鉄滓1点が出土しており、遺物はほぼ全域に散在している。北東コーナ部からは第60・61図の6～11・14がまとめて出土しており、これらは出土位置から見て本跡に伴うものと考えられる。竈付近では4が火床部, 3が竈手前の床面, 15が西袖脇の床面からそれぞれ出土しており、特に15の内面はよく研磨されて、硯に転用されている。また、17の鉄鏝は南壁際の覆土下層, 18の刀子はP4内, 19の棒状鉄製品は東壁寄りの床面, 鉄滓は南東コーナ寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。

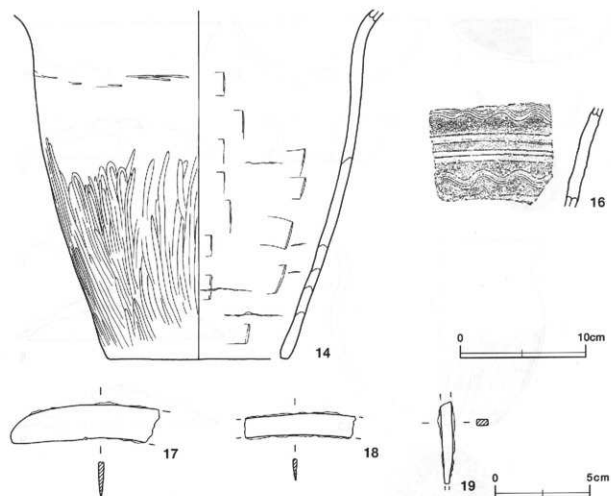
所見 本跡の時期は出土土器から8世紀前葉と考えられ、住居の形態や主軸方向、出土土器から見て第1083号住居跡と同一の集落を構成していたことが想定される。



第59图 第1087号住居跡実測图



第60图 第1087号住居跡出土物実測图(1)



第61図 第1087号住居跡出土遺物実測図(2)

第1087号住居跡出土遺物観察表(第60・61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	129	3.4	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	体部外面へう割り, 内面ナデ	北東部中層	F10032, 80%
2	須恵器	坏	[15.6]	4.5	7.2	雲母・長石・石英	灰黄	普通	体部下層・底部回転へう割り	南壁階下層	F10033, 50%
3	須恵器	坏	[14.4]	4.1	[8.0]	雲母・長石	靑灰	普通	体部下層・底部回転へう割り	電手前床面	F10034, 40%
4	須恵器	坏	-	(29)	5.0	雲母・長石・石英	灰白	普通	底部回転へう割り	竈火床部	F10035, 40%
5	須恵器	坏	[10.1]	3.5	6.0	雲母・長石	靑灰	普通	体部下層・底部手付ちへう割り	南西部置土中	F10036, 30%
6	須恵器	蓋	16.8	3.2	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	天井部回転へう割り, つまみ接合	北東部床面	F10037, 100%, PL46
7	須恵器	蓋	14.6	3.7	-	雲母・長石・石英	灰	普通	天井部回転へう割り後, つまみ接合	北東部中層	F10038, 90%, 内面炭化物付着, PL46
8	須恵器	蓋	[16.2]	3.9	-	雲母・長石・赤色粒子	灰	普通	天井部回転へう割り後, つまみ接合	北東部下層	F10039, 45%
9	須恵器	蓋	[15.4]	3.2	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	天井部回転へう割り後, つまみ接合	北東部床面	F10040, 40%
10	土師器	甕	16.5	14.9	8.8	雲母・石英	橙	普通	胴部へう割り, 頸部ナデ, 口縁ナデ	北東部床面	F10041, 100%, PL46
11	土師器	甕	[20.8]	(9.2)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ナデ, 内面へうナデ・胴部ナデ・指溝痕	北東部床面	F10042, 10%
12	須恵器	鉢	[37.6]	(9.2)	-	雲母・長石	靑灰	普通	口縁ナデ, 胴部ナデ, 指溝痕	北西部床面	F10043, 5%
13	須恵器	大甕	[43.5]	(5.0)	-	靑灰	黄灰	良好	口縁部クロナデ, 基部に刺突文	北西部置土中	F10044, 5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土器器	瓶	-	(27.9)	[14.0]	灰む・石灰赤色粒子	にぶい橙	普通	外部へラ書き、内面へラナフ	北東部床面	P10045, 30%
15	須恵器	瓶用甕	(12.0)	-	-	長石	褐灰	良好	口クロナダ、蓋を転用	甕西側床面	P10782, 30%, 外面自然釉
16	須恵器	大甕	-	(8.0)	-	雲母・長石・石灰	黄灰	普通	4本の鋸歯状工具による蓋状文	甕西側土中	TP10002

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
17	鎌	(7.9)	1.9	0.3	(15.0)	鉄	基部欠損、刃部は若干湾曲する。	南壁際下層	M10016, 50%, P1.69
18	刀子	(5.9)	1.3	0.2	(6.6)	鉄	刃先部・基部欠損。	P 4 層土中	M10017, 50%, P1.68
19	不明	(4.4)	0.6	0.3	(4.0)	鉄	断面長方形、一端が尖る。釘か。	東壁寄り床面	M10018, 30%

第1088号住居跡 (第62・63図)

位置 調査区東部のP13e6区に位置し、南に傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 東壁際の南寄りで第1092号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南へ傾斜した地形のため、南壁の立ち上がりが確認できず、暗褐色を呈した床面の広がりとピットの位置から判断して、1辺が4.10mほどのN-10°-Eを主軸とする方形と推定される。壁高は最も残りのよい北壁で20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、甕の手前がよく踏み固められており、壁溝は確認された壁際を巡っている。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで115cm、両袖部幅140cmである。壁外への掘り込みは60cmほどで、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は北壁ラインよりも外側に位置しており、煙道の立ち上がり部には径40cmほどの円形で深さ33cmのピットが掘り込まれ、その中から須恵器甕が逆位で埋め込まれた状態で検出されている。この甕は支脚に転用されたと考えられ、被熱している。また、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

甕土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	5 灰褐色	砂粒微量 灰多量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化物微量
2 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量	6 暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量
3 褐色	ロームブロック多量、粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	7 にぶい赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量
4 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物		

ピット 支柱穴は検出されなかった。壁際から深さ5~10cmの小ピット9か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。

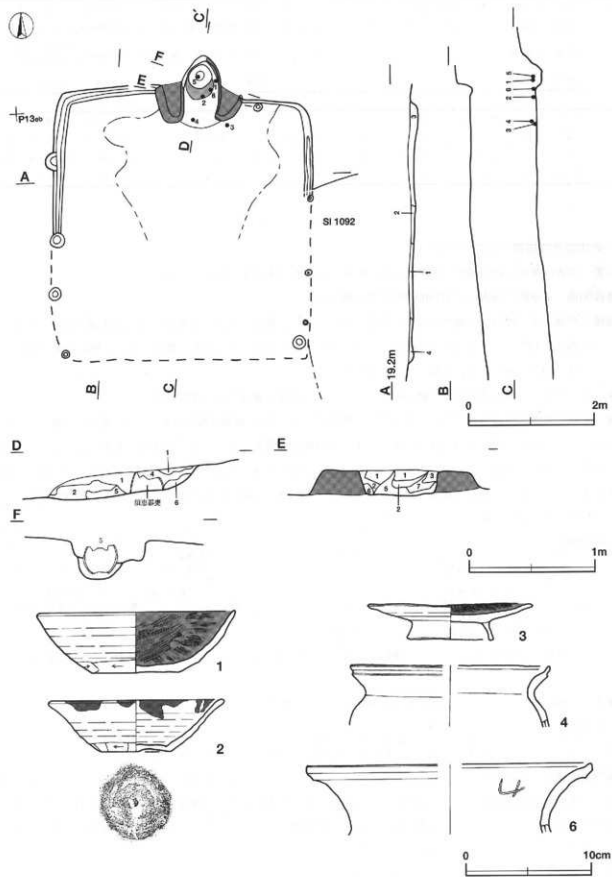
覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

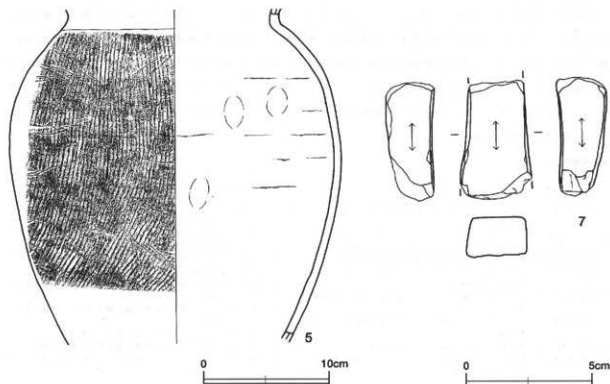
1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	3 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片17点(碗7, 皿1, 甕9), 須恵器片15点(杯4, 蓋1, 甕9, 瓶1), 砥石1点が竈周辺の床面を中心に出土している。図示した土器はいずれも竈内、ないし甕手前からの出土であり、そのうち第62・63図5は前述したように支脚に転用された須恵器甕である。また、2の口縁部には油漣が付着し、6の口縁部内面には倒位で「カ」と焼成前にへラ書きされている。

所見 本跡の時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第62图 第1088号住居跡・出土遺物実測図



第63図 第1088号住居跡出土遺物実測図

第1088号住居跡出土遺物観察表 (第62・63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	15.6	4.9	6.8	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	縁部へう割り、底部へう割り	竈火床部	P10046, 70%, PL45
2	須恵器	坏	14.4	4.1	8.0	雲母・長石	明赤褐	不良	底部回転へう切り痕、 一方のへう割り	竈火床部	P10047, 100%, 口縁部塗層付着, PL46
3	土師器	高台付皿	12.9	3.0	6.6	長石	明赤褐	普通	縁部内へう割り、底へう割り	竈手前床面	P10048, 70%, PL46
4	土師器	甕	[15.8]	(4.8)	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部内・外面ナデ	竈火床部	P10049, 5%
5	須恵器	甕	-	(26.6)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部外面縦位の平行印、内面ナデ・輪積み・捺置痕	竈火床部	P10050, 70%, 支脚転用, PL46
6	須恵器	甕	[22.6]	(5.5)	-	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部口クロナデ	竈火床部	P10051, 5%, 口縁部へう割り「カ」, PL63

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	砥石	(4.7)	(2.9)	(1.6)	(30.9)	凝灰岩	砥面3面、両端部欠損。	北西部竈土中	Q10002, 40%, PL67

第1091号住居跡 (第64～66図)

位置 調査区東部のO1314区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 北壁部分で第1089号住居跡、西壁部分で第1090号住居跡を掘り込み、東壁部分を第95号掘立柱建物、西側部分を第111号掘立柱建物、南壁部分を第114号掘立柱建物跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.10m、短軸6.73mの方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は30～50cmで、各壁ともほぼ直立する。

床 はほぼ平坦で、主柱穴の内側がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁中央部を壁外に40cmほど掘り込んで、砂質粘土で構築されている。焚口部を第111号掘立柱建物跡に掘り込まれているため、確認できた規模は火床部から煙道部まで100cm、両袖部幅160cmである。袖部は15cmほど掘り下げた部分にローム土と砂質粘土を用いて床面と同じ高さまで埋め戻して、その上にさらに砂質粘土を用いて構築されている。火床面は袖部と同様にローム土と砂質粘土で埋め戻した平坦面を使用しており、火床面直上からは多量の灰とともに貝殻片が微量検出されている。袖部の内側と火床面は火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、焼土小ブロック・粘土粒子・砂粒微量	12 暗褐色	砂粒多量、ローム粒子・粘土粒子中量
2 暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・灰少量、炭化物微量	13 暗赤褐色	砂粒中量、ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量
3 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂粒微量	14 にごい赤褐色	砂粒多量、粘土粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
4 暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化物・灰少量	15 暗褐色	粘土粒子・砂粒・焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量、灰微量
5 灰褐色	灰多量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量	16 暗赤褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
6 暗赤褐色	焼土ブロック多量、灰少量、炭化粒子微量	17 暗赤褐色	砂粒・焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
7 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	18 暗褐色	ローム粒子・砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
8 極暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量、砂粒微量	19 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量
9 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量	20 暗褐色	ロームブロック多量、粘土粒子・砂粒中量
10 暗褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量	21 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量
11 極暗褐色	粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量		

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは61～67cmで、P3・4の底面からは柱の正真が2か所ずつ確認されており、立て替えが行われたことが想定される。また、出入口施設に伴うピットはP5が相当し、深さは65cmである。

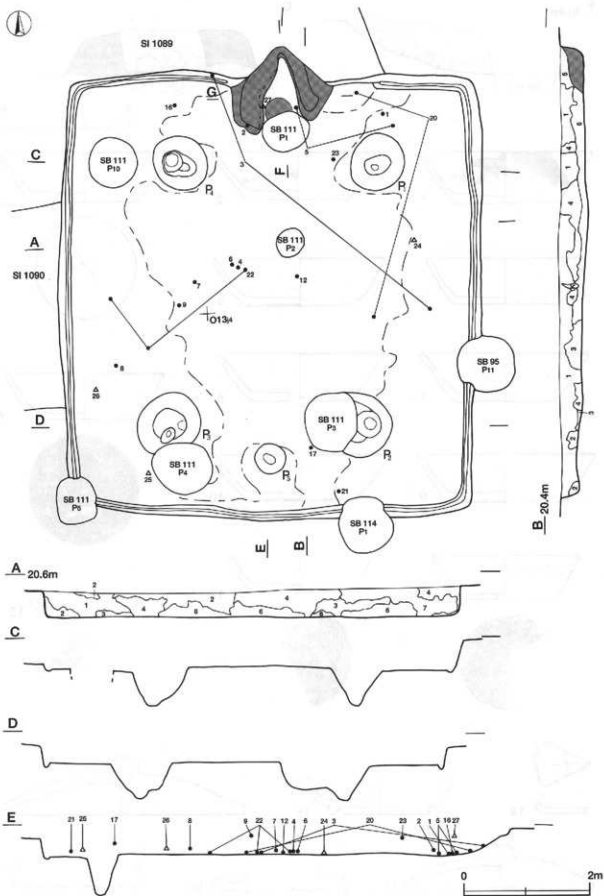
覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	5 にごい赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック少量
2 極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック中量	7 褐色	ロームブロック中量
4 黒褐色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 土師器片116点(竈116)、須恵器片231点(杯105、高台付杯3、蓋23、甕98、甌1、円面硯1)、土製支脚1点、不明銅製品(巡方カ)1点、鉄鏃2点、不明鉄製品(鉄線カ)1点、鉄洋5点が出土している。遺物はほぼ全域に散在しており、竈周辺の床面や覆土下層からは第65・66図1・2・5・23・27が出土し、そのうち1・2の体部内面には漆が付着している。また、P2・3内から炭化材が出土しており、さらにP2の東側の床面からは焼土塊が検出されている。炭化材はいずれも形状を留めておらず、部位の同定には至らなかったが、出土位置から見て柱材の可能性はある。

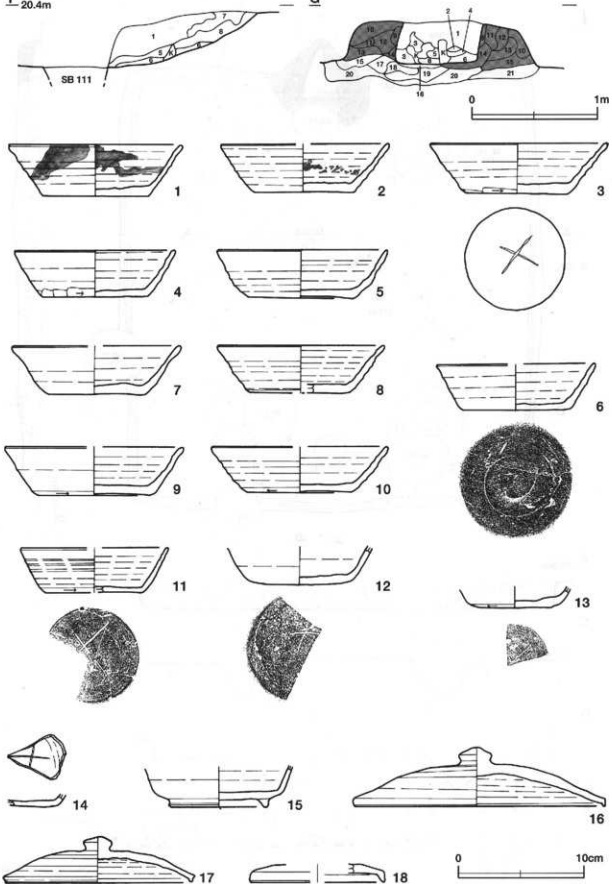
所見 本跡は供膳具類に土師器が見られないことや出土土器の形状から8世紀中葉に位置づけられ、この時期における最大の住居跡である。本跡からは、刻書やヘラ書きが施された土器が多く出土しており、3の底部には「×」の刻書、11・13・14の底部には「×」のヘラ書き、12の底部と22の体部下端には「大」のヘラ書きがされている。また、本跡は炭化材や焼土塊の出土状況から見て火災にあったことが想定され、さらに覆土の土層観察からは焼失後に埋め戻されている様子を見て取ることができ、出土した遺物の多くは本跡が埋め戻される段階で投棄されたと考えられる。また、竈の使用状況や1軒の食膳を賄うには多すぎる供膳具の出土量から見て厨としての機能が示唆され、本跡から南西へ13mの距離には屋と考えられる第99号掘立柱建物跡が位置している。



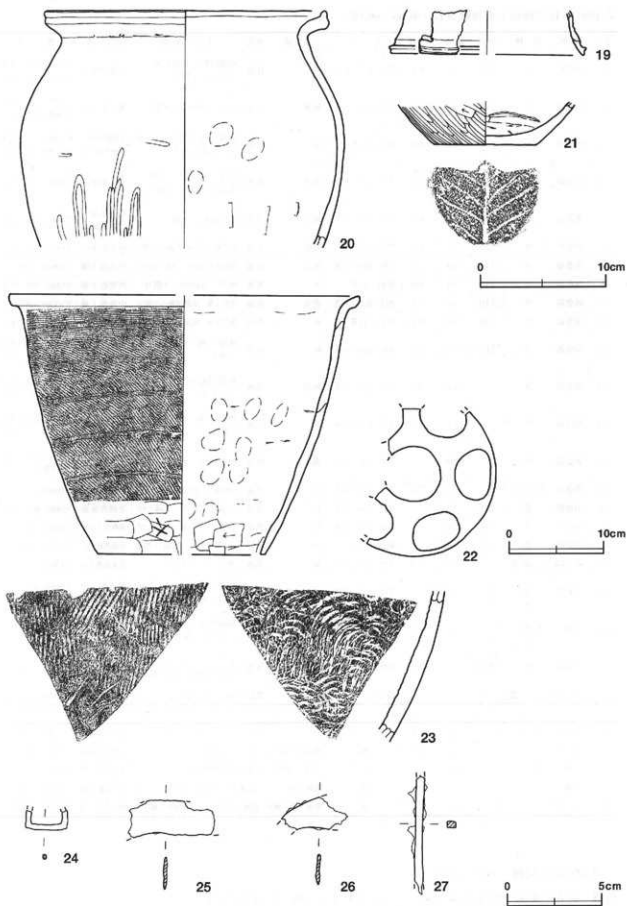
第64图 第1091号住居跡実測图

F 20.4m

G



第65圖 第1091号住居跡・出土遺物実測図



第66图 第1091号住居跡出土遺物実測図

第1091号住居跡出土遺物観察表(第65・66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	13.6	4.1	8.4	雲母・長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後、二方向のヘラ削り	北東部床面	P10078, 70%, 底部内外面磨材着, PL47
2	須恵器	坏	[13.3]	3.9	7.9	雲母・長石・石英	灰黄	普通	底部一方方向のヘラ削り	竈手直下層	P10079, 60%, 底部内面磨材着, PL47
3	須恵器	坏	13.9	4.1	8.0	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り、底部ヘラナデ	北東部中層・東壁際床面	P10080, 60%, 底部後に磨き「×」, PL46
4	須恵器	坏	12.6	3.7	8.4	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り、底部多方向のヘラ削り	中央部床面	P10081, 60%, PL46
5	須恵器	坏	13.4	3.9	8.4	雲母・長石・石英	褐灰	普通	底部回転ヘラ削り	竈火床部・北東部床面	P10082, 60%, PL46
6	須恵器	坏	[12.5]	3.7	8.5	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後、多方向ヘラ削り	中央部床面	P10083, 60%, PL47
7	須恵器	坏	[13.3]	3.9	7.8	雲母・長石・石英	灰白	普通	底部回転ヘラ削り後、方向ヘラ削り	中央部下層	P10084, 50%
8	須恵器	坏	13.2	3.8	[8.0]	長石・石英	灰	普通	底部二方向のヘラ削り	西壁際下層	P10085, 40%, PL47
9	須恵器	坏	[14.0]	3.8	8.8	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	中央部上層	P10086, 30%
10	須恵器	坏	[14.0]	3.6	[8.4]	長石・石英	灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	覆土中	P10087, 30%, PL47
11	須恵器	坏	[11.7]	3.6	[7.7]	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	南東部・南西部覆土中	P10088, 40%, 底部ヘラ磨き「×」, PL63
12	須恵器	坏	-	(3.1)	[8.0]	雲母・長石・石英	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後、ヘラナデ	中央部床面	P10089, 30%, 底部ヘラ磨き「大」, PL63
13	須恵器	坏	-	(1.7)	[5.6]	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	南西部覆土中	P10090, 10%, 底部ヘラ磨き「×」, PL63
14	須恵器	坏	-	(1.0)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	南西部覆土中	P10091, 10%, 底部内面ヘラ磨き「×」, PL63
15	須恵器	高台付坏	-	(3.3)	[7.6]	雲母・長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台磨き付	P 2 覆土中	P10092, 20%
16	須恵器	蓋	19.9	4.8	-	雲母・長石・石英	灰	普通	天部回転ヘラ削り後、つば磨き付	北壁際床面	P10093, 90%, PL47
17	須恵器	蓋	14.6	3.6	-	雲母・長石・石英	灰	普通	天部回転ヘラ削り後、つば磨き付	南壁寄り中層	P10094, 70%, PL47
18	須恵器	蓋	[10.6]	(1.4)	-	織布	灰	良好	ロクロナデ、外面自然釉	南西部覆土中	P10095, 10%
19	須恵器	円面瓶	-	(3.5)	[15.4]	雲母・長石・石英	灰	普通	透かし孔ヘラ切り	北東部覆土中	P10096, 5%
20	土師器	甕	22.2	(18.7)	-	雲母・長石・石英	にょい殻	普通	体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ・指擦痕	竈東側・中央部床面	P10097, 30%, PL47
21	土師器	甕	-	(3.6)	8.2	雲母・長石・石英	灰褐	普通	体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ、底部本表痕	南壁際下層	P10098, 10%, 坏に転写*, PL47
22	須恵器	瓶	[36.7]	27.0	[17.6]	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部外面平削り、内面ナデ・輪痕み真・指擦痕、下層ヘラ削り	中央部・西壁寄り床面	P10099, 40%, ヘラ磨き「大」, PL48・54
23	須恵器	大甕	-	(11.8)	-	長石	灰	普通	外削り、内面回転磨き付	竈手直上層	TP10003

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
24	瓦	2.2	(1.0)	0.2	(0.4)	鋼	垂孔部の破片。裏に紙の痕跡有り。	東壁寄り床面	M10030, 30%, PL70
25	鎌	(4.6)	(1.8)	0.2	(4.2)	鉄	刃部の破片。刃部は若干彎曲する。	南西部下層	M10031, 20%, PL69
26	鎌	(3.5)	(1.7)	0.2	(2.8)	鉄	銛部の破片。刃部は彎曲し、刃先部に向かって突る。	南西部下層	M10022, 20%
27	不明	(6.3)	0.4	0.4	(5.2)	鉄	断面方形の棒状。表面の黒皮、或いは鉛筆の輪。*	竈火床面上層	M10023, 20%

第1093号住居跡(第67・68図)

位置 調査区東部のP13e4区に位置し、南に傾斜する台地の縁辺部に立地している。

重複関係 北西部の壁際を第1204・1205・1206号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.43m, 短軸3.38mの方形で, 主軸方向はN-7°-Eである。壁の立ち上がりは北壁で確認され, 高さが12cmで, ほぼ直立する。南壁付近は床面の高さまで削平されており, 壁の立ち上がりは確認できなかった。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められており, 壁溝が周回している。

竈 北壁中央部のやや東寄りに付設され, 焚口部から煙道部まで120cm, 両袖幅125cmである。壁外への掘り込みは60cmほどで, 袖部は床面と同じ高さの地山面の上に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し, 火熱を受けて赤変硬化しており, 煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

土層解説

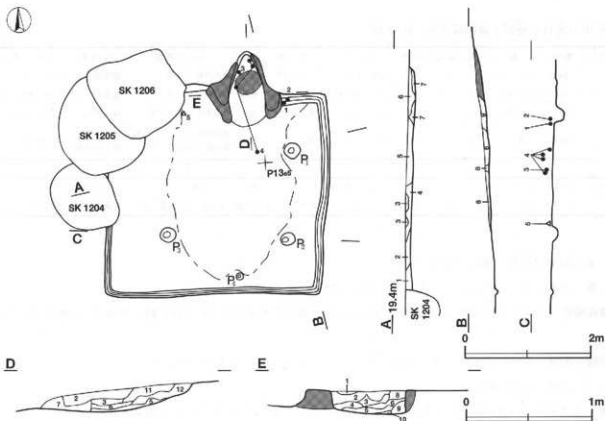
- | | | | |
|----------|---------------------------------|-----------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量, 粘土粒子少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 にぶい赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量, 粘土粒子少量 | 10 灰褐色 | ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量, 炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 炭化物中量, ロームブロック・焼土粒子少量 | 11 暗赤褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量, 炭化粒子少量 |
| 5 黒暗赤褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量 | 12 にぶい赤褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量 | | |
| 7 黒褐色 | 炭化物中量, ロームブロック・焼土ブロック少量 | | |

ピット 4か所。主柱穴はP1~P3で, 深さは11~18cmを測り, 北西部に想定される主柱穴は精査したが確認されなかった。出入口施設に伴うピットはP4が相当し, 深さは8cmである。

覆土 9層に分層され, ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

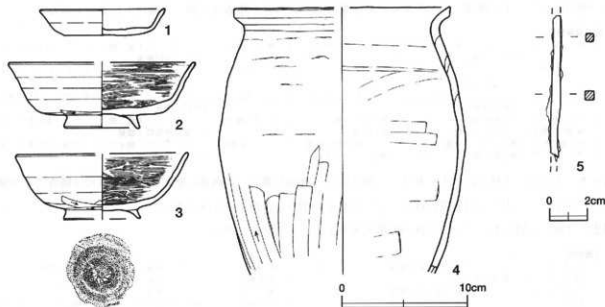
- | | | | |
|-------|------------------------|--------|---------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 7 黒暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子少量 | 8 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量 | 9 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | | |



第67図 第1093号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片61点(碗55, 小皿1, 甕5), 土製支脚1点, 不明鉄製品(釘?)1点が竈周辺の覆土下層や床面を中心に出土している。第68図1~5はいずれも火床部, あるいは竈手前の床面からの出土である。竈内から出土した土器のほとんどは破片で, 火熱を受けた痕跡も見られず, 投げ捨てられたように火床部内に散乱していた。

所見 竈内から出土した土器は, 出土状況から見て住居廃絶時に意図的に投棄されたと考えられ, 本跡の時期はそれらの土器の形状から10世紀後半と考えられる。



第68図 第1093号住居跡出土遺物実測図

第1093号住居跡出土遺物観察表(第68図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	小皿	9.8	2.1	7.6	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	竈東側床面	P10101, 100%, PL48
2	土師器	高台付碗	[14.6]	5.2	5.7	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	高台貼り付け後, ナデ	竈東側床面	P10102, 60%, PL48
3	土師器	高台付碗	[13.6]	5.2	[6.1]	雲母・長石	橙	普通	底部菊花状の工具痕	竈火床部	P10103, 40%
4	土師器	甕	[17.0]	(21.2)	-	雲母・長石	橙	普通	体部外面ヘラケズリ・輪積み痕, 内面ヘラナデ	竈火床部・竈手前床面	P10104, 15%

番号	器械	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	不明	(7.8)	0.6	0.5	(7.7)	鉄	断面方形の棒状, 鉄線の基部或いは結線車の軸。	竈西側床面	M10029

第1094号住居跡(第69・70図)

位置 調査区東部のP13c5区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 第1095号住居跡のほぼ全域と第1086号住居跡の中央部, 第1087号住居跡の西側部分を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.67m, 短軸2.26mの南北に長い長方形で, 主軸方向はN-10°-Eである。壁高は22~25cmで, 各壁ともほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で, 竈の手前から出入り口施設にかけてよく踏み固められており, 壁溝が周回している。

竈 北壁中央部のやや西寄りに付設されており, 焚口部から煙道部まで75cm, 両袖部幅110cmで, 壁外への掘

り込みは40cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されており、遺存状態が悪く、付近の床面には竈材の流出が見られる。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道の立ち上がり部には土製の支脚が据えられており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、粘土粒子・砂粒微量
 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 1か所。P1は出入り口施設に伴うピットで、深さは18cmである。また、壁溝内から深さ6～16cmの小ピット4か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。

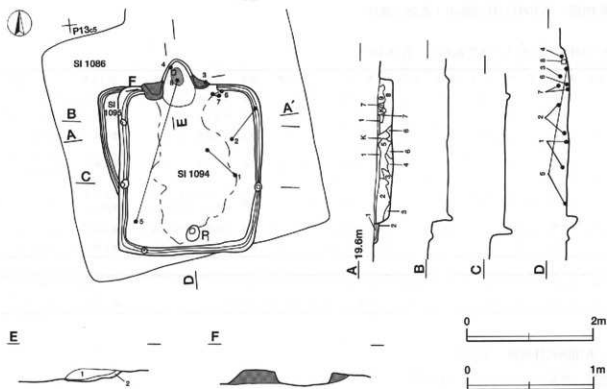
覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

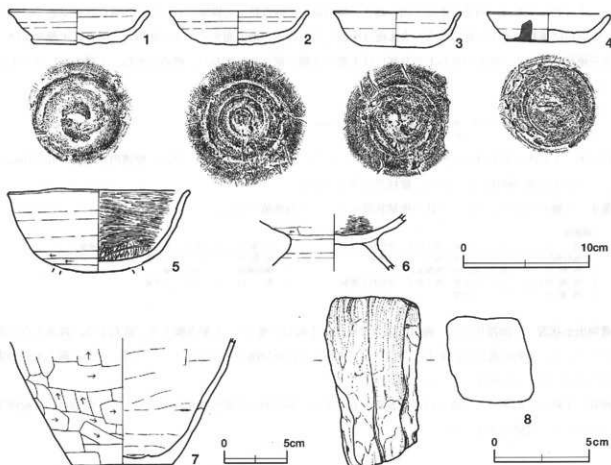
- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化物微量 | 8 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック多量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片73点（椀44、高台付椀16、小皿12、甕9）、土製支脚1点、磁石1点、鉄滓1点が出土している。遺物は竈付近に集中しており、火床部からは第70図4・5が出土している。また、竈の東側の床面からは、6・7が出土している。

所見 本跡から出土した小皿は口径・器高ともに大きく初現的な小皿の様相を呈しており、時期は10世紀後半でもやや古い段階と考えられる。



第69図 第1094・1095号住居跡実測図



第70図 第1094号住居跡出土遺物実測図

第1094号住居跡出土遺物観察表(第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	小皿	10.8	2.7	7.3	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	中央部床面	P1005, 95%, PL48
2	土師器	小皿	11.0	2.6	8.0	雲母・長石	橙	普通	底部回転ヘラ切り	東壁部下層	P1006, 90%, PL48
3	土師器	小皿	10.0	2.9	7.4	雲母・長石	橙	普通	底部回転ヘラ切り	竈東側中層	P10107, 70%
4	土師器	小皿	9.6	2.3	7.0	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	竈火床部	P10108, 70%, 外面油煙付着
5	土師器	高台付碗	14.2	(6.7)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り、 高台貼り付け痕有り	竈火床部・ 南西部床面	P1009, 80%, PL48
6	土師器	高台付碗	-	(4.6)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ削り、 高台貼り付け	竈東側床面	P10110, 30%
7	土師器	葉	-	(10.0)	8.0	雲母・長石・石英	にぶい黄	普通	片削り削り、 片削り削り	竈東側床面	P10111, 30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
8	支脚	13.5	7.6	6.8	1160	雲母片岩	直方体。焼熟し、脆い。	竈火床部	Q1003, 100%, PL48

第1095号住居跡(第69図)

位置 調査区東部のP13c5区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 第1086号住居跡の中央部を掘り込み、北西部を除く大部分が第1094号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 確認できたのは南北軸1.66m、東西軸0.31mとわずかな部分であり、主軸方向は西壁の指す方向から見て $N-2^{\circ}-W$ 、あるいは $N-88^{\circ}-E$ と推測される。壁高は4cmであり、壁の立ち上がりの様子は判然

としない。

床 ほぼ平坦で、硬化面は認められない。壁溝は確認された壁際を巡っている。

竈 第1094号住居跡に掘り込まれたことが想定され、遺存していない。

覆土 2層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡の大部分を掘り込まれているために本来の形状を明確に把握することはできなかったが、第1094号住居跡の東側には遺構が延びておらず、第1094号住居跡と同規模かそれ以下と推測することができる。また、本跡の時期は重複関係から見て8世紀前葉から10世紀後半のいずれかの時期に構築されたことは明らかであるが、出土遺物がなため時期の特定はできない。

第1096号住居跡 (第71～73回)

位置 調査区北東部のO1312区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。本跡から西へ6mには同時期と考えられる第1083号住居跡が位置している。

重複関係 東壁際の南寄り第1090号住居跡を掘り込み、P2の東側を第111号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.93m、短軸4.72mの方形で、主軸方向はN-3°-Wである。壁高は38～47cmで、各壁とも外方に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚き口から煙道部まで125cm、両袖部幅165cmで、壁外への掘り込みは40cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中の第4層が天井部の崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。袖部は床面と同じ高さの地山面上にローム土混じりの砂質粘土で構築されており、内側が火熱を受けて赤変している。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化しており、火床面直上からは多量の灰が貝殻片や骨片とともに検出されている。また、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

壁土層解説

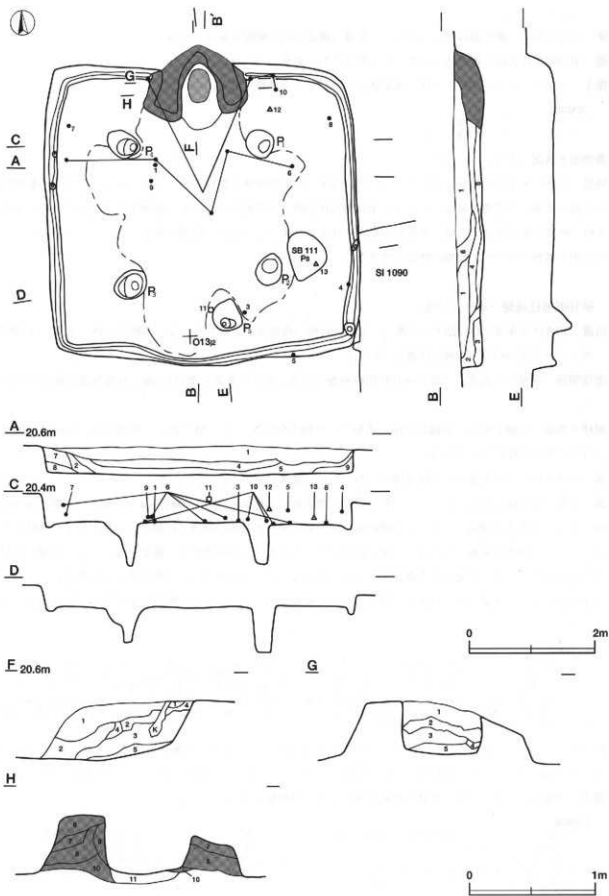
- | | | | |
|----------|------------------------|----------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、砂粒少量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量 |
| 2 にぶい赤褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 にぶい黄褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子・砂粒中量 |
| 3 にぶい赤褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 9 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子少量 | 10 暗褐色 | 砂粒中量、ロームブロック・粘土粒子少量 |
| 5 灰赤色 | 灰多量、焼土ブロック中量、炭化粒子少量 | 11 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量、砂粒少量 | | |

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4で、深さは52～75cmである。出入口施設に伴うピットはP5が相当し、深さは31cmである。また、壁溝内から深さ10cmほどの小ピット4か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。

覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

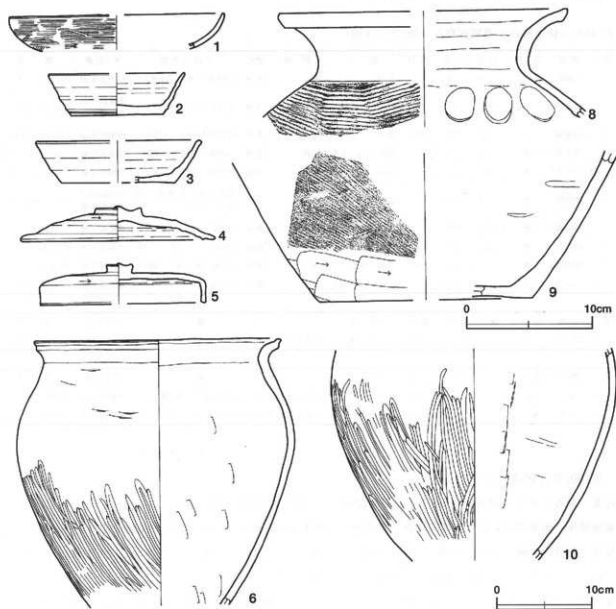
土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 8 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

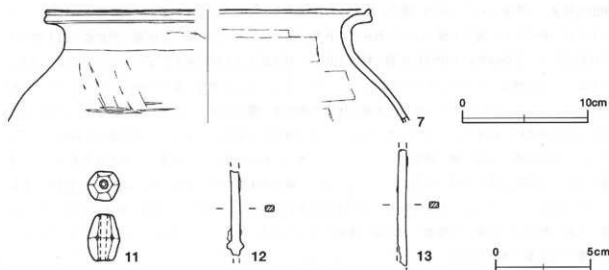


第71图 第1096号住居跡実測图

遺物出土状況 土師器片67点(杯29, 甕37, 甌1), 須恵器片43点(杯30, 蓋6, 甕6, 長頸壺1), 鉄鍔2点, 切子玉1点, 鉄滓1点が覆土下層を中心に散在した状態で出土している。杯類の土師器と須恵器の出土割合はほぼ同数であり, 土師器杯は古墳時代後期の特徴を残し, 須恵器杯は平底で箱形を呈している。第72・73図1は中央部, 3は南壁際のいずれも床下から出土したものである。5は南壁際の覆土中層から出土しており, 短頸壺に対応するものと考えられる。6は中央部の床面と西壁際の覆土中層から出土した破片が接合されたものであり, 住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。10は竈付近の床面から出土した破片数点が接合されたものであり, 出土位置から見て竈で使用されていたものと考えられる。12・13の鉄鍔はそれぞれ北東コーナー部の覆土中層と東壁際の覆土下層から出土している。また, 竈の火床部からは多量の灰に混じって貝殻片と小動物の骨片が出土しているが, いずれも微細であり同定には至らなかった。切子玉, 鉄滓は混入したものである。所見 本跡の時期は, 杯類の土師器と須恵器の構成比がほぼ同等であることや出土した土器の形状から見て8世紀前葉から中葉と考えられる。



第72図 第1096号住居跡出土遺物実測図(1)



第73図 第1096号住居跡出土遺物実測図(2)

第1096号住居跡出土遺物観察表(第72・73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[17.0]	(28)	-	灰石	橙	普通	体部外面へラ磨き, 内面ヘラナデ	中央部床面	P10112, 5%
2	須恵器	坏	[10.7]	3.3	7.2	長石	黄灰	普通	底部多方向のへラ磨り	北東部・北西部覆土中	P10113, 30%
3	須恵器	坏	[12.8]	3.4	9.0	長石	灰	普通	底部多方向のへラ磨り	南壁際床面	P10114, 30%
4	須恵器	蓋	15.2	2.8	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	外縁面へラ磨り, つまみ部削付	南東部中層	P10115, 90%, PL08
5	須恵器	蓋	[13.0]	3.3	-	長石	灰	普通	外縁面へラ磨り, つまみ部削付	南壁際中層	P10116, 60%, PL08
6	土師器	甕	25.4	(28.0)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部外面へラ磨き, 内面ヘラナデ	中央部床面・西壁際中層	P10117, 80%, PL09
7	土師器	甕	[25.6]	(9.0)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁磨き, 体部外・内面ヘラナデ	西壁際下層	P10118, 5%
8	須恵器	甕	[22.7]	(8.5)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部外面へラ磨り, 内面削付	北東部床面	P10119, 5%
9	須恵器	甕	-	(11.6)	[16.9]	雲母・長石	灰	普通	体部外面へラ磨り, 内面削付・磨り	中央部下層	P10120, 10%
10	土師器	甕	-	(22.3)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部外面へラ磨き, 内面ヘラナデ	南東部床面	P10121, 20%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
11	切子玉	2.4	1.7	0.2	(8.3)	水晶	片側穿孔, 12面体。	南壁際上層	Q10004, 95%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	鉄	(4.6)	0.4	0.3	(3.6)	鉄	断面長方形の棒状, 両端面の破片, 棒状固有。	南東部下層	M10032
13	不明	(6.1)	0.5	0.3	(3.5)	鉄	断面長方形の棒状, 断面の両端面は棒状の破片。	南東部中層	M10031

第1097号住居跡(第74・75図)

位置 調査区東部のO13f4区に位置し, 南に傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 西半部分で第1098号住居跡を掘り込み, 南東部を第1207号土坑, 第79号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.40m, 短軸3.37mの方形で, 主軸方向はN-8°-Wである。壁高は北壁で50cmを測り, 外傾して立ち上がる。南壁は傾斜した地形のため, 確認されなかった。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められており, 壁溝は東壁際から南壁際にかけて巡っている。

竈 北壁の中央部を壁外に30cmほど掘り込んで構築されており, 焚口部から煙道部まで95cm, 両袖部幅125cm

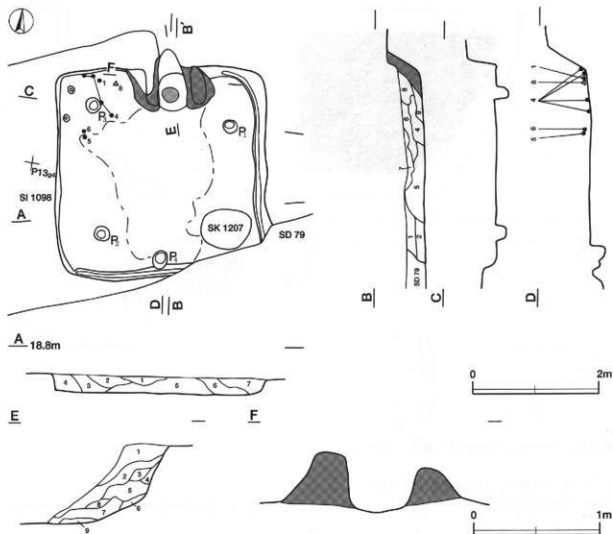
である。天井部は崩落しており、土層断面図中の第2層が天井部の崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多量に含んでいる。袖部は地山を掘り残したローム土を芯とし、その周りに砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変酸化しており、火床部直上からは灰が少量検出されている。また、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

面土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------|----------|---------------------|
| 1 暗 褐 色 | 粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック少量 | 6 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量 |
| 2 灰 黄 褐色 | 粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子少量 | 7 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・灰少量 |
| 3 褐 色 | ロームブロック多量 | 8 にぶい赤褐色 | 粘土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 褐 色 | ロームブロック多量、砂粒少量 | 9 灰 褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・灰少量 |
| 5 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒少量 | | |

ピット 4か所。主柱穴はP1～P3が相当し、深さ20～27cmである。南東コーナー寄りに配されていたと想定される柱穴は、第1207号土坑に掘り込まれたため、遺存していない。出入口施設に伴うピットはP4が相当し、深さは25cmで、中央部に向かって斜めに掘り込まれている。また、深さ5cmほどの小ピット2か所が西壁際の北寄りから検出されており、壁柱穴の可能性がある。

覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



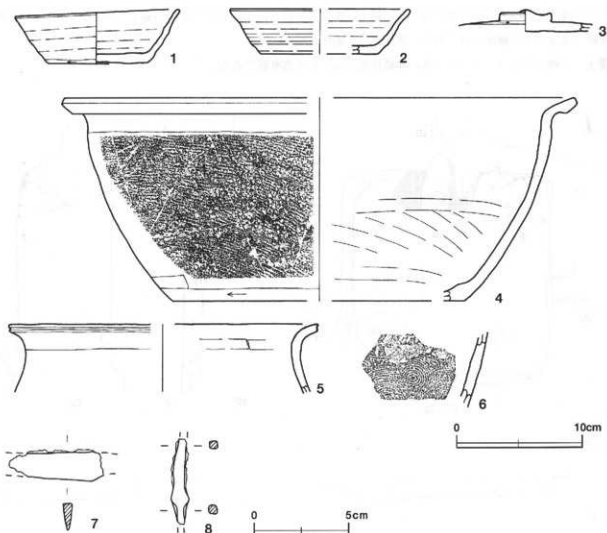
第74図 第1097号住居跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|--------|-------------------------------|
| 1 褐色色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | 7 褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量 | 8 褐色 | ロームブロック多量、砂粒少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・炭土粒子少量 | 9 暗赤褐色 | ロームブロック中量、炭土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック多量 | | |

遺物出土状況 土師器片28点(甕27, 櫃1), 須恵器片40点(杯22, 高台付杯4, 蓋6, 壺2, 鉢1, 甕3, 櫃2), 刀子1点, 鉄鎌1点が北西部を中心に出土している。第75図1・2・4~6・8はいずれも北西部からの出土であり, とくに1・4・8は床面から出土している。

所見 本跡から出土した供膳具類は須恵器で占められ, また須恵器の器種も前代と比べて増加しており, 出土土器の形状と併せて8世紀中葉と考えられる。



第75図 第1097号住居跡出土遺物実測図

第1097号住居跡出土遺物観察表(第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	杯	12.9	4.2	8.0	石英	褐灰	普通	底面網へり張り見, 一辺のみへり張り	北西部床面	P10122, 90%, PL48
2	須恵器	杯	[14.2]	3.6	[9.0]	炭母	灰	普通	底面網へり張り見, 多量網へり張り	北西部土中	P10123, 30%
3	須恵器	蓋	-	(12)	-	長石・石英	褐灰	普通	下縁網へり張り見, つまみ張り付	北東部土中	P10124, 30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	須臾器	鉢	[40.3]	16.2	[22.8]	雲母・長石・石英	灰白	普通	縁部外側縁が平明り、内面ヘラテ	北西部床面	P10125, 30%
5	土師器	甕	[24.4]	(5.4)	-	雲母・石英	明赤褐	普通	口縁外縁が平明り、内面ヘラテ	北西部下層	P10126, 5%
6	須臾器	甕	-	(6.0)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	外面同心円状の明り、内面ヘラテ	北西部下層	TP10004, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	刀子	(5.1)	1.6	0.4	(11.0)	鉄	刃部の破片。	北東部壁土中	M10033, 40%
8	鏝	(4.5)	0.7	0.5	(4.0)	鉄	脆破部から基部にかけての破片、周部の表面有り。	北西部床面	M10034

第1099号住居跡 (第76・77図)

位置 調査区東部のP13h2区に位置し、南に傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 電付近で第1098号住居跡を掘り込み、南西部から北東部にかけて第79号溝跡に掘り込まれている。また、北西部が攪乱を受けている。

規模と形状 南側部分を第79号溝跡に掘り込まれているために、東西軸は3.45m、南北軸は1.80mだけが確認され、残存部分の形状から見てN-2°-Eを主軸とする方形または長方形と推定される。壁の立ち上がりは北壁と西壁で確認され、いずれも高さが30cmほどで、壁はほぼ直立している。

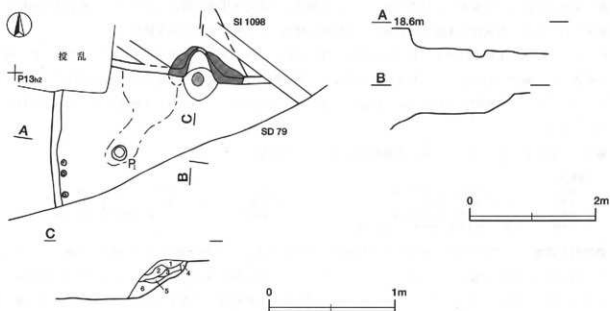
床 はほぼ平坦で、竈の西側に硬化面が認められる。壁溝は確認された壁際にはない。

竈 北壁を壁外に40cmほど掘り込んで砂質粘土で構築されており、焚口部から煙道部まで85cm、両袖部幅120cmである。天井部は崩落しており、袖部は壁際にその痕跡が認められる。火床面は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|--------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 | 4 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量 | 5 暗褐色 | 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量 |

ピット 1か所。主柱穴はP1で、深さは12cmである。対応する柱穴は、第79号溝跡によって掘り込まれたため不明である。また、西壁際から深さ10cmほどの小ピット3か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。



第76図 第1099号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片9点(杯5, 甕3, 鉢1), 須恵器片10点(杯4, 高台付杯1, 甕5), 灰軸陶器片1点(高台付皿), 鉄滓1点が出土している。遺物はほぼ全域に散在しており, そのほとんどが細片のため, 図示できたのは3点だけである。第77図1は甕付近の覆土中から出土した破片2点が接合されたものであり, 猿投産黒笹14号窯式期ないし黒笹90号窯式期の古段階のものと思われる。

所見 供膳具における土師器と須恵器の出土割合がほぼ同等で, 須恵器の中には酸化焙焼成のものが多いことなど, 須恵器生産の終末期の様相を呈しており, 時期は9世紀後半と考えられる。



第77図 第1099号住居跡出土遺物実測図

第1099号住居跡出土遺物観察表(第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	灰軸陶器	高台付皿	-	(18)	[10.1]	緻密	灰白・灰黄	良好	高台貼り付け後, ロクロナデ, 三日月高台	甕付近覆土中	P10137, 5%, 黒笹90号窯式
2	須恵器	杯	[14.0]	(3.6)	-	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	体部ロクロナデ	覆土中	P10138, 5%
3	土師器	杯	[15.0]	(1.9)	-	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部ロクロナデ	北東部覆土中	P10139, 5%

第1250号住居跡(第78図)

位置 調査区東部のP13c4区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 第1252号住居跡の中央部, 第1251号住居跡の北東部を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.10m, 短軸3.90mの方形で, 主軸方向は $N-2^{\circ}-E$ である。壁高は20~25cmで, 各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 竈の手前から出入り口施設にかけてよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 北壁中央部のやや東寄りに付設されており, 西袖部の一部と火床面が確認されている。袖部は砂質粘土で構築されており, 火床面は床面と同じ高さの平ら面を使用し, 火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 4か所。主柱穴はP1~P3が相当し, 深さは15~23cmであり, 北西コーナー寄りに想定される柱穴は精査したが確認されなかった。P4は深さ7cmで, 南壁際の中央部にあり, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。また, 各壁際から10~20cmの間隔で, 深さ5~7cmの小ピットが48か所検出されており, 壁柱穴と考えられる。

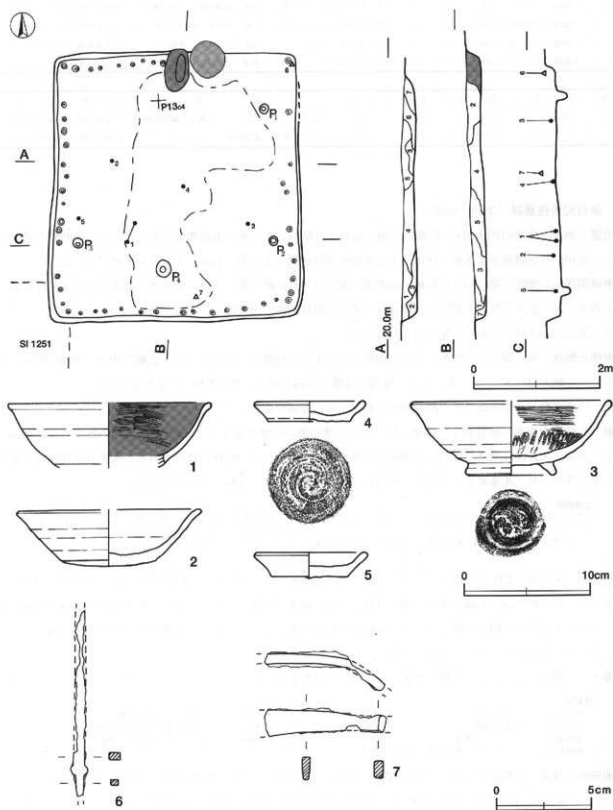
覆土 7層からなり, ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子・砂粒少量 |
| 4 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 | | |

遺物出土状況 土師器片74点(碗59, 高台付碗8, 小皿6, 甕1), 灰軸陶器片1点(瓶), 鉄滓1点, 刀子1点が南半部分の覆土下層を中心に出土している。出土した土器は細片が多く, 完形に近いものでは第78図4が中央部の覆土下層から出土している。また, 2・5はいずれも西壁寄りの覆土下層, 1・3は中央部の覆土下層から出土している。6の鉄滓は北東コーナー部, 7の刀子は南壁際のいずれも覆土上層から出土している。

所見 本跡から出土した小皿はいずれも口径が9cm未満で小形化しており、時期は10世紀後半以降と考えられる。



第78図 第1250号住居跡・出土遺物実測図

第1250号住居跡出土遺物観察表(第78図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	碗	[160]	(5.1)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外縁のクロナテ、内面へう磨き	中央部下層	P10140, 40%
2	土師器	坏	[142]	4.5	7.6	雲母・灰石・石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り磨し	西壁寄り下層	P10141, 30%
3	土師器	高台付碗	[15.6]	5.9	6.8	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ磨り足、高台磨き付	中央部下層	P10142, 40%
4	土師器	小皿	8.6	1.6	6.5	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	中央部床面	P10143, 100%, P149
5	土師器	小皿	[8.6]	2.0	6.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	西壁寄り下層	P10144, 50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	鐵	(9.7)	0.6	0.4	(5.9)	鉄	寛披部から蓋部にかけての破片、棘状開有り。	北東部上層	M10035, P149
7	刀子	(6.8)	(1.5)	0.4	(12.0)	鉄	蓋部の破片、端部屈曲。	南壁際上層	M10036

第1252号住居跡(第79~82図)

位置 調査区東部のP13c3区に位置し、南に緩やかに傾斜した台地の南端部に立地している。同時期と考えられる第1083号住居跡が北北東へ10m、また第1096号住居跡が北北西へ10mにそれぞれ位置している。

重複関係 北壁際で第1254号住居跡、南西部で第1251号住居跡を掘り込み、中央部の覆土を第1250号住居跡、南西部を第1222号土坑、北壁際の西側部分を第1255号住居跡、南壁際の中央部を第1223号土坑、南東コーナ一部を第1224号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 南に傾斜した地形のため、南壁の立ち上がりは確認されなかった。長軸7.20m、短軸7.02mの方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁高は北壁で21cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周囲している。

竈 北壁の中央部に砂質粘土で構築されており、焚口部から煙道部まで130cmで、壁外への掘り込みは50cmほどである。天井部は崩落しており、袖部は火床部東側の床面にその痕跡が認められる。火床面は10cmほど皿状に掘り窪められて赤変硬化しており、煙道は火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。

覆土層解説

- | | |
|---------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 強暗赤褐色 焼土ブロック・砂粒中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子・砂粒中量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒子・砂粒中量、炭化粒子少量 | 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量 |

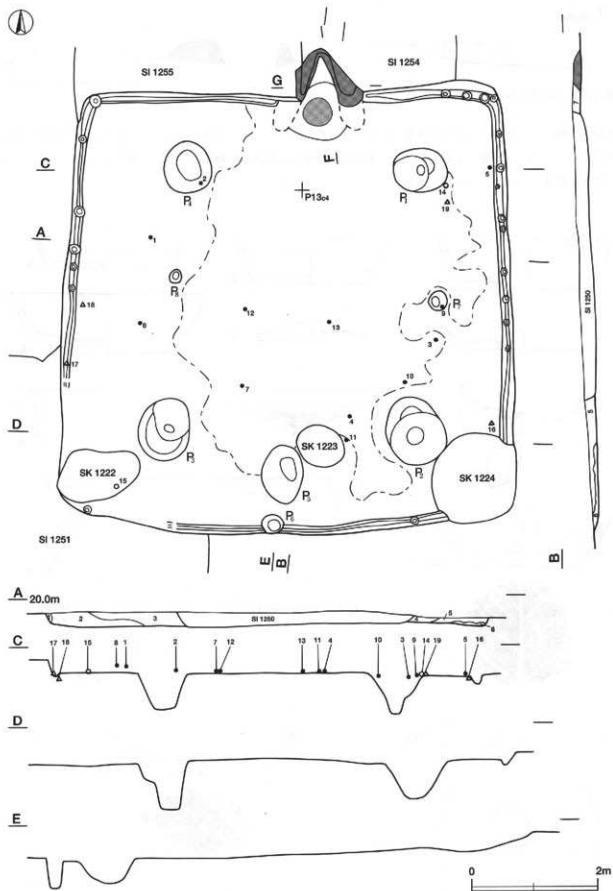
ピット 8か所。主柱穴はP1~P4で、深さは58~76cmである。出入り口施設に伴うピットはP5・P6で、深さはそれぞれ36cmと45cmを測り、竈に対峙して同一線上に位置している。P7・P8は深さ23cmと33cmで、いずれも主柱穴の中間に位置しており、補助的な柱穴と考えられる。また、壁溝内から深さ5~10cmの小ピット21か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。

覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|----------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子微量 | 6 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック微量 | 7 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 4 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片125点(坏60, 甕63, 瓶2), 須恵器片134点(坏98, 高台付坏3, 蓋21, 甕12), 刀子1点, 鉄鏃2点, 鉋具1点, 管状土鏝2点が南壁際や西壁際の覆土下層及び床面を中心に出土している。第81・82図5, 14の管状土鏝, 19の鉋具は北東コーナ一部, 16の刀子は南東コーナ一部, 17・18の鉄鏃は西壁際, 15の管状土鏝は南西部, 7・12・13は中央部のいずれも床面から出土している。



第79图 第1252号住居跡实测图(1)

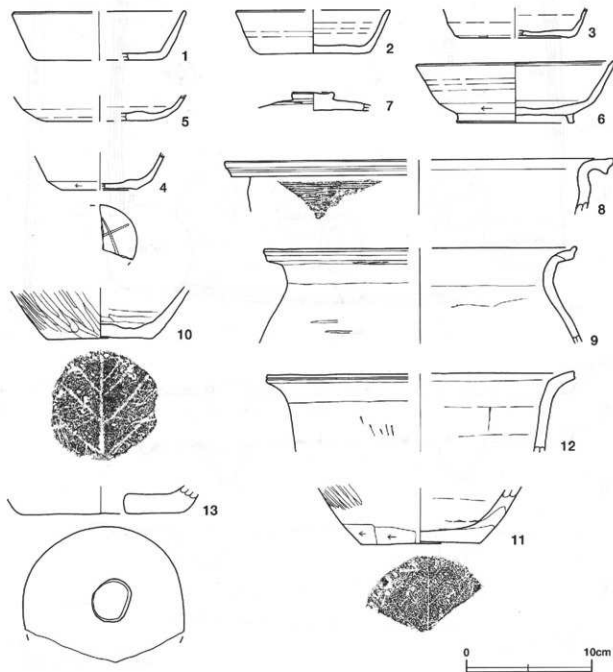
F 20.2m

G

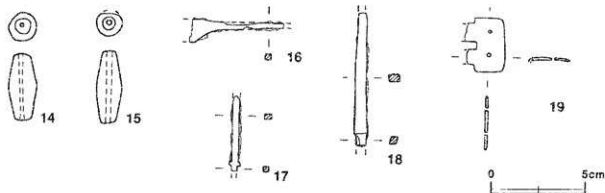


第80図 第1252号住居跡実測図(2)

所見 本跡は出土土器から8世紀前葉に位置づけられ、およそ50㎡の面積を有するこの時期の最も大形の住居跡である。また、同時期の土器が出土した第1083・1096号住居跡と主軸方向や住居の形態が近似しており、同じ集落を構成していたことが想定される。



第81図 第1252号住居跡出土遺物実測図(1)



第82図 第1252号住居跡出土遺物実測図(2)

第1252号住居跡出土遺物観察表(第81・82図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	千鉢の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	杯	[13.6]	3.9	[9.9]	雲母・長石・石英	灰	普通	底部 方向の手持ちへラ張り	西側寄り下層	P10149, 40%
2	須恵器	杯	[12.1]	3.5	8.3	雲母・長石・石英	灰	普通	底部 両側へラ張り後、へラナデ	北西部床面	P10150, 40%
3	須恵器	杯	-	(2.4)	[8.6]	雲母・長石	黄灰	普通	底部下縁、底部両側へラ張り	東側寄り床面	P10151, 30%
4	須恵器	杯	-	(3.0)	[8.3]	長石	灰	普通	底部下縁、底部両側へラ張り	南側寄り床面	P10152, 30%, 長径へラ張り×+1, PL54
5	須恵器	杯	-	(2.0)	[10.1]	雲母・長石・石英	灰	普通	底部 方向の手持ちへラ張り	東側寄り床面	P10153, 10%
6	須恵器	台付付杯	15.6	4.9	9.3	雲母・長石・石英	灰	普通	縁部・底部の両方にへラ張り	覆土中	P10154, 90%, PL48
7	須恵器	盞	-	(1.5)	-	雲母・長石・石英	灰黄褐色	普通	縁部・底部の両方にへラ張り	中央部床面	P10155, 20%
8	須恵器	鉢	31.0	(4.4)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	縁部・底部の両方にへラ張り	西側寄り床面	P10160, 5%
9	土師器	甕	[23.6]	(7.6)	-	雲母・長石・赤色粘土	橙	普通	底部内・外面へラナデ	東側寄り床面	P10136, 5%
10	土師器	甕	-	(4.1)	4.4	長石・赤色粘土	にぶい橙	普通	底部内・外面へラナデ	東側寄り床面	P10158, 5%
11	土師器	甕	-	(4.5)	9.1	雲母・長石・石英	橙	普通	縁部・底部の両方にへラ張り	南側寄り床面	P10139, 5%
12	土師器	甕	[34.4]	(6.1)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部内・外面へラナデ	中央部床面	P10157, 5%
13	土師器	甕	-	(2.3)	12.7	雲母・長石・石英	明赤褐色	普通	底部両側へラナデ	中央部床面	P10161, 5%

番号	器種	長さ	幅	孔径	底径	材質	特徴	備	出土位置	備考
14	管状土師	3.6	1.5	0.2	7.0	土製	ナデ、にぶい黄褐色を呈する。		北東部床面	DP1005, 100%, PL56
15	管状土師	3.8	1.4	0.3	(5.3)	土製	ナデ、黄褐色を呈する。		南西部床面	DP1006, 90%, PL56

番号	器種	長さ	幅	厚さ	底径	材質	特徴	備	出土位置	備考
16	刀子	(4.9)	1.3	0.3	(3.1)	鉄	胴部から茎部にかけての破片、両面か。		南東部床面	M10041
17	鏃	(3.9)	0.3	0.3	(2.3)	鉄	胴部から茎部にかけての破片、斜状面有り。		西側寄り床面	M10042
18	鏃	(6.4)	0.6	0.4	(7.4)	鉄	胴部から茎部にかけての破片、片状面有り。		西側寄り床面	M10043
19	短針	(2.1)	2.9	0.2	(4.8)	銅	針先・弓金・丸先、直線は直線部、反折部は丸先が湾曲。		北東部床面	M10044, PL70

第1253号住居跡(第83~85図)

位置 調査区東部のP13a4区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 西側部分で第1254号住居跡を掘り込み、北西コーナー部を第1208・1306号土坑、各コーナー寄りを第114号掘立建物跡にそれぞれ掘り込まれている。

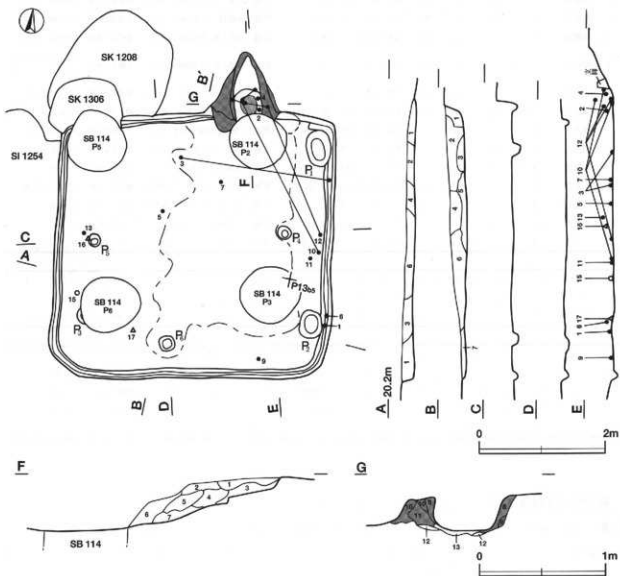
規模と形状 長軸4.48m、短軸1.27mの方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は22~30cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、竈の手前から出入り口施設にかけてよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の東寄りに付設されており、焚口部を第114号掘立柱建物跡に掘り込まれているために、確認できた規模は火床部から煙道部まで100cm、両袖部幅100cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中の第5層が天井部の崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多量に含んでいる。袖部は西袖部が遺存しており、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は北壁ラインの外側に位置し、浅い皿状に掘り窪められている。また、火床面と袖部の内側は火熱を受けて赤変硬化しており、使用頻度の高さが窺われる。さらに、煙道の立ち上がり部には土製支脚が据えられており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|----------|-------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 炭土ブロック多量、炭化粒子・粘土粒子中量、ローム粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 暗赤褐色 | 炭土ブロック多量、炭化粒子・粘土粒子少量 | 8 だいぶ赤褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・炭土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム粒子・炭土ブロック・粘土粒子少量 | 9 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 暗赤褐色 | 炭土ブロック・粘土粒子中量 | 10 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子少量 |
| 5 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒多量、炭土ブロック中量 | 11 暗褐色 | ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒少量 |
| 6 暗赤褐色 | 炭土ブロック多量、炭化粒子・粘土粒子少量 | 12 暗赤褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック・炭土ブロック少量 |
| | | 13 赤褐色 | 炭土ブロック多量、灰少量 |



第83図 第1253号住居跡実測図

ピット 6か所。主柱穴はP1～P3が相当し、深さは14～16cmを測り、北西部に想定される柱穴は第114号掘立柱建物跡に掘り込まれているために遺存していない。P4・5は深さ15cmと11cmで、主柱穴の中間に位置し、補助的な柱穴と考えられる。P6は深さ10cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

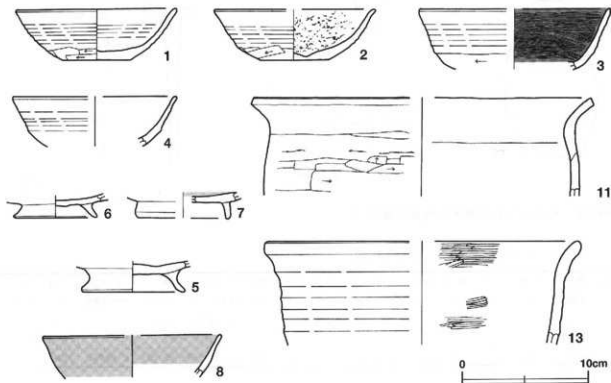
覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

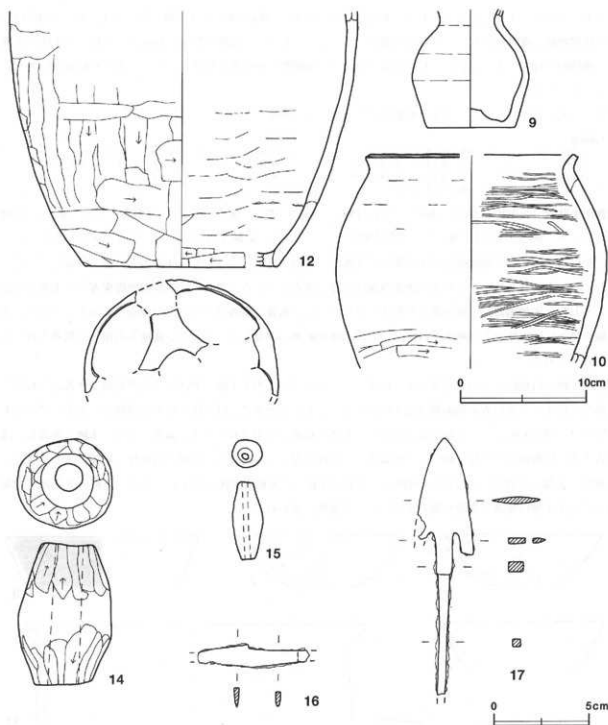
- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、黄土粒子少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・黄土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、黄土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量、黄土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、黄土粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、黄土粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片216点（碗145, 高台付碗32, 皿1, 甕32, 甔5, 壺1）, 須恵器片5点（甕5）, 灰釉陶器片2点（碗2）, 管状土錘2点, 土製支脚1点, 刀子1点, 鉄鏝1点, 釘1点, 馬骨1体分が出土している。第84・85図7の灰釉陶器碗は中央部やや北寄りの床面から出土しており、体部内面に金が付着している。また、甔の火床部から出土した2の体部内面には漆が付着している。さらに、9は南壁際東寄りの床面から出土しており、灰釉陶器の小瓶を模した形状を呈している。馬骨は南西コーナー部の床面から出土しており、出土地点付近には土坑などが検出されておらず、本跡廃絶後の埋没しきっていない窪地を利用して埋葬されたものと考えられる。

所見 本跡の時期は、土師器小皿がまだ出現していないことや出土土器の形状から10世紀前半と考えられる。本跡から出土した金付着灰釉陶器は出土例が少なく、主に官衙あるいは寺院に関わる遺跡から出土しているものであり、使用目的としては紺地金泥絵などの写経や絵画に使用されたとする論究がある。本跡の場合も、漆付着土器や灰釉陶器の小瓶を模した土師器壺との共伴状況などから見て、同様の可能性が指摘できる。また、当遺跡の北部に位置する第772号住居跡からも金の付着した灰釉陶器碗が出土しており、遺跡の北端部と南端部からの出土例は集落の変遷や構造を考える上で重要と思われる。



第84図 第1253号住居跡出土遺物実測図(1)



第85図 第1253号住居跡出土遺物実測図(2)

第1253号住居跡出土遺物観察表(第84・85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.7	4.1	5.4	長石・石英	橙	普通	縁7割削いへり、底1割削いへり	南東部床面	P10162, 100%, PL40
2	土師器	坏	[12.7]	4.0	5.4	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	下部下端手持ちへり削り、 底部一方向のへり削り	竈火床部	P10163, 60%, 内面漆付着
3	土師器	筒	[15.0]	(4.8)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	縁5割削いへり削り、内面へり削り	北・東部床面	P10164, 30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	土師器	椀	[15.0]	(4.0)	-	石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部ロクロナデ、内面調整	竈火床部	P10165, 20%
5	土師器	高台付椀	-	(2.5)	8.0	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	高台貼り付け後、ロクロナデ	中央部床面	P10166, 20%
6	土師器	高台付椀	-	(1.9)	6.4	雲母・石英	にぶい橙	普通	高台貼り付け後、ロクロナデ	南東部下層	P10167, 10%
7	灰釉陶器	高台付椀	-	(2.6)	[7.2]	石英	灰白、オリーブ黄	良好	高台貼り付け後、ロクロナデ、内面施釉	中央部床面	P10168, 10%、内面金付着、PL49、東山2号室式期*
8	灰釉陶器	椀	[14.0]	(3.4)	-	緻密	灰、オリーブ黄	良好	体部ロクロナデ、釉は硝毛塗り	西壁際土牛	P10169, 5%、黒線90号室式期
9	土師器	椀	-	(9.4)	6.8	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部ロクロナデ、崖縁ヘラナデ	南東部床面	P10171, 90%, PL49
10	土師器	甕	[16.2]	(17.0)	-	赤色粒子	橙	普通	体部外面ナデ、下層ヘラ削り、内面ヘラ磨き	竈火床部・東壁際床面	P10173, 20%
11	土師器	甕	[26.8]	(7.8)	-	長石・石英	橙	普通	口縁磨き、口縁ヘラ削り、内面ヘラ磨き	東壁際床面	P10174, 5%
12	土師器	椀	-	(20.3)	15.4	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ・磨機皿、孔ヘラ削り	竈火床部・東壁際床面	P10175, 30%
13	土師器	椀	[24.6]	(8.2)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外周ロクロナデ、内面ヘラ磨き	西壁際上層	P10176, 5%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
14	管状土師	7.5	5.0	1.8	(147.0)	土製	両端部ヘラ削り、明赤褐色を呈する。	東壁際上層	DF1007, 95%, PL56
15	管状土師	4.2	1.6	0.4	8.7	土製	ナデ、にぶい黄褐色を呈する。	南西部床面	DF1008, 100%, PL56

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
16	刀子	(6.0)	1.1	0.3	(6.8)	鉄	刃先・基元欠損、片側のみ。	西壁際中層	M10046
17	鏃	(13.6)	(3.0)	0.6	(27.0)	鉄	長三角形式、磨快有り。	南西部床面	M10047, 90%, PL59

第1255号住居跡 (第86図)

位置 調査区東部のP13b3区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 南壁際で第1252号住居跡、全体が第1254号住居跡を掘り込み、東壁際と西壁際は第96号掘立柱建物跡、中央部を第114号掘立柱建物跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.60m、短軸3.35mの方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は最も残りのよい西壁で12cmを測り、壁は外方に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 遺存状態が悪く、北壁中央部の壁際から火床面が確認されただけである。付近の床面に粘土粒子や砂粒が散在しており、竈材の一部が流出したものと考えられる。火床面は北壁ラインの内側に位置し、床面と同じ高さの平坦面で、火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 10か所。壁際から深さ5cm程度の小ピット10か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。

覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

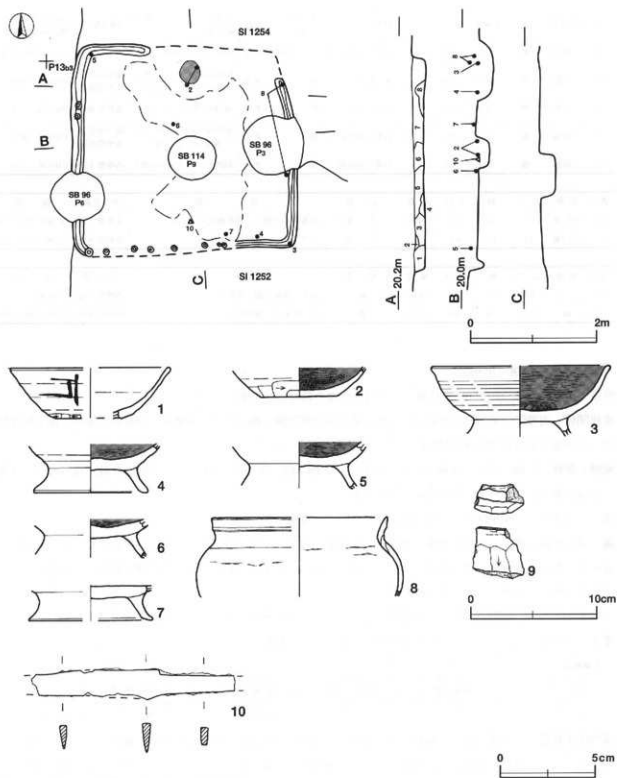
土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-------------------------|---|-----|----------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 | 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 6 | 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 4 | 暗褐色 | ロームブロック中量 | 8 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |

遺物出土状況 土師器片73点 (椀49, 高台付椀12, 甕12), 須恵器片14点 (甕14点), 騎羽口1点, 刀子1点が出土している。遺物はほぼ全域に散在しており、第86図2が竈火床部, 6が中央部の床面, 3・4が南東コーナー部の床面からそれぞれ出土している。また、北東部の覆土下層から出土した1の体部外面には右横位で

「万」と墨書されている。10の刀子は中央部の床面から出土しており、切先部と茎尻部を欠損している。鑢羽口は混入したものである。

所見 本跡は、主柱穴をもたない住居跡である。本跡からは鑢羽口が出土しており、付近に鍛冶工房等は確認されていないが、他の住居跡から出土している多くの鉄滓とともに、鍛冶関連施設の存在を窺わせるものである。時期は、供膳具類に須恵器が見られないことや出土土器の形状から10世紀前半と考えられる。



第86図 第1255号住居跡・出土遺物実測図

第 1255 号住居跡出土遺物観察表 (第 86 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[12.6]	4.0	[5.0]	赤色粒子	橙	普通	体部ロクロナデ, 下端手持ちヘケ削り	北東部下層	P10185, 20%, 体部外部磨き「万」, PL64
2	土師器	坏	-	(2.4)	6.0	長石・石英	にぶい橙	普通	短口深縁いづれ, 縁部ヘケ削り	竈火床部	P10186, 20%
3	土師器	高台付碗	[14.0]	(5.6)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	高台貼り付け後, ロクロナデ	南東部床面	P10187, 40%
4	土師器	高台付碗	-	(3.8)	8.9	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	高台貼り付け後, ロクロナデ	南東部床面	P10188, 20%
5	土師器	高台付碗	-	(3.7)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	高台貼り付け後, ロクロナデ	北西部中層	P10189, 20%
6	土師器	高台付碗	-	(3.1)	-	長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	高台貼り付け後, ロクロナデ	中央部床面	P10190, 20%
7	土師器	高台付碗	-	(2.8)	[9.6]	長石・赤色粒子	橙	普通	高台貼り付け後, ロクロナデ	南壁際床面	P10191, 10%
8	土師器	壺	[13.9]	(6.3)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部ナデ, 胴部ヘケ削り, 縁部ヘケ削り	東壁際上層	P10192, 20%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
9	羽口	(4.0)	(4.0)	-	(31.5)	土製	外面ヘケ削り, 橙色を呈する。	南東部遺土中	DP10010, 10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
10	刀子	(10.7)	1.6	0.4	(19.0)	鉄	刃先・茎尻欠損, 両面有り。	中央部床面	M10048, 70%, PL68

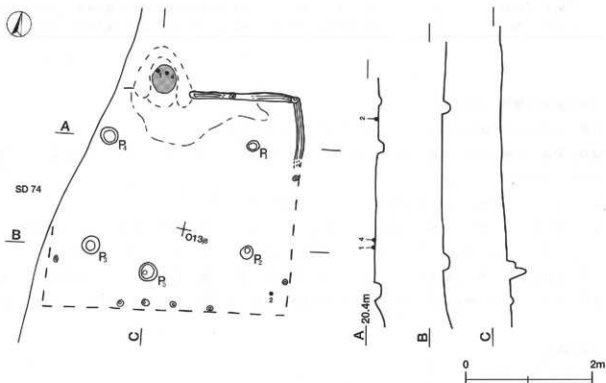
第 1256 号住居跡 (第 87・88 図)

位置 調査区東部の O137 区に位置し, 南東に傾斜した台地の南端部に立地している。

重複関係 西壁際を南北に第 74 号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 床面まで削平された状態で検出されたため, 竈とピットの位置から判断して, N-9°-W を主軸とする長軸 3.80m, 短軸 3.50m の方形と推定される。

床 竈の手前に硬化面の広がり方が認められ, 壁溝は北東コーナー部を巡っている。



第 87 図 第 1256 号住居跡実測図

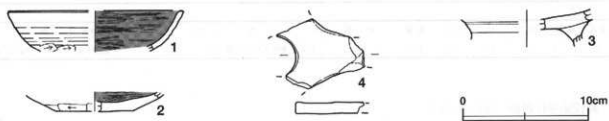
竈 遺存状態が悪く、北壁際のやや西寄りから火床面が確認されただけである。付近の床面には塵材の流出が見られ、粘土粒子や砂粒が散在している。火床面は北壁ラインの外側に位置し、火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは10～15cmである。P5は深さ34cmで、竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、壁溝内や壁際から深さ4～9cmの小ピットが10か所検出されており、壁柱穴と考えられる。

覆土 確認できなかった。

遺物出土状況 覆土がないために遺物は少なく、土師器片8点(腕4, 高台付腕1, 甕2, 甌1)が出土しただけである。第88図1・3・4はいずれも竈の火床面から出土している。

所見 本跡は床面の大部分が削平された状態で検出されたが、ピットの規則的な配置から規模を推定することができた。時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第88図 第1256号住居跡出土遺物実測図

第1256号住居跡出土遺物観察表(第88図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	腕	[13.8]	(3.1)	-	灰石・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り	竈火床部	P10193, 5%
2	土師器	腕	-	(1.5)	[6.0]	長石	にぶい橙	普通	縁部斜めに削り、縁部へ削り	南東部床面	P10194, 5%
3	土師器	高台付腕	-	(2.9)	-	灰石・石英	橙	普通	高台削り付け後、ロクロナデ	竈火床部	P10195, 5%
4	土師器	甌	-	(1.0)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部ナデ、孔へラ切り	竈火床部	P10196, 5%

第1300号住居跡(第89・90図)

位置 調査区西部のQ10d6区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長軸3.60m, 短軸3.40mの方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁高は24～26cmで、各壁とも外方に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部を壁外に10cmほど掘り込んで構築されており、焚口部から壁道部まで75cm, 両袖部幅110cmである。袖部は10cmほど掘り下げた部分にローム土と砂質粘土を用いて床面と同じ高さまで埋め戻し、その上にさらに砂質粘土を用いて構築されている。火床面は10cmほど皿状に掘り窪められており、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道の立ち上がり部には土師器甕が支脚として据えられており、煙道は急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化物少量
- 4 暗褐色 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量

- 5 灰褐色 粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
 6 暗赤褐色 砂粒多量、焼土ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
 7 灰褐色 ロームブロック・粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
 8 にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土粒子少量

ピット 5か所。P1は深さ29cmで、南壁際中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

P2～P5は深さ18～22cmで、壁溝内から検出されており、壁柱穴と考えられる。

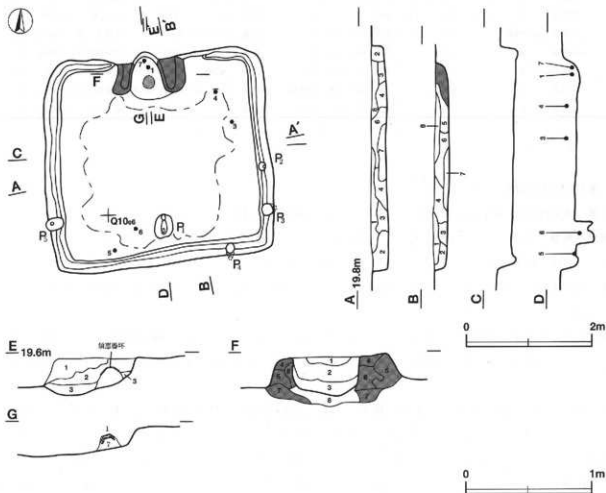
覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

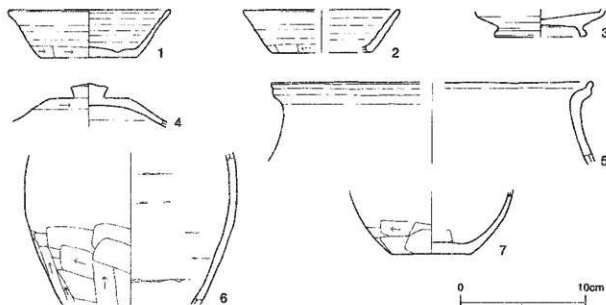
- | | | | |
|-------|-----------------------|------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量 | 7 褐色 | ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子少量 | | |
| 4 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片10点(杯2, 甕8), 須恵器片13点(杯9, 高台付杯1, 蓋2)がほぼ全域から散在した状態で出土している。第90図7は支脚に転用された土師器甕で、煙道の立ち上がり部に逆位で据えられており、被熱している。また、その上面には1が逆位で伏せられており、火熱を受けた痕跡はない。5・6は南壁際の床面から破砕された状態でまとまって出土しており、住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見 支脚に転用された甕の上面に伏せられて出土した1は火熱を受けておらず、住居廃絶時に意図的に遺棄されたものと考えられる。時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第89図 第1300号住居跡実測図



第90図 第1300号住居跡出土遺物実測図

第1300号住居跡出土遺物観察表 (第90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	短壺	環	12.8	3.8	7.6	雲母・長石・石英	灰	普通	高麗焼への影響、毛糸への影響	竈火床部	P10197, 50%, PL.19
2	須恵埴	環	[12.4]	3.4	[7.8]	長石	灰	普通	高麗焼への影響、下層層への影響	北西側土中	P10198, 10%
3	須恵器	高台付環	-	(22)	[7.2]	雲母・長石・石英	灰門	普通	高台崩れ付後、コクロナテ	東壁際中層	P10199, 20%
4	須恵器	壺	(3.4)	-	-	雲母・長石・石英	灰	普通	大井部崩れ付後の割れへり張り	北東部中層	P10200, 30%
5	土師器	壺	[25.4]	(7.5)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	口縁部割れ付、器底内・外面ナテ	南壁際床面	P10201, 5%
6	土師器	壺	-	(12.1)	-	雲母・長石・石英	暗赤褐	普通	高麗焼への影響、内面ナテ、高麗焼	南壁際床面	P10202, 40%
7	土師器	壺	-	(5.0)	6.4	長石・赤色矽子	赤陶	普通	高麗焼への影響、高麗焼への影響	竈火床部	P10203, 10%

第1301号住居跡 (第91図)

位置 調査区西部のQ1048区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長軸4.02m、短軸3.42mの若干東西に長い長方形で、軸方向はN-2°-Eである。床面が露出した状態で検出されたため、壁の立ち上がりは確認されなかった。

床 ほぼ平坦で、竈の手前から出入り口施設にかけてよく踏み固められており、壁溝が南壁際の中央部を除いて周回している。

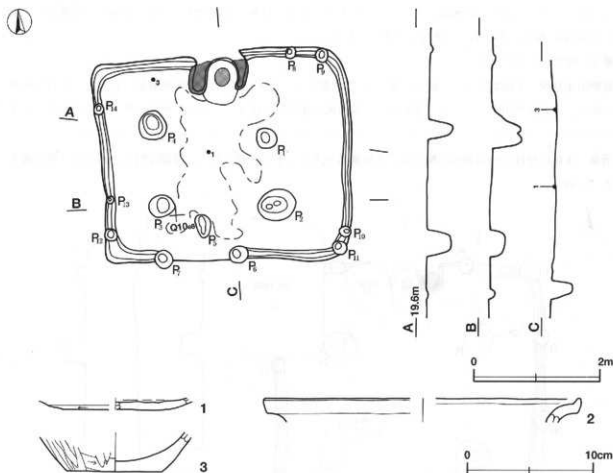
竈 北壁の中央部に砂質粘土で構築されており、焚口部から煙道部まで75cm、両袖部幅90cmで、壁外への掘り込みはない。袖部は砂質粘土で構築されており、火床面は浅い皿状に掘り窪められ、火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 14か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは24~52cmで、P2の底面からは柱の圧痕が2か所確認されている。P5は深さ20cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。壁溝内から検出されたP6~P14は深さ18~34cmで、壁柱穴と考えられ、とくにP6・7は南壁際にほぼ100cmの距離をおいて位置しており、両ピット間からは壁溝が検出されていないため、出入り口施設との関連が想定される。

覆土 確認されなかった。

遺物出土状況 土師器片3点(甕3)、須恵器片1点(杯1)が床面に散在して出土している。第91図1は中央部の床面、2はP3の覆土中、3は竈の西側の床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡のP2の底面から柱の圧痕が2か所確認されており、立て替えが行われたことが想定される。時期は出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第91図 第1301号住居跡・出土遺物実測図

第1301号住居跡出土遺物観察表(第91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	杯	-	(1.0)	[8.5]	雲母・長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り	中央部床面	P10204, 5%
2	土師器	甕	[25.0]	(1.9)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	P3覆土中	P10205, 5%
3	土師器	甕	-	(3.1)	[7.6]	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部5面・流部ヘラ削り, 舌ナデ	竈西側床面	P10206, 5%

第1302号住居跡(第92図)

位置 調査区西部のQ1049区に位置し、東側の埋没谷に向かって傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 北東コーナー部を第1103号土坑、竈の東側と中央部を第90号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 床面がほぼ露出した状態で検出されたため、壁の立ち上がりは確認されなかった。長軸4.36m、短軸4.26mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。

床 ほぼ平坦で、主柱穴の内側がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

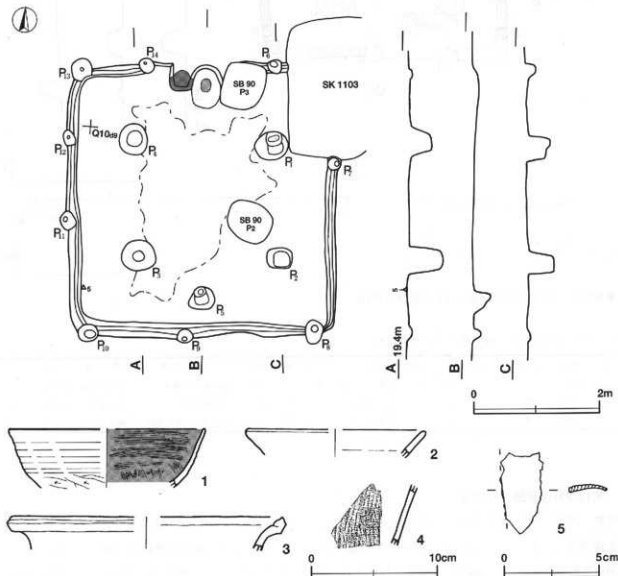
竈 北壁の中央部に付設されており、東袖部は第90号獨立柱建物跡に掘り込まれたために遺存していない。規模は焚口部から煙道部まで65cmで、壁外への掘り込みは認められず、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており、わずかに赤変している。

ピット 14か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは34～57cmである。P5は深さ26cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P14は深さが24～46cmで、壁溝内から1～1.5m間隔で検出されており、壁柱穴と考えられる。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片8点(碗6, 甕2), 須恵器片4(坏1, 甕3), 不明鉄製品(石突カ)1点が床面から散在した状態で出土している。第92図2は南東部の床面から出土しており、焼成が悪くにぶい黄橙色を呈している。

所見 本跡は壁柱穴が規則的に配され、上屋構造を考える上で注目される。時期は出土土器から9世紀後半と考えられる。



第92図 第1302号住居跡・出土遺物実測図

第1302号住居跡出土遺物観察表(第92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	椀	[15.4]	(4.7)	-	長石	にぶい赤褐	普通	胴下縁付のうしろ, 内面へうしろ	北東部床面	P10207, 5%
2	須恵器	坏	[14.0]	(2.2)	-	雲母・石英	にぶい黄澄	不良	体部ロクロナゲ	南東部床面	P10208, 5%
3	須恵器	甕	[21.4]	(2.6)	-	雲母・長石	褐灰	不良	口縁部ロクロナゲ	南東部床面	P10209, 5%
4	須恵器	甕	-	(4.9)	-	雲母・石英	灰白	普通	外面平行印き, 内面ナゲ	北西部床面	TP10005

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	不明	(4.4)	(2.1)	0.2	(10.2)	鉄	体部増曲, 厚みは先端部まで均一, 石突カ。	南西部床面	M10049

第1304号住居跡(第93・94図)

位置 調査区西部のQ10b7区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 東側部分で第1303号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.62m, 短軸4.15mの東西に長い長方形で, 主軸方向はN-85°-Eである。壁高は20~25cmで, 各壁ともほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で, 中央部から南壁際にかけてよく踏み固められており, 壁溝が周回している。

竈 東壁の南寄りに構築されており, 規模は焚口部から煙道部まで105cm, 両袖部幅140cmである。壁外への掘り込みは60cmほどで, 袖部は床面と同じ高さの地山面上にローム土混じりの砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し, わずかに赤変している。煙道の立ち上がり部には土師器小形甕が支脚として据えられており, 煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------------|-------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 7 灰褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量, ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量, ロームブロック・炭化粒子少量 | 10 褐色 | ロームブロック・粘土粒子多量, 砂粒中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量 | | |
| 6 灰褐色 | 粘土粒子多量, 焼土ブロック・砂粒中量, ロームブロック・炭化粒子少量 | | |

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し, 深さは17~28cmである。P5は深さ31cmで, 南壁際の中央部に位置しており, 出入り口施設に伴うピットと考えられ, 周囲の床面がとくに硬化している。

覆土 9層からなり, ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

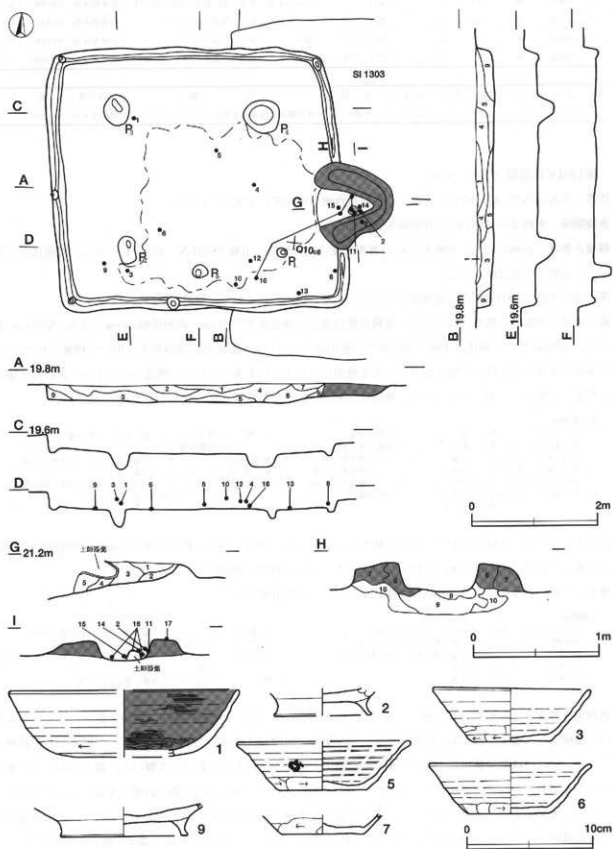
土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量 | 9 褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

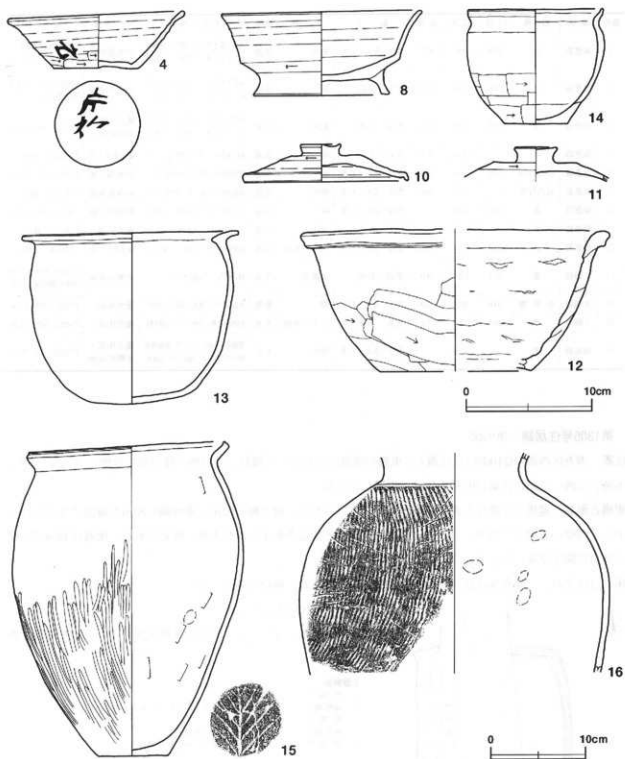
遺物出土状況 土師器片18点(椀7, 甕11), 須恵器片65点(坏37, 高台付坏3, 蓋19, 甕5, 鉢1)が竈周辺や南壁寄りの覆土下層を中心に出土している。第93・94図14は前述したように支脚として使用され, 被熱している。15は口縁部が焚口部を向いた横位の状態で火床部から出土しており, 支脚の上に据えられていた甕がそのまま遺棄され, 竈の崩壊とともに倒れたものと想定される。また, 13は竈の南側の床面から正位で出土しており, 本跡発掘時に遺棄されたものと考えられる。本跡からは墨書土器が2点出土しており, 4の体部外面には右横位で「万」, 5の底部には「片□」と墨書されており, いずれも中央部の覆土中層から出土している。

所見 本跡は竈と出入り口施設が同一の軸線上にない住居跡で, 北壁際や西壁際に竈や出入り口施設が構築さ

れた痕跡は見られず、本跡が構築された当初から現況のような住居形態を呈していたと考えられる。時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第93図 第1304号住居跡・出土遺物実測図



第94図 第1304号住居跡出土遺物実測図

第1304号住居跡出土遺物観察表 (第93・94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	椀	[18.0]	5.3	[8.2]	石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	底部下縁部へう彫り、内面へう磨き	北西部下層	P10217, 20%
2	土師器	高台付椀	-	[2.2]	[7.6]	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	底部縁部へう彫り差、高台部付	竈火床部	P10218, 10%
3	須恵器	杯	12.4	4.4	6.1	雲母・長石	にぶい黄褐	不良	胴部縁部へう彫り、器-部へう磨	南西部中層	P20219, 100%, PL49

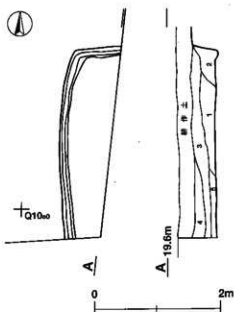
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	須恵器	坏	138	4.6	6.7	雲母・長石・石英	褐色	普通	体部下縁手持ちへう割り、底面回転へう割り、二方向のへう割り	中央部中層	P1026, 8%, 外周縁部付着、PL48-44
5	須恵器	坏	[136]	3.9	7.0	雲母・長石	灰	普通	体部下縁手持ちへう割り、底面回転へう割り、二方向のへう割り	中央部中層	P1023, 60%, 体部外周縁部付着、PL64
6	須恵器	坏	127	4.1	6.5	雲母・石英	褐色	普通	体部下縁手持ちへう割り、底面回転へう割り、二方向のへう割り	竈火床部・南側床面	P1022, 60%, PL50
7	須恵器	坏	-	(16)	6.4	長石・石英	灰	普通	転写押付のへう割り、底縁のへう割り	竈西縁部上層	P10223, 20%
8	須恵器	高台付坏	159	6.8	10.7	雲母・長石・石英	灰	普通	底縁回転へう割り後、高台取り付け	南東部上層	P10224, 95%, PL40
9	須恵器	高台付坏	-	(25)	10.0	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底縁回転へう割り後、高台取り付け	南西部床面	P10225, 30%
10	須恵器	壺	130	3.0	-	雲母・長石・石英	灰	普通	天井縁左回りの回転へう割り	南壁際上層	P10226, 100%, PL50
11	須恵器	壺	-	(27)	-	長石・石英	黄灰	普通	天井縁右回りの回転へう割り	竈火床部	P10227, 60%
12	須恵器	鉢	[236]	11.4	[119]	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部回転へう割り、内面ナデ・転写	東壁寄り中層	P10228, 30%
13	土師器	甕	17.1	13.7	8.0	雲母・石英	灰黄褐	普通	体部内・外面ナデ	南東部床面	P10229, 80%, 内外黄灰化動物骨、PL49
14	土師器	小形甕	10.6	9.1	5.0	雲母・長石・石英	橙	普通	体部内面ナデ、底面二方向のへう割り	竈火床部	P10230, 70%, PL50
15	土師器	甕	20.4	33.0	7.4	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部回転へう割り、内面ナデ・転写	竈火床部	P10231, 50%, PL50
16	須恵器	甕	-	(22.9)	-	雲母・長石・石英	褐色	不良	体部内・外面コシナデ、体部外周縁部の片割れ、内面ナデ・転写	竈火床部・南壁際床面	P10232, 30%, PL50

第1306号住居跡 (第95図)

位置 調査区西部のQ10d0区に位置し、東側の埋没谷に向かって傾斜した台地の縁辺部に立地している。また、本跡から西へ5mには第1301号住居跡が位置している。

規模と形状 遺構の大部分が調査区域外に延びているため、南北軸3.02m、東西軸0.82mが確認できただけである。西壁の方向から判断して、ほぼ北方向を主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は42cmで、壁は外方に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、硬化面は認められない。壁溝は確認された壁際を巡っている。



ピット 検出されなかった。

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 緑褐色 ローム粒子・焼七粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 3 黄褐色 ローム粒子少量
- 4 緑褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡の時期は土器が出土していないため断定できないが、西側に位置している第1301号住居跡と5mの間隔で東西に並んでいることなどから見て8世紀代の可能性がある。

第95図 第1306号住居跡実測図

第1307号住居跡 (第96~99図)

位置 調査区西部のP104区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長軸3.65m、短軸3.52mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は13~21cmで、各壁ともほぼ直立する。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の東寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅95cmで、壁外への掘り込みはほとんどない。袖部は床面と同じ高さの地山面にローム土混じりの砂質粘土で構築されており、内側が火熱を受けて赤変している。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

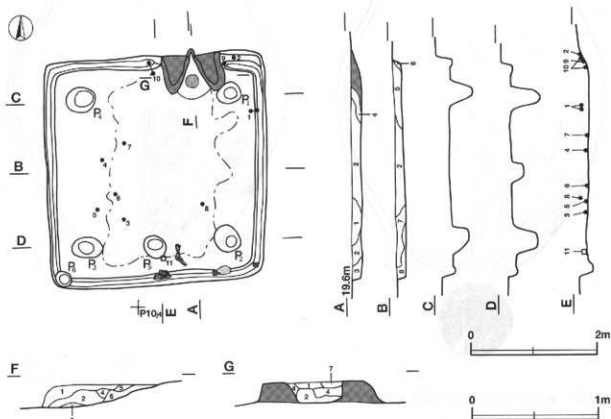
- | | | | |
|---------|--------------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土 | 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| | 粒子少量 | 5 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子中量 |
| 2 麻痺赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子少量 | 6 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子少量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量 |

ピット 6か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さが29~48cmである。P5は深さが22cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P6は南西コーナー部の壁際から検出されており、壁柱穴の可能性はある。

覆土 8層からなり、ロームブロックや焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

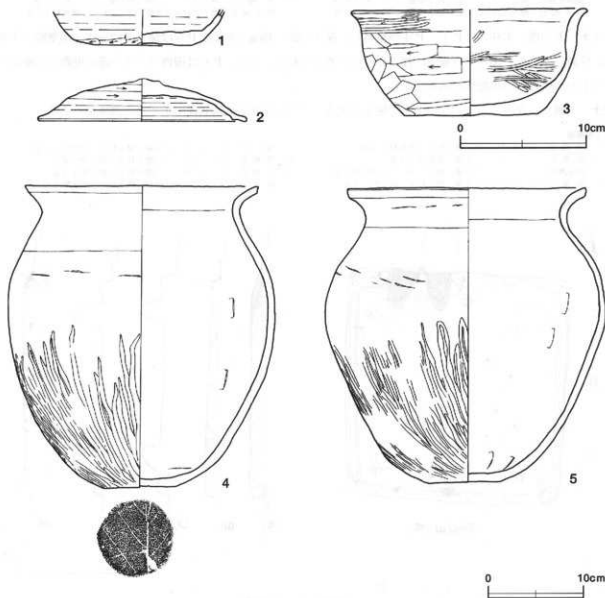
- | | | | |
|--------|------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量 |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化材少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量 |



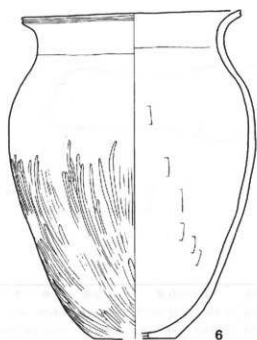
第96図 第1307号住居跡実測図

遺物出土状況 土器器片15点(杯2, 鉢1, 甕12), 須恵器片6点(杯1, 蓋4, 甕1), 雲母片岩1点が中央部と竈付近の床面を中心に出土している。土器器甕の出土が多く, 第97~99図3~8はいずれも中央部の床面から破砕された状態でまとも出土しており, 住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。また, 2と9はいずれも完形に近く, 竈の東側から並んで出土している。とくに9は底部が床面にめり込んだ状態で出土しており, 貯蔵用の甕が住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また, 垂木材の一部と見られる炭化材が焼土とともに南壁際の覆土下層から散在した状態で検出されている。11の雲母片岩は板状を呈し, P5と南壁の間に据え置かれたように検出されており, 出入口施設に伴う可能性がある。

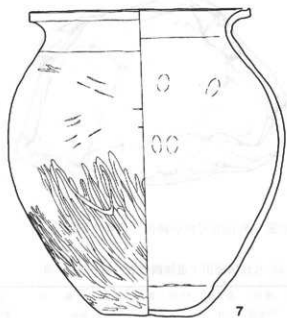
所見 本跡は炭化材や焼土の広がりから焼失住居と考えられ, 土器の出土状況を土層断面に対応させると, 壁際から出土した土器は焼失前に遺棄され, 中央部から出土した土器は焼失後に投棄されたものと考えられる。本跡の時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



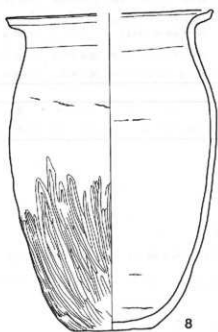
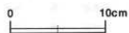
第97図 第1307号住居跡出土遺物実測図(1)



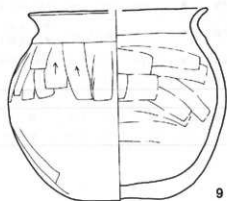
6



7



8



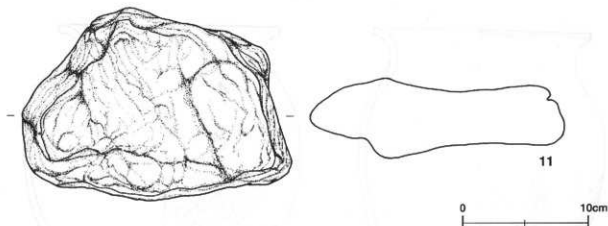
9



10



第98图 第1307号住居跡出土遺物実測图(2)



第99図 第1307号住居跡出土遺物実測図(3)

第1307号住居跡出土遺物観察表(第97~99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(2.8)	7.8	長石	黄灰	普通	裾端押しへり、裾へ折へり割	東壁際中層	P10240, 40%
2	須恵器	蓋	16.5	(3.4)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	天青部右側の羽板へり割り	竈東側床面	P10241, 90%, PL50
3	土師器	鉢	[18.4]	8.4	10.5	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部前・花部へり割り、内面へり割り	中央部床面	P10242, 40%
4	土師器	甕	24.2	31.6	7.4	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	胴部へり割り、内面へり割り、器縁4割	西壁寄り床面	P10243, 70%, PL51
5	土師器	甕	24.7	30.8	7.7	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	胴部へり割り、内面へり割り、器縁4割	南西部床面	P10244, 70%, PL51
6	土師器	甕	22.4	34.4	[8.5]	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	胴部・花部へり割り、内面へり割り	中央部床面	P10245, 70%, PL51
7	土師器	甕	22.8	32.1	9.6	雲母・長石・石英	橙	普通	胴部外縁へり割り、内面へり割り	中央部床面	P10246, 50%, PL51
8	土師器	甕	[21.4]	33.3	8.3	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部胴上縁へり割り、内面へり割り、内面へり割り、器縁みだり、器縁木割	中央部下層	P10247, 60%、外面炭化物付着、PL50
9	土師器	甕	[14.0]	15.2	6.5	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	胴部へり割り、内面へり割り、器縁4割	竈東側床面	P10248, 70%, PL51
10	須恵器	大甕	-	(9.4)	-	長石	灰	普通	外縁へり割り、内面へり割り、器縁4割	竈火床部	TP10006

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
11	不明	21.4	18.3	6.3	2620	雲母片岩	板状、表面摩滅、出入り口施設に関わる組み台り。	出入り口床面	Q10005, 100%

第1308号住居跡(第100・101図)

位置 調査区西部のP10h2区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 本跡の大部分が掘乱を受けているため、東西軸は3.17m、南北軸は1.78mだけが確認され、N-85°-Eを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は5cmほどで、壁の立ち上がりの様子は判然としない。

床 はほぼ平坦で、竈の手前に硬化面が認められ、壁溝が東壁際を巡っている。

竈 東壁を壁外に65cmほど掘り込んで構築されており、南側部分が掘乱を受けているため、南袖部や天井部、焚口部は遺存していない。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道の立ち上がり部には円筒形土器が支脚として据えられており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|--------|-------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ロームブロック・流土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子少量 | 3 暗赤褐色 | 純土ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 純土ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック多量、純土粒子・炭化粒子少量 |
| | | 5 暗赤褐色 | 純土ブロック多量、ロームブロック・炭化物少量 |

ピット 北壁の北側から深さ5cmの小ピット1か所が検出されている。性格は不明である。

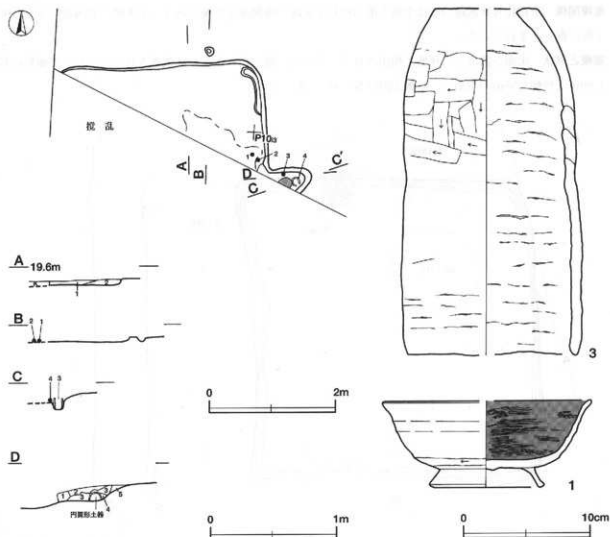
覆土 2層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

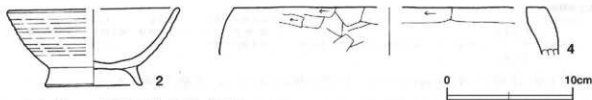
- | | |
|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片19点(椀16, 甕2, 円筒形土器1), 置き甕片1点, 鉄滓1点が甕付近から出土している。第100・101図1・2はいずれも甕手前の床面からつぶれた状態で出土している。3の円筒形土器は煙道の立ち上がり部に下位を10cmほど直立した状態で埋め込まれて出土している。また, 4の置き甕も火床部から出土している。

所見 本跡から出土した円筒形土器は, 支脚として使用されている。当遺跡においては, 第95号住居跡や第998号住居跡からも出土しているが, 出土状況は同一ではなく, 用途はそれぞれ産出し用, 袖部芯材用と想定されている。今回の出土例は使用状況が明らかであり, 円筒形土器の用途を考える上で注目される。本跡の時期は, 出土土器から10世紀前半と考えられる。



第100図 第1308号住居跡・出土遺物実測図



第101図 第1308号住居跡出土遺物実測図

第1308号住居跡出土遺物観察表 (第100・101図)

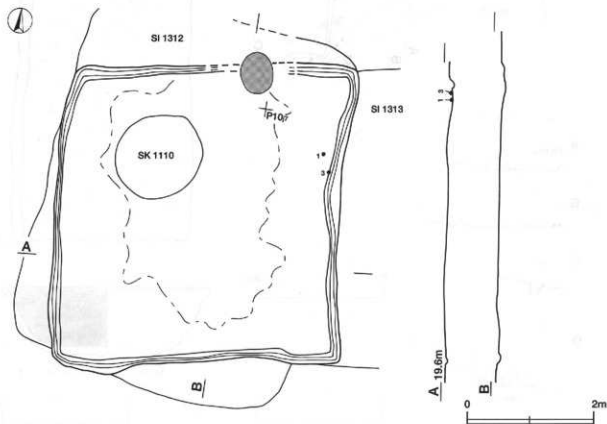
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付椀	[16.4]	6.9	8.3	雲母・灰石・石英	にぶい黄橙	普通	底面衝へう送り足、高台貼り付け	壺手前床面	P10249, 60%
2	土師器	高台付椀	[13.6]	6.1	[7.2]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	高台貼り付け、ロコナデ、内面刷毛	壺手前床面	P10250, 30%
3	土師器	円筒形土器	[8.0]	27.6	[13.3]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	軽燻り手、短ナデ、外・内面刷毛	壺火床部	P10253, 60%, PLS1
4	土師器	煎き壺	[25.0]	(3.7)	-	雲母・赤色粒子	灰濁	普通	体外外面へう割り、内面ナデ	壺火床部	P10251, 5%

第1310号住居跡 (第102・103図)

位置 調査区西部のP10j6区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 第1312号住居跡のはば全域と第1313号住居跡の西側部分を掘り込み、中央部の北西寄りを第1100号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出されているため、壁の立ち上がりは確認されなかった。平面形は長軸4.80m、短軸4.58mの方形で、主軸方向はN-9°-Wである。



第102図 第1310号住居跡実測図

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

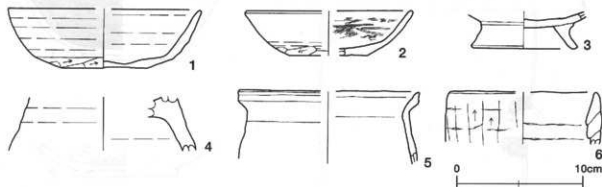
竈 遺存状態が悪く、北壁際から火床面と焚口部が確認できただけであり、付近の床面には粘土粒子や砂粒が散在している。火床面は床面と同じ高さの地山面を使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 検出されなかった。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片60点(碗49, 甕10, 円筒形土器1), 鉄滓1点が東壁寄りの床面や竈の周辺を中心に散在した状態で出土している。いずれも破片のため図示できたのは6点で、第103図2・4～6は竈の火床部からの出土である。また、1と3は東壁際の床面から出土しており、鉄滓は混入したものである。

所見 本跡の火床部からは円筒形土器の破片が出土しており、竈での使用を迫るものといえる。時期は、須恵器片が見られないことや出土土器の形状から10世紀前半と考えられる。



第103図 第1310号住居跡出土遺物実測図

第1310号住居跡出土遺物観察表(第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	碗	[15.3]	4.6	11.1	長石・石英	橙	普通	細線刷毛のヘラ削, 漆二部のヘラ削	東壁際床面	P10256, 30%
2	土師器	環	[13.4]	3.6	[6.2]	長石・石英	橙	普通	細線刷毛のヘラ削, 漆二部のヘラ削	竈火床部	P10257, 40%
3	土師器	高台付碗	-	(2.9)	7.8	長石・石英	橙	普通	漆二部のヘラ削, 漆二部のヘラ削	東壁際床面	P10258, 20%
4	土師器	高台付碗	-	(4.2)	-	長石・石英	橙	普通	高台部ロクロナデ	竈火床部	P10259, 10%
5	土師器	甕	[14.4]	(5.7)	-	雲母・長石・石英	にぶい陶	普通	口縁部・肩縁部, 漆二部のヘラ削	竈火床部	P10260, 5%
6	土師器	円筒形土器	[11.6]	(4.1)	-	長石・石英	橙	普通	細線刷毛のヘラ削, 漆二部のヘラ削	竈火床部	P10261, 10%

第1311号住居跡(第104図)

位置 調査区西部のP1111区に位置し、東側の埋没谷に向かって緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 西側部分で第1315号住居跡の覆土上層を掘り込み、東側部分を第1333号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され、壁の立ち上がりが確認されなかったため、硬化面の広がりから判断して、N-92°-Wを主軸とする1辺が3.50mほどの方形と推定される。

床 竈の手前から東西に長く硬化面が広がり、竈の北側にも一部硬化面が見られる。また、壁溝は認められない。

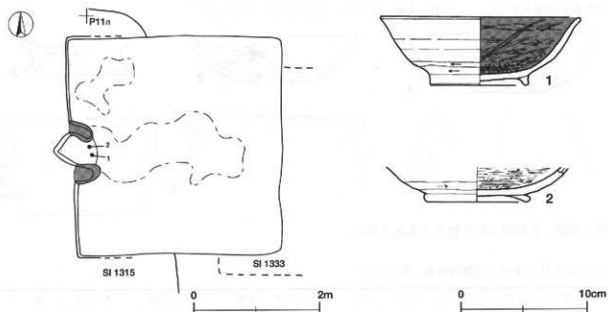
竈 遺存状態が悪く、袖部の基部だけが確認され、両袖部とも砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの平坦面を使用しており、赤変硬化した部分は認められない。

ピット 検出されなかった。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片10点（碗8、甕2）、灰釉陶器片1点（瓶）が西壁寄りの床面を中心に出土している。ほとんどが細片で図示できたのは2点だけであり、第104図1・2はいずれも竈の火床部から出土している。また、竈手前の床面からは灰釉陶器瓶の体部片が出土している。

所見 本跡は黒色土中に構築され、西壁に竈を有した住居跡である。時期は出土土器から10世紀後半と考えられる。



第104図 第1311号住居跡・出土遺物実測図

第1311号住居跡出土遺物観察表（第104図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付碗	14.8	5.0	7.3	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	膝蹴へ埋れ、粘り付け、削り埋	竈火床部	P10282, 60%, P150
2	土師器	高台付碗	—	(2.5)	7.7	雲母・赤色粒子	橙	普通	膝蹴へ埋れ、粘り付け、削り埋	竈火床部	P10263, 30%

第1312号住居跡（第105図）

位置 調査区西部のP10j6区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 東壁部分で第1313号住居跡を掘り込み、壁際を除くほぼ全域を第1310号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出されたため、壁の立ち上がりは確認されず、平面形状は長軸6.02m、短軸4.53mの南北に長い長方形で、主軸方向はN-12°-Eである。

床 北西コーナー付近に一部硬化面が認められる。また、壁溝が周回しており、東壁際の部分は第1310号住居跡の床下から検出されている。

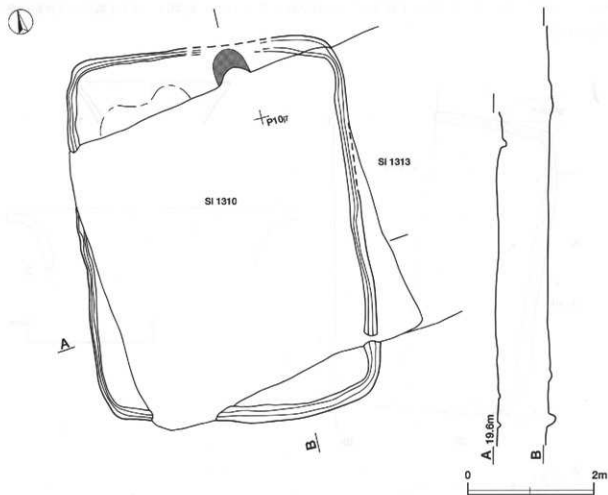
竈 遺存状態が悪く、北壁際の中央部から火床面が確認されただけである。付近の床面に粘土粒子や砂粒が散在しており、竈材の一部が流出したものと考えられる。火床面は北壁ラインの内側に位置し、火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 検出されなかった。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は遺物が出土していないため断定は困難であるが、第1310・1313号住居跡との重複関係から見て9世紀後半ないし10世紀前半と考えられる。



第105図 第1312号住居跡実測図

第1313号住居跡 (第106図)

位置 調査区西部のP107区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 西壁際を第1310・1312号住居跡、東側部分を第1314号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 第1314号住居跡に掘り込まれているために全容は不明であり、南北軸は4.56m、東西軸は2.39mだけが確認された。また、床面が露出した状態で検出されたため、壁の立ち上がりの様子は不明であり、平面形は西側部分の形状から見てN-3°-Wを主軸とする方形または長方形と推定される。

床 南北に長く硬化面の広がりが見られる。また、壁溝は確認された壁際に見られ、その大部分が第1310号住居跡の床下から検出されている。

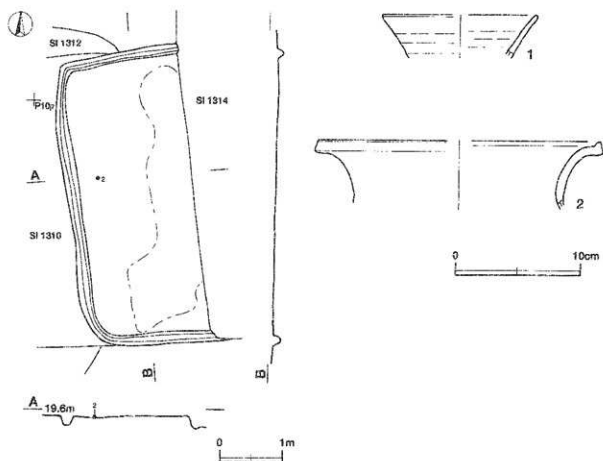
竈 第1314号住居跡に掘り込まれたために、遺存していない。

ピット 検出されなかった。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片4点(杯2, 甕2), 須恵器片4点(杯3, 甕1)が散在して出土している。第106図2は西壁寄りの床面から出土している。

所見 木跡は遺存している部分が少なく、本来の形状を把握することができなかったが、硬化面が南北に長く広がっていることから見て北方向を主軸方向とする住居跡と考えられる。時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第106図 第1313号住居跡・出土遺物実測図

第1313号住居跡出土遺物観察表(第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	杯	124	(34)	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	覆土中	P10264, 5%
2	須恵器	甕	228	(54)	-	雲母	灰	普通	口縁部内・外面ロクロナデ	西壁寄り9米南	P10265, 5%

第1314号住居跡 (第107・108図)

位置 調査区西部のP10J8区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 西側部分で第1313号住居跡を掘り込み、北壁際を第1244・1245・1246・1247号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.98m、短軸3.45mの南北に長い長方形で、主軸方向はN-80°-Eである。壁高は15~22cmで、各壁ともほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で、南西コーナー部から竈の前面にかけてよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 東壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで85cm、両袖部幅95cmで、壁外への掘り込みは40cmほどである。袖部は地山を掘り残して芯材とし、その周囲にローム土混じりの砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道の立ち上がり部には棒状の雲母片岩が直立した状態で下位を5cmほど埋め込まれて出土し、支脚として据えられていたものである。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 藍褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 5 にふい赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック中量、炭化物少量 | 6 暗褐色 竈上粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 にふい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量 | 7 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量 | 8 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |

ピット 4か所。主柱穴は検出されていない。出入り口施設に伴うピットは、P1あるいはP2が相当するものと思われるが、いずれとも断定し難い。P1は深さ36cmで、南西コーナー部に位置し、付近の床面が特に踏み固められており、その硬化した部分が竈の前面まで続いていること、P2は深さ24cmで、西壁際中央部の竈と対峙する位置にあることがその根拠であり、あるいは出入り口施設を作り替えた可能性も想定される。P3・4は深さがそれぞれ14cmと20cmで、いずれも硬化面下から検出され、ローム土を主体とする暗褐色土で埋め戻されており、P3からは須恵器片、P4からは炭化物と土師器片がそれぞれ出土している。

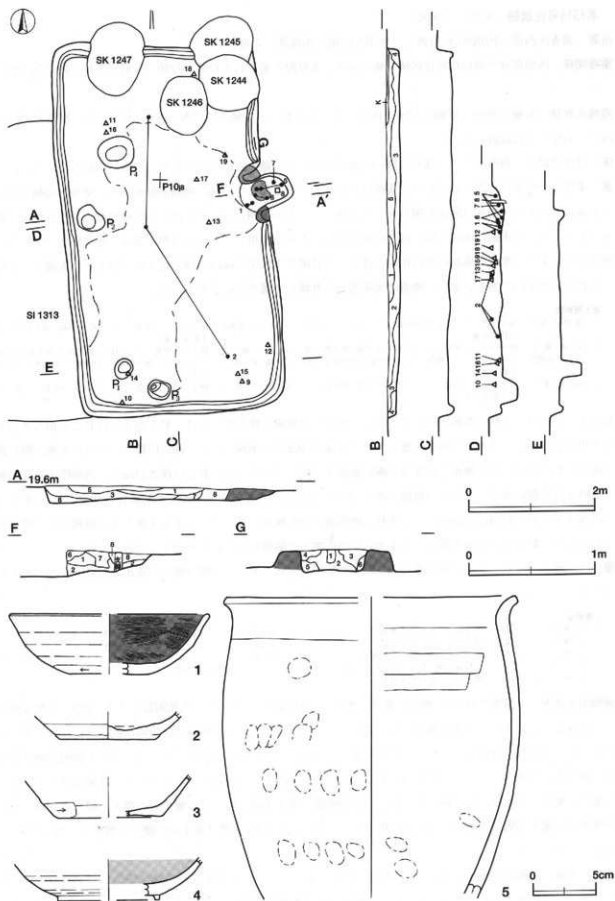
覆土 8層からなり、レンズ状堆積を示した自然堆積である。第7・8層は竈から流出した粘土粒子や焼土粒子を含んでいる。

土層解説

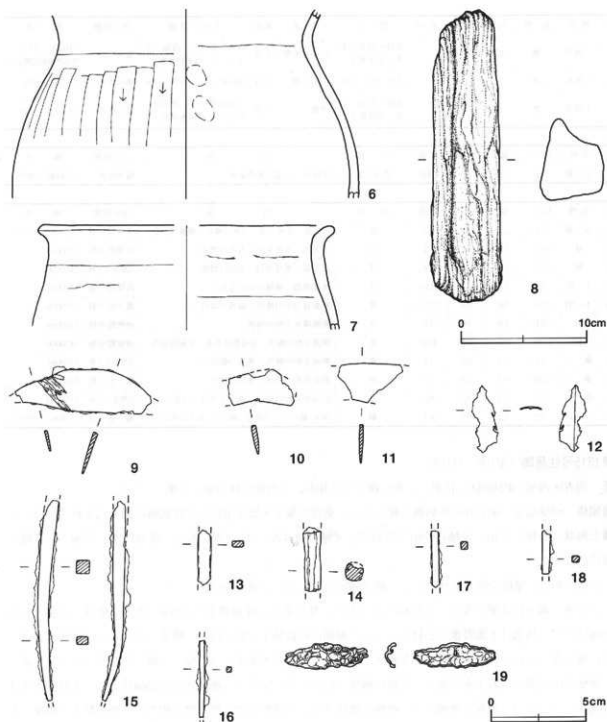
- | | |
|----------------------------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | |
| 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片111点(碗93, 甕16, 瓶2), 須恵器片1点(杯), 灰陶器片1点(碗), 石製支脚1点, 鉄鏝3点, 釘4点, 不明鉄製品3点, 目貫1点が出土している。遺物はほぼ全域に散在しており、竈の火床部からは第107・108図1・5~7, P3の覆土中からは3がそれぞれ出土している。4の灰陶器碗は南西部の覆土中から出土しており、黒登14号窯式と考えられ、底部には角高台を有している。鉄製品は大きく3つの地点に集中しており、9・10・12・14・15は南壁際の覆土中層, 13・17は竈手前の覆土上層, 11・16・18は北壁寄りの覆土下層や中層からそれぞれ出土している。また、19の目貫は竈手前の覆土上層からの出土であり、混入したものである。

所見 本跡は長軸が短軸の1.7倍もある特異な形状を呈しているが、拡張した真跡は認められず、当初から横長を想定して構築されたと考えられる。この横長の住居形態や鉄製品の出土量から何らかの工房跡と想定されるが、それを裏付ける施設や遺物は検出されていない。時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第107图 第1314号住居跡・出土遺物実測図



第108図 第1314号住居跡出土遺物実測図

第1314号住居跡出土遺物観察表(第107・108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	鉢	[15.6]	4.8	[6.0]	長石・石英	にぶい褐	普通	顔面・腹縁へ5割, 口縁へ3割	竈火床部	P10266, 30%
2	土師器	杯	-	(2.3)	8.4	長石・赤色砂子	にぶい黄橙	普通	体部コケロナテ, 底縁周縁へ9割	中央部中層	P10267, 30%
3	須恵器	杯	-	(3.3)	[8.6]	雲母・石英	黄灰	普通	顔面周縁へ9割, 口縁へ6割	P 3 覆土中	P10268, 20%
4	瓦類陶器	高台付椀	-	(3.3)	[8.0]	緻密	灰白, オリゾ灰	良好	高台貼り付け後コケロナテ, 輪刷毛塗り	南西部覆土中	P10269, 5%, 黒信14号窯式

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	土師器	甕	[23.0]	(24.0)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	体部外面ナデ、内面ヘラナデ、内・外面擦痕	竈火床部	P10270、30%、体部外面成化物付着
6	土師器	甕	-	(14.8)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部へらナデ、内面ナデ・擦痕	竈火床部	P10271、20%
7	土師器	甕	[23.0]	(8.3)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	黒褐色	普通	口縁部横ナデ、体部内・外面ナデ・輪積み痕	竈火床部	P10272、5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
8	支 脚	23.0	7.8	5.8	1300	雲母片岩	角柱状、上部に差熱痕有り。	竈火床部	Q10006、100%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
9	摘 鉢	(7.3)	2.4	0.2	(11.0)	鉄	刃先部・基部欠損、刃部に縄状の編織質付着。	南壁部中層	M10054、PL69
10	鉢	(3.6)	(1.9)	(0.2)	(5.1)	鉄	刃先部・基部欠損、刃部は彎曲。	南壁部中層	M10055
11	鉢	(3.5)	(2.0)	(0.2)	(4.4)	鉄	刃先部・基部欠損、刃部は彎曲。	北壁寄り下層	M10056
12	不明	(3.5)	(1.4)	0.1	(1.0)	鉄	体部湾曲、裏側中央に志有り。	南壁部中層	M10057
13	不明	(3.0)	0.6	0.3	(2.2)	鉄	断面長方形の棒状。線状の釘ナ。	竈手置上層	M10058
14	釘	(3.4)	1.9	1.0	(4.5)	鉄	断面隅丸方形の棒状。線状の釘ナ。	南壁部中層	M10059
15	釘	(10.6)	0.5	0.5	(16.0)	鉄	断面方形の棒状、先端部は尖る。先端部屈曲。	南壁部中層	M10060
16	鐵 ヌ	(4.1)	0.3	0.3	(1.7)	鉄	断面方形の棒状、基部の破片ナ。	北壁寄り下層	M10061
17	鐵 ヌ	(3.0)	0.4	0.4	(1.3)	鉄	断面方形の棒状、基部の破片ナ。	竈手置上層	M10062
18	鐵 ヌ	(2.3)	0.4	0.3	(0.9)	鉄	断面長方形の棒状、線の基部の釘ナ。	北壁寄り下層	M10063
19	目 貫	4.9	1.3	0.3	6.1	銅	獣文(獅子)・草花文、裏中央に爪1カ所有り。	竈手置上層	M10064、100%

第1315号住居跡 (第109~111区)

位置 調査区西部のP1010区に位置し、東に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 南壁部分で第1316号住居跡を掘り込み、東部の覆土上層を第1311号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.10m、短軸4.69mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は28~56cmで、各壁ともほぼ直立する。

床 はほぼ平坦で、壁際を除き全体的によく踏み固められており、壁溝が周回している。

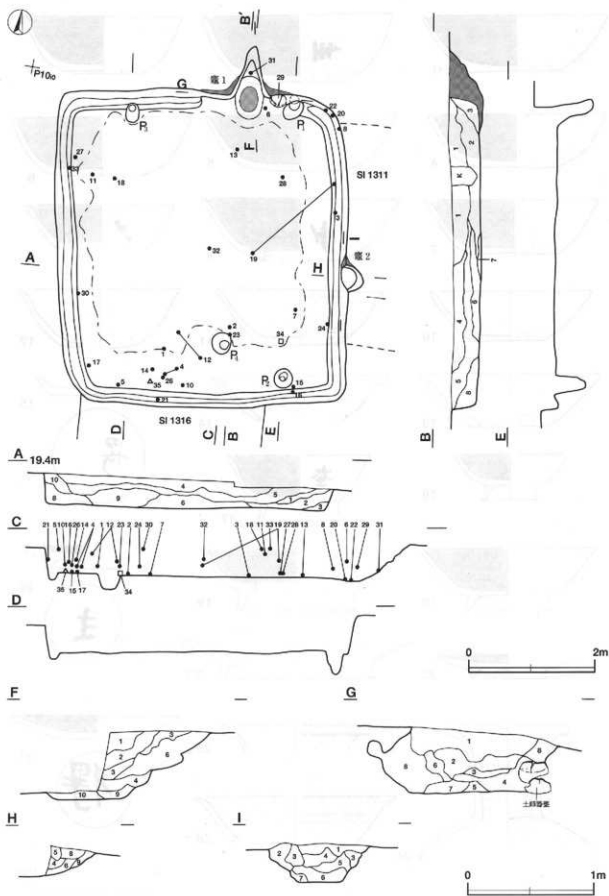
竈 2カ所。竈1は北壁の東寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで120cmである。壁外への掘り込みは70cmほどで、袖部は土師器甕を芯材にしてその周囲に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床面は浅い皿状に掘り窪められ、火熱を受けて亦変硬化しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。竈2は、東壁の中央部から若干南に寄った位置に構築されている。壁外への掘り込みは25cmほどで、天井部や火床部は遺存していない。袖部は壁面にその痕跡が確認され、土層断面図の第2層が相当し、砂質粘土で構築されている。また、煙道は外傾して緩やかに立ち上がっている。さらに、竈2は破棄された後、壁の一部として埋め戻されたことが想定され、火床部と推定される場所には壁溝が巡っている。

竈1土層解説

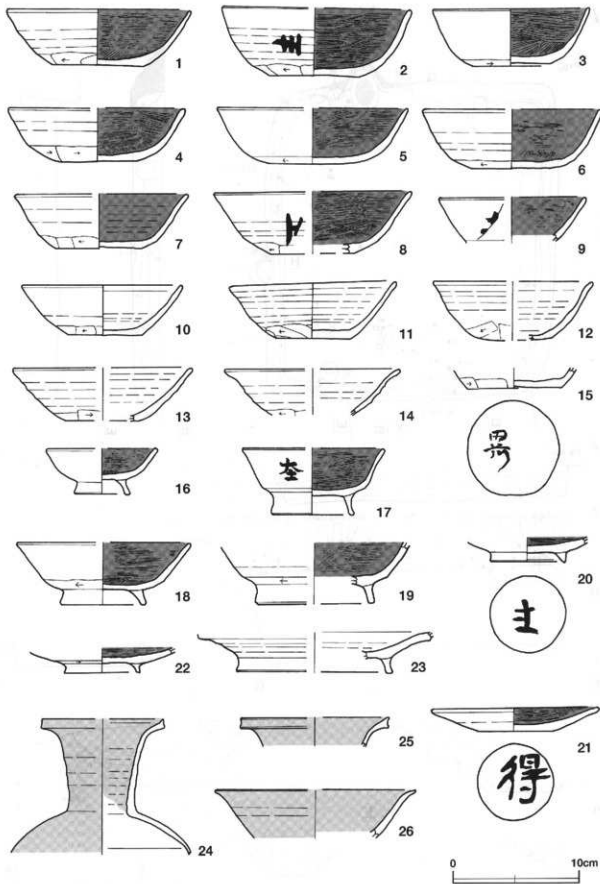
1	黒褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒少量	6	暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化物・粘土粒子・砂粒少量
2	暗赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量	7	暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
3	暗赤褐色	焼土ブロック多量、粘土粒子・砂粒中量、炭化物少量	8	灰褐色	粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック中量、焼土粒子少量
4	灰赤色	焼土ブロック多量、灰中量、炭化物少量	9	灰褐色	灰多量、焼土ブロック少量
5	暗赤褐色	焼土ブロック多量、灰中量、炭化粒子少量	10	暗赤褐色	焼土ブロック多量、灰中量

竈2土層解説

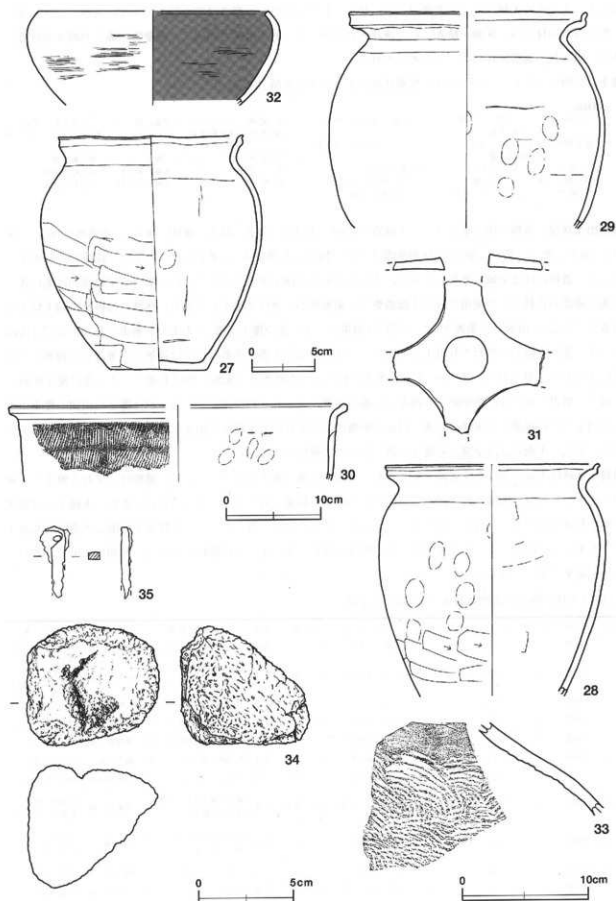
1	暗赤褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子少量	6	暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化物中量、ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量
2	灰褐色	粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化物少量	7	暗赤褐色	ロームブロック多量
3	暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量	8	暗赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量
4	赤褐色	焼土ブロック多量	9	暗赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量
5	暗赤褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子中量、灰少量	10	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土粒子少量



第109图 第1315号住居跡実測图



第110图 第1315号住居跡出土遺物実測図(1)



第111图 第1315号住居跡出土遺物実測図(2)

ピット 4か所。主柱穴は3か所確認され、P1~P3が相当し、深さは38~53cmである。南西コーナー寄りに想定される柱穴は、床面を精査したが確認されなかった。P4は深さ24cmで、南壁際の竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物・粘土粒子・砂粒少量	6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
2 暗赤褐色	焼上ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒少量	7 黒褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量	8 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
4 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量	9 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量
5 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	10 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 遺物の出土量は多く、土師器片276点(碗203, 皿2, 鉢1, 甕69, 甕1), 須恵器片162点(杯119, 皿1, 蓋3, 甕35, 甕4), 灰釉陶器片5点(碗1, 長頸瓶4), 浮子1点, 釘1点, 鉄滓12点が出土している。遺物はほぼ全域に散在しており, そのうち35点を図示することができた。第110・111図29は先に述べた竈の袖部の芯材として使用された土師器甕で, 東袖部から逆位で出土しており, 体部には砂粒や粘土粒子が付着している。「田前」と墨書されている15は南東コーナー部の覆土下層, 「大土」と墨書されている17は南西コーナー部の床面からそれぞれ出土しており, いずれの文字も墨書土器にしては違筆で, 筆遣いに習熟した人物によるものと見られる。また, 「主」と墨書された2は南壁寄りの床面, 20は北東コーナー部の覆土中層, 「得」と墨書された21は南壁際やや西寄りの覆土中層からそれぞれ出土している。24は竈2の南側の覆土下層から出土した口縁部片と本跡から南へ11mの距離にある第1103号土坑から出土した体部片が接合されたものである。また, 床面のほぼ全域から焼土が薄く広がって検出されている。

所見 本跡は火災を受けた住居跡と考えられ, 床面には薄く焼土が広がっている。遺物はいずれも焼土の上面から出土しており, 本跡の焼失後, 埋め戻される段階で投棄されたものと考えられる。また, 本跡からは墨書土器が判読不明のものを含めて7点出土しており, それらには「得」といった吉祥文字の他に当遺跡に共通する「大土」や「田前」という文字も見られ, 集落の様相を窺う上での好資料といえる。時期は, 出土土器から9世紀後葉と考えられる。

第1315号住居跡出土遺物観察表(第110・111図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	14.6	4.5	7.3	石英・赤色粒子	橙	普通	胴部握持し方器, 器口削り器	南壁寄り下層	P10273, 80%, PL52
2	土師器	杯	[14.9]	5.4	7.2	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちへ方削り, 底部二方向のへ方削り	南壁寄り床面	P10274, 60%, 墨書「主」, PL64
3	土師器	杯	12.5	4.5	6.6	雲母	にぶい橙	普通	胴部握持し方器, 器口削り器	東壁際床面	P10275, 70%, PL52
4	土師器	杯	[14.0]	4.3	6.6	雲母・赤色粒子	褐色	普通	胴部握持し方器, 器口削り器	南壁際下層	P10276, 60%, PL52
5	土師器	杯	[15.0]	4.5	9.7	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部握持し方器, 器口削り器	南西部上層	P10277, 40%
6	土師器	杯	[14.2]	4.7	6.3	石英・赤色粒子	橙	普通	胴部握持し方器, 器口削り器	竈火床部	P10278, 40%
7	土師器	杯	[13.8]	4.3	7.0	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部握持し方器, 器口削り器	南東部床面	P10279, 60%
8	土師器	杯	[15.6]	4.9	[6.6]	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちへ方削り, 内面へ方削き	北東部下層	P10280, 30%, 墨書「主」, PL64
9	土師器	杯	[11.8]	(3.6)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面クロコナテ, 内面へ方削き	南西壁際土中	P10281, 5%, 墨書「主」, PL64
10	須恵器	杯	12.8	4.1	6.0	長石・石英	灰	普通	胴部握持し方器, 器口削り器	南壁際下層	P10282, 100%, PL52
11	須恵器	杯	13.4	4.6	6.0	雲母・長石・石英	褐色	普通	胴部握持し方器, 器口削り器	北西部上層	P10283, 80%, PL52
12	須恵器	杯	[12.6]	4.7	[6.6]	雲母・長石・石英	にぶい橙	不良	体部下端手持ちへ方削り, 底部一方向のへ方削り	南壁寄り中・上層	P10284, 40%

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
13	須恵器	坏	[14.0]	4.2	[6.0]	雲母・長石・石英	灰	普通	新羅コクロナデ、底部へう割り	甕手前下層	P10285, 30%
14	須恵器	坏	[13.8]	(3.7)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	新羅コクロナデ、下層付へう割り	南壁際中層	P10286, 15%
15	須恵器	坏	-	(1.7)	7.5	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部凹面へう割り後、多方向のへう割り	南壁際中層	P10287, 30%、器書「田成」、PL64
16	土師器	高台付椀	[8.7]	3.7	4.4	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	高台起り付後、ロクロナデ	南壁際中層	P10288, 40%
17	土師器	高台付椀	[11.2]	5.3	6.4	雲母	にぶい橙	普通	高台起り付後、ロクロナデ	南西部床面	P10289, 70%、器書「土上」、PL52-64
18	土師器	高台付椀	[13.6]	5.0	6.6	雲母・赤色粒子	明褐色	普通	底部凹面へう割り後、高台起り付	北西部上層	P10290, 50%
19	土師器	高台付椀	-	(4.8)	[9.5]	雲母・赤色粒子	灰黄褐色	普通	底部凹面へう割り後、高台起り付	北東部中層	P10291, 30%
20	土師器	高台付椀	-	(2.0)	6.0	雲母	にぶい橙	普通	底部凹面へう割り後、高台起り付	北東部床面	P10292, 30%、器書「土上」、PL64
21	土師器	皿	13.3	2.0	6.2	長石・赤色粒子	橙	普通	体部内面へう割り、底部多方向のへう割り	南壁際中層	P10293, 100%、底部器書「得」、PL52
22	土師器	高台付皿	-	(2.0)	6.0	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部凹面へう割り後、高台起り付	北東部床面	P10294, 30%
23	須恵器	高台付皿	-	3.2	[12.6]	長石・石英	灰	普通	高台起り付後、ロクロナデ	南壁際下層	P10295, 30%
24	灰陶器	長頸瓶	[9.6]	(10.7)	-	緻密	灰、オリープ灰	良好	口縁部ロクロナデ、胎は流し掛け	甕2下層下層	P10296, 5%、PL52
25	灰陶器	長頸瓶	[11.6]	(2.3)	-	緻密	灰白、オリープ灰	良好	口縁部ロクロナデ、胎は流し掛け	北東部壁土中	P10297, 5%、器書90号席式
26	灰陶器	椀	[15.6]	(3.8)	-	緻密	灰白、オリープ灰	良好	体部ロクロナデ	南壁際下層	P10298, 5%
27	土師器	壺	14.6	18.6	7.6	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外周へう割り、内面へう割り、底部木漆	北西部下層	P10299, 90%、外面器書「得」、PL52
28	土師器	甕	[17.0]	(18.3)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	胎部凹面へう割り、内面へう割り	北東部下層	P10300, 30%
29	土師器	甕	[19.0]	(17.1)	-	雲母・長石・石英	明赤褐色	普通	胎部凹面へう割り、内面へう割り	甕東部	P10301, 20%
30	須恵器	鉢	[35.2]	(8.1)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄褐色	普通	胎部凹面へう割り、内面へう割り	西壁際上層	P10302, 5%
31	須恵器	瓶	-	(1.2)	(11.9)	雲母・長石・石英	暗褐色	不良	孔へう割り	甕火床部	P10303, 5%
32	土師器	鉢鉢形土器	[18.4]	(7.5)	-	雲母・長石	明赤褐色	普通	体部内・外面へう割り後有り	中央部中層	P10304, 20%
33	須恵器	大甕	-	(9.0)	-	長石	黄灰	良好	胎部凹面へう割り、胎部内面へう割り	北西部上層	TP1007, 外面自然釉

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
34	浮子	7.0	6.3	6.5	90.4	軽石	表面磨減、割痕2か所有り。	南東部床面	Q1007, 100%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
35	釘カ	(3.8)	0.6	0.4	(4.7)	鉄	頭部は薄く引き伸ばされて、屈曲する。	南壁際床面	M10065

第1316号住居跡 (第112・113図)

位置 調査区西部のP10j0区に位置し、東側の埋没谷に向かって緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 北壁部分を第1315号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.00m、短軸2.95mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は36~65cmで、各壁ともほぼ直立する。

床 はほぼ平坦で、ピットの周囲を除いてよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、上部を第1315号住居跡に掘り込まれているために、天井部と袖部は遺存

していない。規模は狭口部から煙道部まで95cm、燃焼部幅60cmで、壁外への掘り込みは20cmほどである。袖部は付近の床面に砂粒や粘土粒子が散在していることから見て砂質粘土で構築されていたと考えられる。火床面は浅い皿状に掘り窪められ、火熱を受けて赤変硬化している。

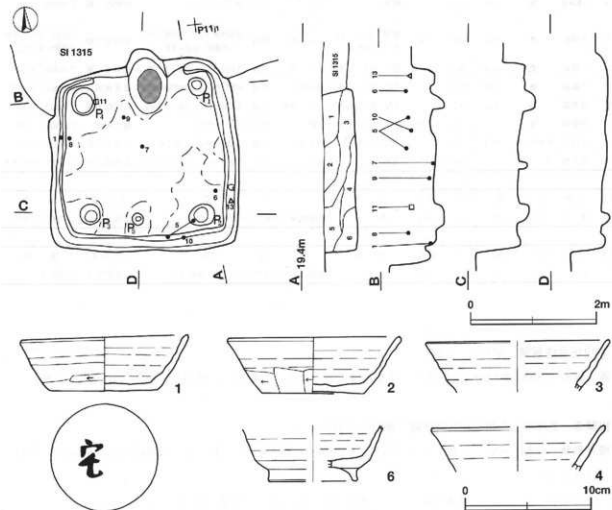
ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは15～22cmである。P5は出入り口施設に伴うピットで、深さが14cmである。

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

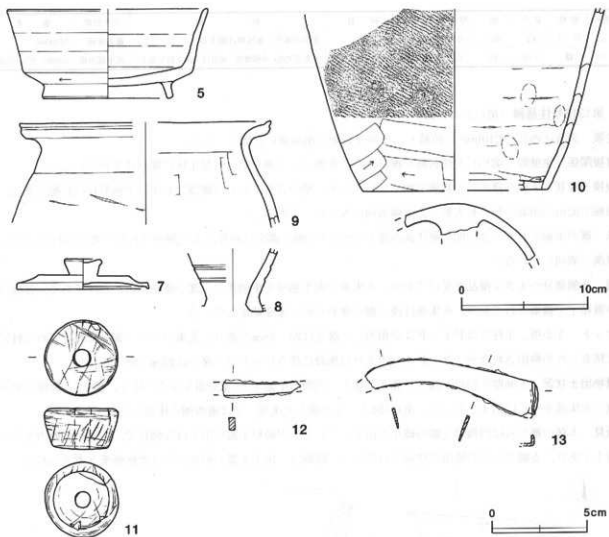
土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|--------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・黄土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・黄土粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・黄土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・黄土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土器器片26点(甕26)、須恵器片88点(杯75, 蓋2, 甕7, 瓶3, 長頸壺1)、灰釉陶器片3点(瓶3)、刀子1点、鉄鎌1点、石製紡錘車1点が、ほぼ全域から散在して出土している。第112・113図1はP4の覆土中とその南側の床面から出土した破片が接合されたもので、底部には「宅」と墨書されている。11の紡錘車は竈の西側の床面、12の刀子は竈の覆土中、13の鉄鎌は南東コーナー一部の床面から出土している。所見 本跡の時期は出土土器から8世紀後葉と考えられ、本跡はこの時期において最も小形の住居跡である。また、「宅」と墨書された須恵器杯の出土は有力者層の存在を窺わせるものであり、灰釉陶器片や刀子などの出土と併せ、かかる有力者の経営拠点に付属する施設の一部として機能していたことが想定される。



第112図 第1316号住居跡・出土遺物実測図



第113図 第1316号住居跡出土遺物実測図

第1316号住居跡出土遺物観察表(第112・113図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	13.3	4.4	8.5	雲母・長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持りへら削り、 底部回転へら削り	P4覆土中・ 北西部床面	P10305, 70%, 底部 面著「毛」, P152-65
2	須恵器	坏	13.7	4.6	8.2	雲母・長石・石英	灰白	普通	胴部削りへら削り、 底面削り	南東部覆土中	P10306, 60%, P152
3	須恵器	坏	[14.4]	(4.0)	-	雲母・長石	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	P4覆土中	P10307, 5%
4	須恵器	坏	[14.0]	(3.5)	-	雲母・長石	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	竈火床部	P10308, 5%
5	須恵器	高台付坏	[15.8]	7.1	9.4	長石・石英	灰	普通	底面削りへら削り、 裏面削り	南西部中層	P10309, 60%
6	須恵器	高台付坏	-	(4.4)	[6.8]	雲母・長石・石英	灰	普通	底面削りへら削り、 裏面削り	南西部中層	P10310, 20%
7	須恵器	壺	10.6	2.3	-	長石・石英	黄灰	普通	天井部左回りの 回転へら削り	中央部床面	P10311, 95%, P153
8	須恵器	平瓶	-	(5.1)	-	緻密	灰	良好	胴部ロクロナデ、 沈堀2条	西壁部中層	P10312, 5%, 内・外面自然軸
9	土師器	甕	[20.0]	(8.0)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部ナデ、 体部内・外面へら削り	中央部下層	P10313, 10%
10	須恵器	瓶	-	(14.3)	[15.0]	雲母・長石・石英	暗灰黄	普通	胴部削り、 下へら削り、 底削り	南壁部中層	P10314, 20%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
11	紡錘車	4.0	2.2	0.9	58.2	粘結岩	側面に縦位の削痕有り、 筒状の文様。	西壁部床面	Q1000, 100%, P167

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	刀子	(42)	(0.7)	0.3	(3.8)	鉄	基部の破片，茎尻側は離れる。	竈火床部	M10068
13	鎌	(139)	31	0.2	(37.0)	鉄	刃先端欠損，刃部彎曲，基部は全体を折り返す。	南東部床面	M10069, 90%, P168

第1318号住居跡 (第114・115図)

位置 調査区西部のP10h6区に位置し，平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 東壁際で第1317号住居跡を掘り込み，北西コーナ部を第1101号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出されたため，壁の立ち上がりは確認されず，平面形状は長軸5.48m，短軸3.92mの南北に長い長方形で，主軸方向は $N-0^\circ$ である。

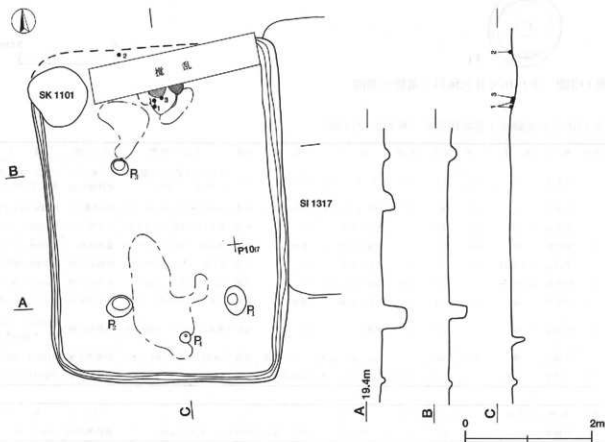
床 竈の手前とP1・2の間に硬化面が認められ，その他の部分は耕作により削平されたと考えられる。また，壁溝が周回している。

竈 北側部分が大きく攪乱を受けており，火床部の南半部分と東袖部の一部が確認されただけである。袖部は砂質粘土で構築されており，火床部は浅く掘り深められ，赤変硬化している。

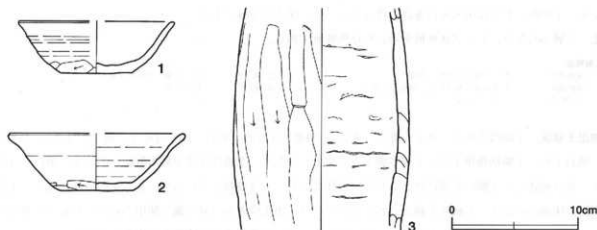
ビット 4か所。主柱穴はP1～P3が相当し，深さは20～38cmであり，北東コーナー寄りに想定される柱穴は精査したが検出されなかった。P4は出入り口施設に伴うビットで，深さは22cmである。

遺物出土状況 土器器片13点（碗9，甕2，鉢1，円筒形土器1），須恵器片3点（杯1，甕2），鉄滓3点が竈の火床部を中心に出土している。第115図1・3は竈の火床部，2は竈西側の床面から出土している。

所見 本跡の竈からは円筒形土器の破片が出土している。円筒形土器の出土は5例目で，いずれも竈内からの出土であり，支脚としての使用が想定されている。時期は，出土土器の形状から9世紀後葉と考えられる。



第114図 第1318号住居跡実測図



第115図 第1318号住居跡出土遺物実測図

第1318号住居跡出土遺物観察表(第115図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	[12.3]	4.2	5.7	石英・赤色粒子	橙	普通	北壁跡へ向けて、一方のへり	竈火床部	P10319, 40%
2	須恵器	杯	[13.8]	4.5	5.5	雲母・長石・石英	橙	不良	裾縁部へ向けて、縁に溝が深い	竈西側床面	P10320, 30%
3	土師器	円筒形土器	-	(17.6)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	北壁跡へ向けて、西側へ傾斜	竈火床部	P10321, 20%

第1319号住居跡(第116・117図)

位置 調査区西部のP11f2区に位置し、東側の埋没谷に向かって緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 北壁跡で第1320号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.67m、短軸3.43mの方形で、主軸方向はN-17°-Eである。壁高は西壁で36cm、東壁で6cmを測り、各壁とも外方向に閉き気味に立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、壁際を除きよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に砂質粘土で構築されており、焚口部から煙道部まで100cm、両袖幅120cmで、壁外への掘り込みは20cmである。火床部と西袖部は15cmほど掘り窪めた部分にローム土を主体とする暗褐色土を床面と同じ高さまで埋め戻して構築されており、東袖は床面と同じ高さの地山面上に構築されている。火床面は被熱した部分が厚さ5cmにわたって固く焼き締まっており、使用頻度の高さが窺われる。煙道の立ち上がり部には土製支脚が据えられており、その上面から須恵器杯2点が臥せられた状態で、さらにその上面から須恵器片4点が重ねられて出土している。これら6点のうち上部の5点は火熱を受けた痕跡がなく、住居廃絶に際して意図的に遺棄されたものと考えられる。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量	8 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・炭化粒子少量
2 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量	9 にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
3 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量	10 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量
4 灰褐色	灰多量、焼土ブロック・炭化粒子少量	11 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
5 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量、灰少量	12 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
6 にぶい赤褐色	焼土ブロック多量、灰少量	13 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
7 暗赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子少量		

ピット 1か所。P1は出入り口施設に伴うピットで、深さは30cmである。

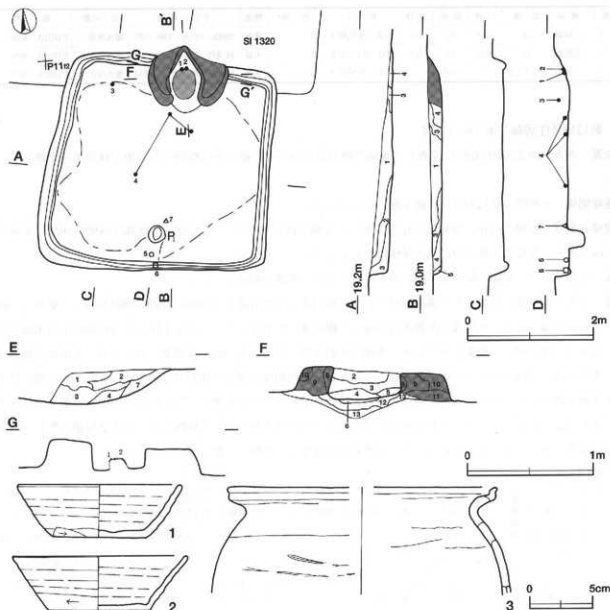
覆土 5層からなり、レンズ状堆積を示した自然堆積である。

土層解説

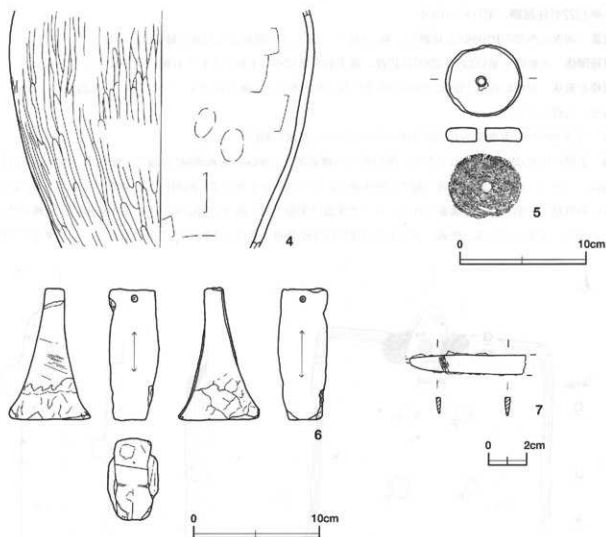
- | | | | |
|--------|---------------------|-------|----------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片16点(坏7, 甕6, 壺3), 須恵器片17点(坏11, 高台付坏2, 蓋2, 甕2), 刀子1点, 砥石1点, 土製紡錘車1点, 土製支脚1点が出土しており, 遺物はほぼ全域に散在している。第116・117図1・2は前述した支脚の上部に伏せられていた坏であり, 1は被熱しているが, 2にその痕跡はない。4は甕周辺の床面から出土した破片が接合されたものであり, 出土位置から見て甕で使用されていたものと考えられる。また, 5の土製紡錘車, 6の砥石, 7の刀子はいずれも南壁寄りの床面から出土している。

所見 本跡からは砥石と刀子がそろって同じ位置から出土しており, 住居廃絶時に投棄されたものと考えられ, 興味深い。時期は出土土器から8世紀後半と考えられる。



第116図 第1319号住居跡・出土遺物実測図



第117図 第1319号住居跡出土遺物実測図

第1319号住居跡出土遺物観察表(第116・117図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	12.9	4.3	7.4	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちへつ削り、底部一方向のへつ削り	竈火床部	P10322, 70%, 内外面炭化物付着, P1.53
2	須恵器	坏	13.9	4.4	8.1	長石・石英	黄灰	普通	裾・袖口へつ削り、裾・柄のへつ削り	竈火床部	P10323, 60%, P1.53
3	土師器	甕	[21.5]	(8.5)	-	雲母・石英	にぶい赤褐色	普通	表部向一方へつ削り、内面に黒鉛付着	北西部中層	P10324, 5%
4	土師器	甕	-	(18.7)	-	雲母・長石・石英	灰褐色	普通	体部両へつ削り、内面へつ削り	中央部床面	P10325, 30%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	紡錘車	6.1	1.1	0.7	49.0	須恵器	須恵器殻を転用、回転へつ削り後ナゲ調整痕有り。	南壁寄り床面	DP10043, 100%, P1.67

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	砥石	10.3	6.4	4.0	0.4	222	黄灰岩	砥面2面、新張成、裏へつ削り、孔は両側穿孔。	南壁寄り床面	Q10009, 100%, P1.67

番号	器種	長さ	幅	重ね	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	刀子	(6.2)	(1.1)	0.3	(7.0)	鉄	茎部欠損、切先部に織織質付着。	南壁寄り床面	M10072, P1.68

第1322号住居跡 (第118・119図)

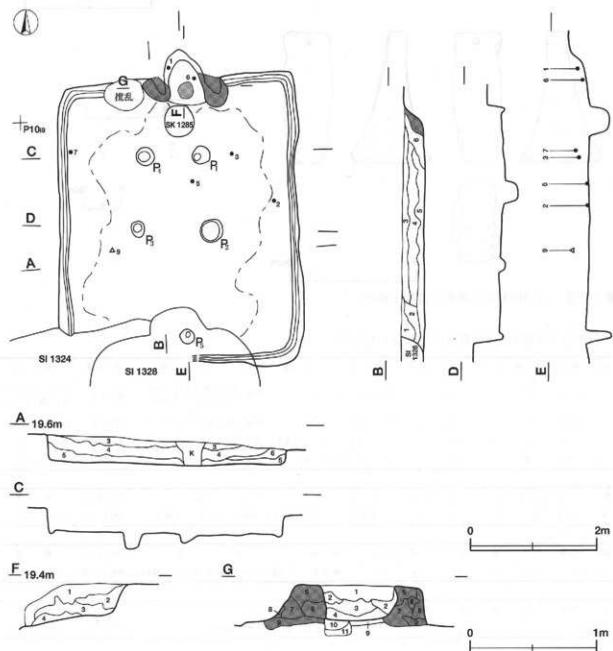
位置 調査区西部のP1019区に位置し、東に向かって緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 南壁際を第1324・1328号住居跡、竈手前を第1285号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.70m、短軸3.91mの南北に長い長方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は22~42cmで、各壁とも直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで90cm、両袖部幅130cmで、壁外への掘り込みは40cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面上にローム土を主体とする暗褐色土を基部にして、その上にさらに砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けてわずかに赤変している。煙道の立ち上がり部には土師器甕が逆位で支脚として据えられており、煙道は外傾



第118図 第1322号住居跡実測図

して緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|---------|----------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量、粘土粒子・砂粒少量 | 6 暗褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量、粘土粒子・砂粒少量 | 7 にぶい褐色 | 粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量 |
| 4 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量 | 9 暗褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量 |
| | | 11 黒褐色 | ロームブロック・炭化物中量 |

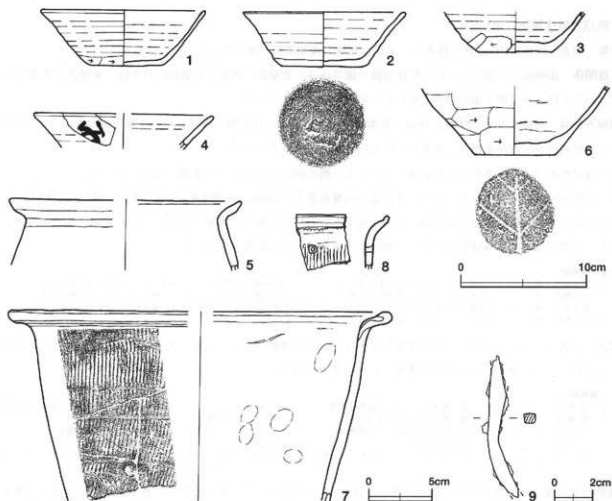
ピット 5か所。P1～P4はいずれも中央に寄った位置で検出され、深さは12～28cmである。P5は第1328号住居跡の竈の下から検出され、深さ41cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子・炭化粒子・砂粒少量 |

遺物出土状況 土師器片35点(碗20, 甕14, 瓶1), 須恵器片42点(坏30, 蓋2, 甕9, 瓶1), 灰陶陶器片1点(瓶), 釘1点が竈の火床部や壁際の覆土下層を中心に出土している。第119図6は支脚に転用された土師器甕で、体部に砂粒が付着し、被熱している。また、2は東壁際の床面、5は中央部の床面からそれぞれ出土し



第119図 第1328号住居跡出土遺物実測図

ている。9の釘は西壁寄りの覆土中層から出土しており、本跡廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 本跡の時期は、供膳具類における土師器の割合が増加していることや出土土師の形状から見て9世紀中葉と考えられる。

第1322号住居跡出土遺物観察表(第119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	13.2	4.4	6.0	雲母・長石・石英	灰黄	普通	底面へう張り、一方のへう張り	竈火床部	P1036, 100%, PL53
2	須恵器	坏	12.9	4.4	6.5	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	不良	底面へう張り、多方向へう張り	東壁際床面	P1037, 80%, PL53
3	須恵器	坏	-	(3.1)	6.0	長石・石英	黄灰	普通	底面へう張り、多方向へう張り	中央部中層	P10338, 40%
4	須恵器	坏	[14.0]	(2.8)	-	雲母・長石・石英	灰黄褐	普通	体部内・外面ロクロナデ	南東部覆土中	P10336, 5%, 体部外面黒書「西」
5	土師器	甕	[18.5]	(5.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部ナデ、体部内・外面ナデ	中央部床面	P10340, 5%
6	土師器	甕	-	(5.5)	6.5	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面へう張り、内面ナデ、底部木葉痕	竈火床部	P10341, 20%, 体部外面黒化付着
7	須恵器	瓶	[30.0]	(15.1)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐	不良	体部内へう張り、内面ナデ	西壁際中層	P10342, 20%
8	須恵器	瓶	-	(4.4)	-	雲母・長石・石英	暗灰	普通	底面平円形、内面ナデ、黒點痕	北西部覆土中	P10343, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
9	釘	(7.6)	0.8	0.5	(11.0)	鉄	頭部・脚部先端欠損、脚部彎曲	西壁寄り中層	M10073

第1323号住居跡(第120図)

位置 調査区西部のP10e0区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 南側部分で第1321・1325号住居跡を掘り込み、北壁部の西寄りを第1104号土坑、東壁部の北寄りを第1105号土坑、中央部を第1240号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.30m、短軸4.18mの南側部分が若干歪んだ長方形で確認され、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は6~14cmを測り、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅115cmである。壁外への掘り込みは35cmほどで、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床面は若干掘り窪められ、火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 | 黄土ブロック中量、ローム粒子・炭化物少量 | 5 暗赤褐色 | 黄土ブロック多量、ローム粒子・炭化物少量 |
| 2 暗赤褐色 | 黄土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 6 暗赤褐色 | ロームブロック・黄土ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 黄土ブロック多量、炭化粒子少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・黄土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 暗赤褐色 | 黄土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。各層に含まれる黄土や炭化物は粘土粒子や砂粒とともに検出されており、竈材の一部と考えられる。

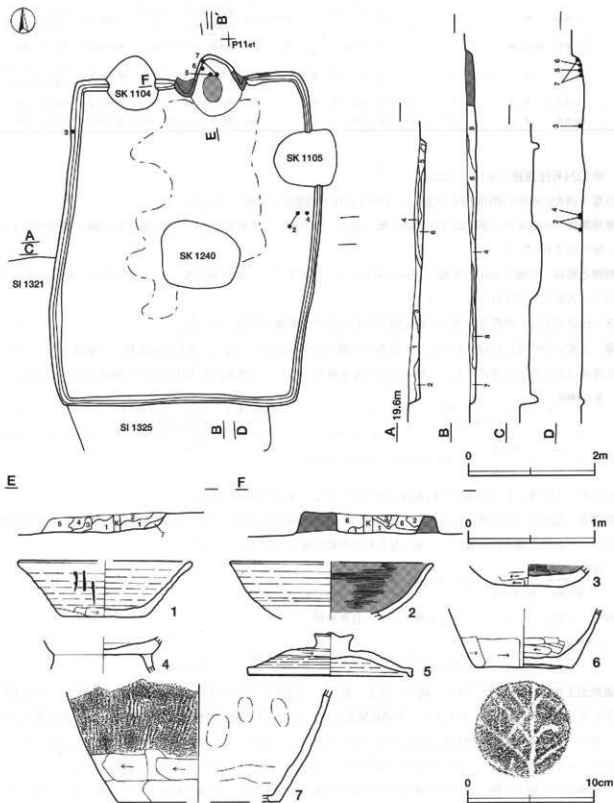
土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|--------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、黄土ブロック・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量、黄土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、黄土粒子・炭化粒子少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・黄土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 8 極暗褐色 | ロームブロック・黄土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・黄土粒子微量 | 9 暗赤褐色 | 黄土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 5 褐色 | ロームブロック多量、黄土ブロック・炭化粒子・砂粒少量 | | |

遺物出土状況 土師器片86点(碗78, 甕7, 鉢1), 須恵器片13点(坏7, 蓋2, 甕4)がほぼ全域から散在して出土している。第120図2・4は東壁際中央部の床面からまよって出土しており、住居廃絶時に投棄さ

れたものと考えられる。また、竈の火床部からは5～7が出土し、そのうち5には焼土や砂粒が付着しており、竈で使用されたものと考えられる。

所見 本跡から、ピットは検出されなかった。時期は、供膳具における土師器の出土量が多いことや出土土器の形状から見て9世紀後半と考えられる。



第120図 第1323号住居跡・出土遺物実測図

第1323号住居跡出土遺物観察表（第120図）

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[13.6]	4.5	6.4	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り、 底部一方向のヘラ削り	覆土中	P10351, 50%, 墨書「川」, PLS
2	土師器	椀	[16.0]	(4.5)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部下面削り、内面ヘラ削り	東壁際床面	P10344, 30%
3	土師器	椀	-	(1.7)	5.7	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り、 底部多方向のヘラ削り	北西部床面	P10345, 20%, 底部内面漆付
4	土師器	高台付椀	-	(2.7)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底面削り、高台削り	東壁際床面	P10346, 20%
5	須恵器	蓋	13.0	3.4	-	雲母・長石・石英	陶灰	普通	天井線左削りの面削り	竈火床部	P1037, 70%, 内外 面漆付、PL53
6	土師器	甕	-	(4.7)	7.7	雲母・長石・石英	橙	普通	胴部削り、内面削り	竈火床部	P10348, 10%
7	須恵器	甕	-	(8.9)	[13.0]	雲母・長石	灰	普通	胴部削り、内面削り	竈火床部	P10349, 10%

第1324号住居跡（第121・122図）

位置 調査区西部のP109区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 北壁部分で第1322号住居跡を掘り込み、中央部から北東部にかけて第1328号住居跡・第1286号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.26m、短軸3.58mの南北に長い長方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は43~52cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除きよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、壁外への掘り込みはほとんどなく、袖部は砂質粘土で構築されている。

火床面は北半部分が確認され、火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

覆土層解説

- 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・炭化物少量
- にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子・砂粒少量
- 褐色 ロームブロック多量、粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量

ピット 1か所。P1は出入り口施設に伴うピットで、深さは24cmである。

貯蔵穴 北西コーナー部に付設され、平面形は1辺が60cmの隅丸方形を呈し、深さは23cmを測る。底面は皿状を呈しており、覆土には竈材の一部と見られる砂粒や焼土が含まれている。

貯蔵穴土層解説

- 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物・砂粒少量
- 暗褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量
- 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 暗褐色 ローム粒子中量

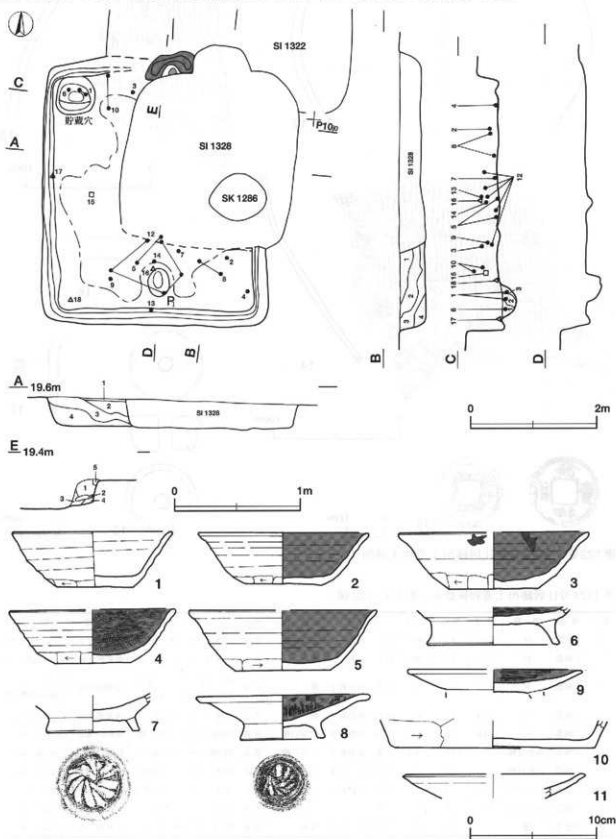
覆土 4層からなり、レンズ状堆積を示した自然堆積である。

土層解説

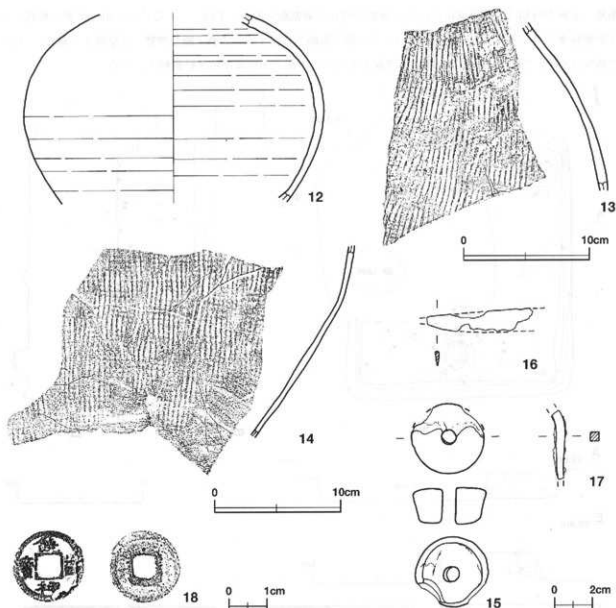
- 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片138点（椀99, 皿2, 甕37）、須恵器片34点（坏12, 甕20, 甕1, 短頸壺1）、灰陶器片3点（皿1, 瓶2）、刀子1点、不明鉄製品1点、古銭1点（饒益神寶）、石製紡錘車1点、炭化種子2点（統2）が貯蔵穴周辺と南壁際の覆土下層を中心に散在した状態で出土している。貯蔵穴内からは第121・122図1・6が出土している。11は北西部の覆土中から出土しており、折戸53号窯式と思われる。また、16の刀子は南壁寄りの覆土上層、17の不明鉄製品は西壁際中央部の床面、18の古銭は南西コーナー部の床面、桃と考えられる炭化種子は南壁寄りの床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、供膳具に占める土師器の割合が須恵器を大きく上回っていることや出土土器の形状から9世紀後葉と考えられる。また、南西コーナー部の床面から出土した古銭(鏡益神寶)は皇朝十二銭の一つで、初鑄年は859年であり、住居の時期にほぼ収まるもので、都との交流を示す好資料といえる。



第121図 第1324号住居跡・出土遺物実測図



第122図 第1324号住居跡出土遺物実測図

第1324号住居跡出土遺物観察表 (第121・122図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.7	4.5	6.2	長石・石英	にぶい橙	普通	縁部押付あり、縁一周のヘリあり	貯蔵穴層土中	P10333, 95%, PL53
2	土師器	坏	13.5	4.2	8.0	長石・石英	橙	普通	縁部押付あり、縁一周のヘリあり	南東部下層	P10354, 60%, PL53
3	土師器	坏	[15.0]	4.5	7.0	石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘリあり、底部一方向のヘリあり	北障階・中層	P10335, 50%, 口縁部油懸付着
4	土師器	坏	[13.0]	4.3	6.0	長石・赤色粒子	橙	普通	縁部押付あり、縁一周のヘリあり	南東部床面	P10356, 50%
5	土師器	坏	[14.8]	4.8	7.6	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底縁部ヘリあり、一方向のヘリあり	南壁寄り床面	P10357, 40%
6	土師器	高台付瓶	-	(3.0)	10.4	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底縁部ヘリあり、高台部付	貯蔵穴層土中	P10358, 30%
7	土師器	高台付瓶	-	(2.9)	7.4	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	底縁部ヘリあり、口縁部押付あり	南壁寄り床面	P10359, 20%
8	土師器	高台付皿	13.9	3.6	6.8	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底縁部ヘリあり、口縁部押付あり	南東部下層	P10360, 60%, PL53
9	土師器	高台付皿	[14.0]	(1.8)	-	石英	にぶい黄橙	普通	底縁部ヘリあり、高台部付	南西部中層	P10361, 50%
10	須恵器	壺	-	(2.3)	16.4	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底縁部ヘリあり、底縁部押付あり	北西部上層	P10362, 20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
11	灰陶器	皿	[14.0]	(19)	-	緻密	黄灰, 釉色不明	良好	口縁部・体部ロクロナテ	北西部覆土中	P10363, 5%, 折戸53号底式。
12	須恵器	短頸壺	-	(15.0)	-	黒色斑点	灰	良好	体部ロクロナテ, 肩部自然輪	南壁寄り中層	P10364, 30%, PL53
13	須恵器	壺	-	(13.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	不良	体部外縁部の平円形, 内面ナテ	南壁階上層	TP10008, 5%
14	須恵器	壺	-	(13.3)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	不良	体部外縁部の平円形, 内面ナテ	南壁階中層	TP10009, 5%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
15	転脚車	3.9	1.9	0.8	(29.0)	凝灰岩	無文, 円蹄台形。	西壁寄り中層	Q1011, 90%, PL67

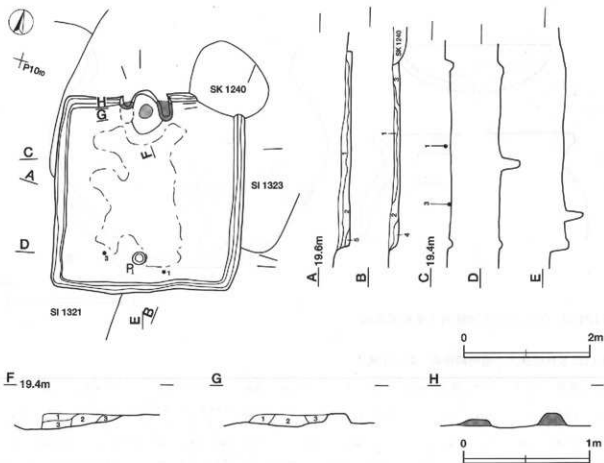
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
16	刀子	(5.6)	(1.3)	0.2	(3.7)	鉄	刃部の破片, 切先及び基部欠損。	南壁階上層	M10074
17	釘カ	(3.6)	0.5	0.5	(3.0)	鉄	頭部欠損, 鼻部湾曲。	西壁階床面	M10075

番号	銭名	径	厚さ	孔径	重量	初铸年	特徴	出土位置	備考
18	横谷神貨	1.8	0.1	0.6	0.1	859年	皇朝十二銭, 円体方形の無背銭。	南西部床面	M1076, 100%, PL70

第1325号住居跡 (第123・124図)

位置 調査区西部のP10F0区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 西側部分で第1321号住居跡を掘り込み, 中央から北側部分を第1323号住居跡に掘り込まれている。



第123図 第1325号住居跡実測図

規模と形状 長軸3.11m, 短軸3.00mの方形で, 主軸はN-15°-Wである。壁高は20cmで, 各壁とも直立している。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められており, 壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設され, 焚口部から煙道部まで65cm, 両袖部幅80cmで, 壁外への掘り込みはほとんどない。袖部は床面と同じ高さの地山面の上に砂質粘土で構築されており, 火床面はわずかに掘りくぼめられて, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道は上部が削平されているために, 外傾して緩やかに立ち上がる様子が若干認められる程度である。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
2 極暗赤褐色 焼土ブロック中層, ロームブロック・炭化粒子・粘土 3 極暗赤褐色 焼土粒子多量, ローム粒子・炭化物・砂粒少量

ピット 1か所。P1は深さ28cmで, 南壁際の中央部に位置しており, 出入口施設に伴うピットと考えられる。

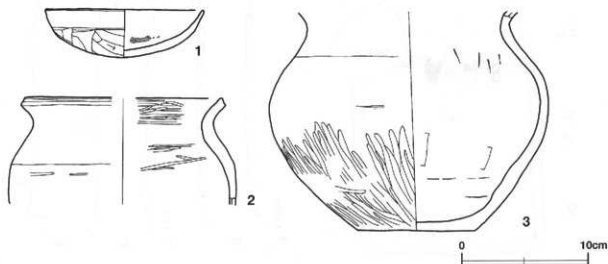
覆土 5層からなり, レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
5 褐色 ロームブロック中層, 焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片8点(杯4, 甕4)が南壁際の床面から出土している。第124図3は南西コーナー部の床面から正位で出土しており, 住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡の時期は重複関係及び出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第124図 第1325号住居跡出土遺物実測図

第1325号住居跡出土遺物観察表(第124図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	125	38	-	長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面へう削り, 内面ナデ	南壁際土層	P10365, 70%, 内面塗付着, PL54
2	土師器	甕	[15.6]	(8.5)	-	霏母・長石	橙	普通	口縁部内面, 胴部内・外面へう削き	覆土中	P10366, 5%
3	土師器	甕	-	(17.3)	9.5	霏母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	胴部内・外面へう削き, 内面へう削き	南西部床面	P10367, 60%, PL53

第1326号住居跡 (第125~127図)

位置 調査区西部のP10F9区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 本跡全体が第1321号住居跡を掘り込み、北壁際を除く覆土層を東西に第10号道路跡が走っている。

規模と形状 長軸3.76m、短軸3.49mの方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は18~25cmで、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がる。

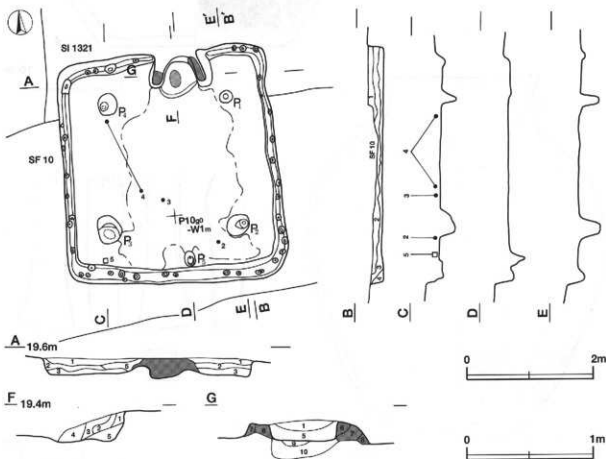
床 ほぼ平坦で、竈の手前から出入り口施設にかけてよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで65cm、両袖部幅100cmである。壁外への掘り込みはほとんどなく、袖部は床面より若干高く掘り残した地山を基部としてその上部に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は20cmほど掘り窪められた部分にローム土を主体とする暗褐色土を床面の高さまで埋め戻して使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------------------|--------|--------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 6 灰黄褐色 | 粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 7 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 9 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化物・灰少量 |
| 5 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 10 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 |

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは23~33cmである。P5は深さ22cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、壁溝内から深さ5cmほどの小ピットが40か所検出されており、壁柱穴と考えられる。



第125図 第1326号住居跡実測図

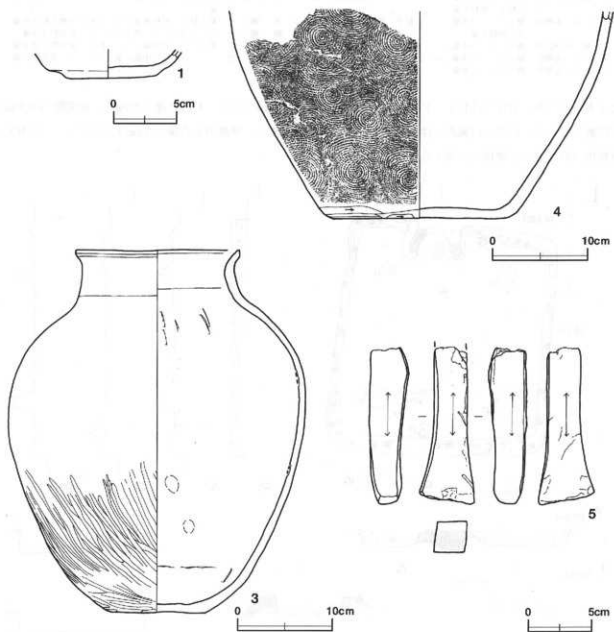
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

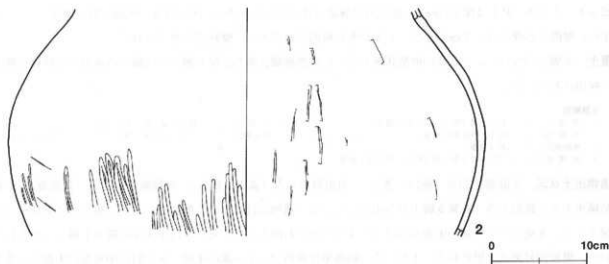
- | | | | |
|-------|---------------------|----------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 5 にぶい黄褐色 | 粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片18点(杯10, 壺8), 須恵器片5点(杯1, 壺4), 砥石1点が中央部から北西部にかけての床面を中心に出土している。第126・127図1はP3の覆土中から出土している。2~4は中央部南寄りの覆土下層からの出土で、いずれも破砕された状態でまともに出土しており、住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。5の砥石は南西コーナー部の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は出土土器から8世紀前葉と考えられ、この時期の住居は1辺が4m前後の方形で、ピットが規則的に配されるものが多く、住居の規模や形態に規格性を窺うことができる。



第126図 第1326号住居跡出土遺物実測図(1)



第127図 第1326号住居跡出土遺物実測図(2)

第1326号住居跡出土遺物観察表(第126・127図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須臾器	坏	-	(22)	7.3	長石・石英	褐灰	普通	外部コロボシ, 底部外へう張り	P3 覆土中	P10368, 40%
2	土師器	甕	-	(24.0)	-	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	外部外へう張り, 内面へう張り	中央部下層	P10369, 20%
3	土師器	甕	17.0	37.9	10.2	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	外部外へう張り, 底にナシ, 内部・縁縁	中央部下層	P10370, 70%, PL54
4	須臾器	甕	-	(21.7)	18.0	雲母・長石	黄灰	普通	外部外へう張り, 内部・縁縁	中央部下層	P10371, 50%

番号	器種	長さ	最大幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	砥石	(16.3)	(5.9)	(4.1)	(391.0)	凝灰岩	方形状, 砥面4部, 両部片欠損, 中央部が薄い。	南西部下層	Q10012, PL68

第1328号住居跡(第128・129図)

位置 調査区西部のP109区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 北壁部分で第1322号住居跡, 東壁際を除くほぼ全体が第1324号住居跡を掘り込み, 南東部を第1286号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 1辺が2.75mほどの方形で, 主軸方向はN-2°-Eである。壁高はいずれも35cmほどで, 各壁とも直立している。

床 ほぼ平坦で, 中央部から西壁際にかけてよく踏み固められており, 壁溝が南壁際を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されており, 焚口部から煙道部まで70cmで, 燃焼部幅60cmである。天井部, 東袖部は遺存しておらず, 西袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は5cmほど浅い皿状に掘り窪められており, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道の立ち上がり部には雲母片岩が下部を埋め込まれて直立した状態で据えられており, 火熱を受けて脆くなっている。また, 煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

土層解説

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量 | 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化物少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化物・灰少量 | 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 7 にぶい赤褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 極暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量 | 8 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |

ピット 1か所。P1は深さ12cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられ、付近の床面が特に硬化している。また、壁際から深さ5~7cmの小ピット8か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。

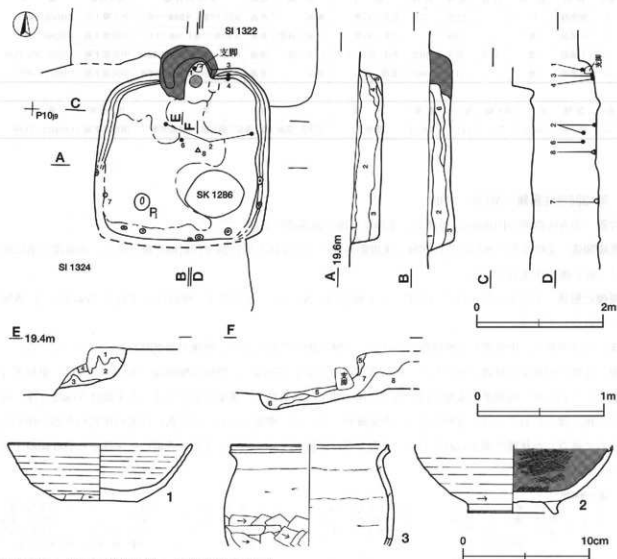
覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。第6層からは竈から流出した砂粒や焼土が検出されている。

土層解説

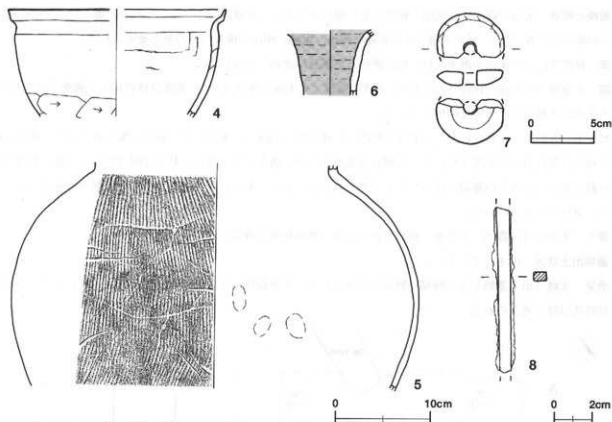
- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 暗赤褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量 |
| 3 強暗褐色 | ローム粒子微量 | | |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片25点(碗16, 甕9), 須恵器片6点(蓋1, 甕5), 灰釉陶器片1点(長頸瓶), 土製紡錘車1点, 鉄釘1点, 石製支脚1点が出土している。遺物はほぼ全域に散在しており、竈からは第128・129図1・5, 北東コーナー部の床面からは3・4がそれぞれ出土している。6は中央部の覆土上層から出土しており, 黒笹90号窯式と思われる。また, 7の紡錘車は南西コーナー部の床面, 8の釘は中央部の床面から若干浮いた状態で出土している。

所見 本跡は1辺が3m未満の小形の住居跡であり, 時期は須恵器がまだ若干見られることや出土土器の形状から9世紀末葉から10世紀前葉と考えられる。



第128図 第1328号住居跡・出土遺物実測図



第129図 第1328号住居跡出土遺物実測図

第1328号住居跡出土遺物観察表(第128・129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土器	坏	14.5	4.6	6.0	雲母・長石・石英	灰褐色	普通	袖型管へ付し、紐・柄へ付し	竈火床部	P10373, 80%, P154
2	土器	高台付物	-	(5.4)	7.0	雲母・長石・石英	にぶい陶	普通	底部回転へ付切り後、高台貼り付け	東壁部床面・ 竈手前上層	P10374, 40%
3	土器	壺	[12.4]	(8.0)	-	雲母・長石・石英	明赤陶	普通	底部回転へ付し、内面ナデ・輪跡あり	北東部床面	P10375, 30%
4	土器	鉢	[17.2]	(8.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい陶	普通	胴縁ナデへ付し、内面ナデ・輪跡あり	北東部床面	P10376, 20%
5	須恵器	壺	-	(23.6)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄褐色	不良	胴縁縁の付出し、内面ナデ・輪跡あり	竈火床部	P10377, 30%
6	灰釉陶器	長頸瓶	-	(5.2)	-	緻密	灰白・灰オリーブ	良好	胴部ロクロナデ、輪は流し掛け	中央部上層	P10378, 5%、 照量90号式期

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	粘土	5.3	1.2	1.0	(22.4)	土製	ナデ、にぶい橙色を呈する。	南西部床面	DP10015, 60%, P167

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
8	釘	φ (8.8)	0.7	0.5	(15.0)	鉄	断面長方形の棒状、一端がわずかに粗る。	中央部床面	M10077

第1329号住居跡(第130図)

位置 調査区西部のP11b1区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 南側部分で第1327号住居跡の覆土を掘り込み、西コーナー部を第1234・1235・1243号土坑、北東壁際を第1290号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され、壁の立ち上がりを確認できなかったため、竈とピットの位置から判断して、N-55°-Eを主軸とする長軸4.60m、短軸3.80mの横長の長方形と推定される。

床 耕作等により床面が削平され、特に硬化した部分は認められない。

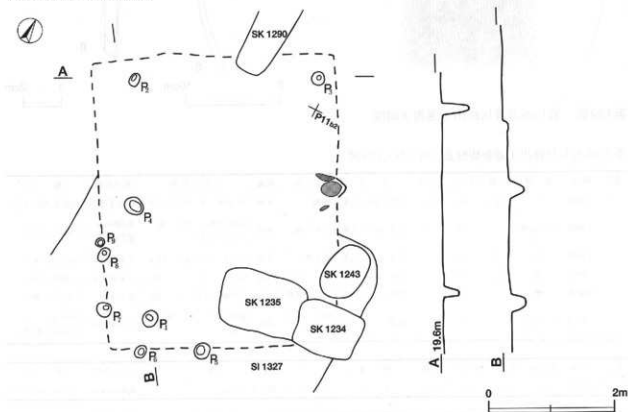
竈 北東壁の中央部に付設されており、袖部の基部と火床面が確認された。袖部は砂質粘土で構築されており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 9か所。主柱穴はP1～P3が相当し、深さ24～43cmで、東コーナー寄りに配されていたと考えられる柱穴は第1234・1235号土坑によって掘り込まれたため、遺存していない。P4は深さ25cmで、竈と対峙する位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。P5～P9は深さ24～37cmで、壁際から検出されており、壁柱穴と考えられる。

覆土 床面がほぼ露出した状態で検出されたため、堆積状況は確認できなかった。

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡は出土遺物がなく時期の特定ができないが、7世紀代の住居跡の上層に構築されていることから奈良時代以降と考えられる。



第130図 第1329号住居跡実測図

第1330A号住居跡 (第131・132図)

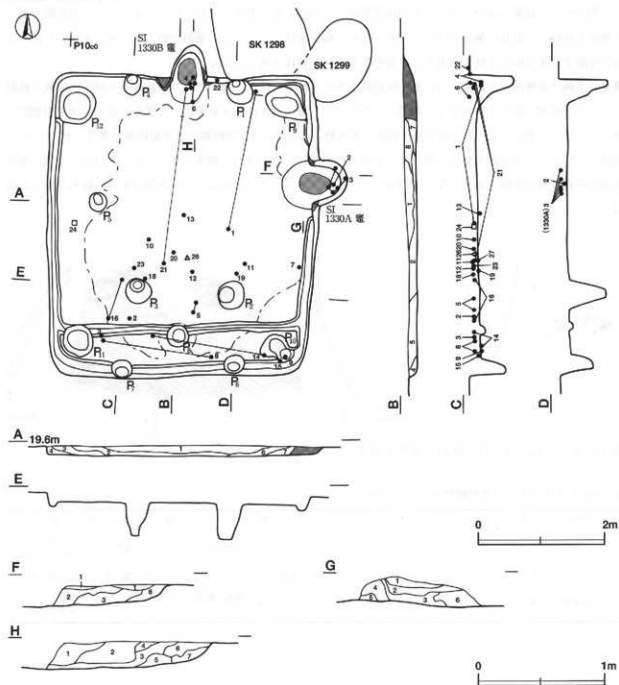
位置 調査区西部のP10c0区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。当初、1軒の住居跡として調査を開始したが、立て替えが行われていることが確認されたため、内側の住居跡を第1330A号住居跡、外側の住居跡を第1330B号住居跡として調査を実施した。

重複関係 北東コーナー部を第1298・1299号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.25m、短軸4.10mの方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は10~19cmで、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められており、壁溝は北壁際を除いて巡っている。南壁下の壁溝は第1330B号住居跡の床下から検出された。

竈 東壁と北壁から2基確認されており、そのうち東竈は袖部が遺存せず、焚口部や火床部の上面から踏み固められた痕跡が検出され、東竈を建て替え以前の竈と判断した。焚口部から煙道部までは105cm、燃烧部幅70cmで、壁外へ40cmほど掘り込んで構築されている。付近の床面には竈材の流出が認められ、粘土粒子や砂粒が散在している。また、火床面は浅い皿状を呈しており、焼け締まった感じはない。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。



第131図 第1330 A・B住居跡実測図

竈土層解説

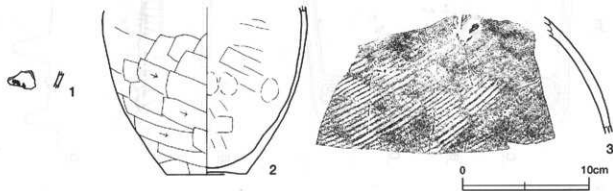
- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|----------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化物中量、ロームブロック・砂粒・粘土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化物中量、ローム粒子少量 | | |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化物中量、ロームブロック少量 | | |

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは50～66cmである。P5は深さ22cmで、竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P2・3の上面からは硬化した面が検出されており、本跡が拡張された際、埋め戻されて床面の一部として使用されたことが想定される。

覆土 確認された覆土は全て第1330B号住居跡に帰属するものである。

遺物出土状況 本跡に明確に帰属するといえる遺物は東竈から出土した土師器片11点（焼4，焼7），須恵器片9点（焼9）だけである。火床面直上から逆位で出土した第132図2は支脚として使用されており，体部には火熱を受けた痕跡が認められる。1の体部外面には判読不明の墨書がされている。また，3の須恵器大甕片は焼成が良好で，近在の製品ではないと考えられ，接合関係にはないが，器形や胎土から見て本跡から南へ35mに位置する第1103号土坑から出土した須恵器片と同一個体と考えられる。

所見 本跡は南壁部分を拡張する以前の住居跡であり，拡張に伴って竈や出入り口施設，主柱穴の位置を移動している。時期は出土土器が少なく明確にしないが，竈の火床部に赤変硬化した部分が見られず使用期間が短かったことが想定され，第1330B号住居跡の年代観から見て，ほぼ同時期の9世紀後半と考えられる。また，本跡から出土した須恵器大甕片と第1103号土坑から出土したものは同一個体と考えられ，第1103号土坑の遺物は第90号掘立柱建物跡の廃絶に伴って投棄されたものであることと併せて，当該期の集落の様相を窺う好資料といえる。



第132図 第1330A号住居跡出土遺物実測図

第1330A号住居跡出土遺物観察表（第132図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	-	(1.4)	-	赤色粒子	靑	普通	体部内面へラ磨き	竈火床部	P10392, 5%, 体部外面墨書「□」
2	土師器	甕	-	(132)	6.3	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ磨き	竈火床部	P10396, 40%
3	須恵器	甕	-	(9.3)	-	長石・黒色斑点	灰白	良好	体部外面割位の平行叩き、内面ナデ	竈火床部	TP10012, 外面自然釉

第1330 B号住居跡 (第131・133・134図)

位置 調査区西部のP10c0区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 第1330 A号住居跡を拡張して本跡が構築されている。また、北東コーナー一部を第1298・1299号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.82m、短軸4.10mの南北に長い長方形であり、主軸方向はN-0°である。壁高は10~19cmで、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められており、壁溝は北壁際を除き巡っている。

竈 東壁と北壁から2基確認されたため、袖部の遺存している北竈を本跡の竈と判断した。焚口部から煙道部までは95cm、両袖部幅90cmで、壁外へ55cmほど掘り込み、白色粘土を用いて構築されている。火床面は浅い皿状を呈して、火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化物・粘土粒子少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化物少量 |
| 3 極暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子・粘土粒子少量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子少量 |
| | | 7 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土ブロック中量、炭化粒子少量 |

ピット 9か所。主柱穴はP1・4・6・7が相当し、P1・4は第1330 A号住居跡の柱穴が再利用されたと思定される。P6・7は立て替えに伴って新たに構築されたと考えられ、深さはそれぞれ42cmと38cmである。P8は深さ36cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P9~P12は深さ16~20cmで、それぞれ各コーナー部に位置しており、貯蔵施設など何らかの機能を有していたと考えられるが、その用途については判然としない。

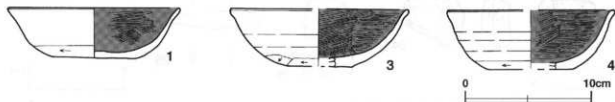
覆土 8層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。第6~8層には竈材の一部の流出が認められる。

土層解説

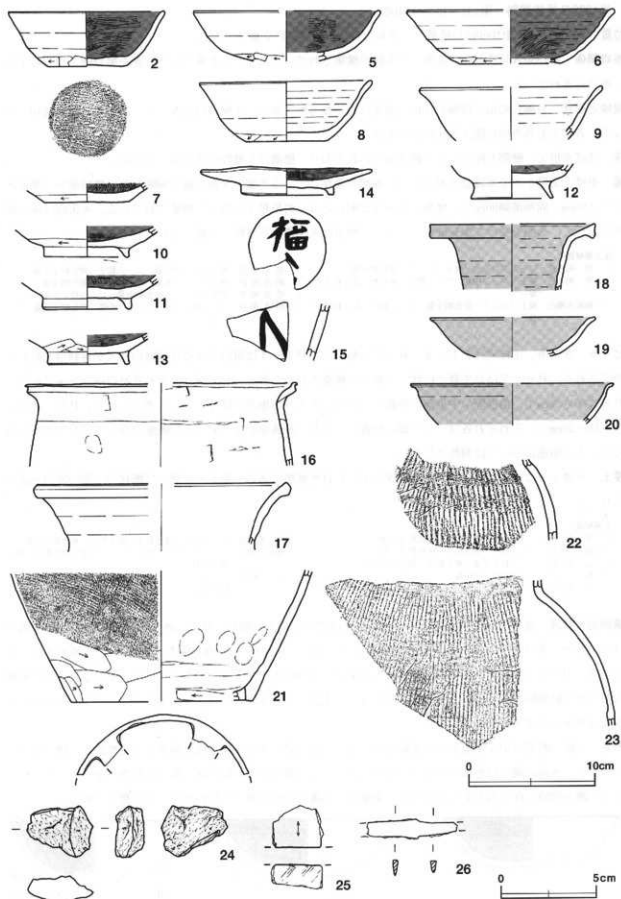
- | | | | |
|--------|---------------------|---------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 極暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量 | | |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 遺物はほぼ全域に散在しており、土器器片133点(碗83, 皿6, 鉢5, 甕38, 甕1), 須恵器片51点(坏28, 蓋4, 甕18, 甕1), 灰釉陶器片2点(碗1, 長頸瓶1), 緑釉陶器片1点(碗), 磁石1点, 軽石1点, 刀子1点が出土している。竈内からは第133・134図4・6・21が出土している。また、18・19の灰釉陶器と20の緑釉陶器はいずれも中央部やや南寄りの床面から若干浮いた状態で出土しており、そのうち18の長頸瓶は黒甕14号窯式と思われる。

所見 本跡の時期は出土土器から9世紀後葉と考えられ、第1330 A号住居跡の南壁部分を拡張して建て替えられている。本跡の竈は白色粘土を用いて構築されており、第1330 A号住居跡の竈とは材質が違うことから、2つの竈が同時に作られたものではなく、東竈から北竈への作り替えが行われたことが想定される。



第133図 第1330 B号住居跡出土遺物実測図(1)



第134图 第1330B号住居跡出土遺物実測図(2)

第1330B号住居跡出土遺物観察表(第133・134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	13.4	4.1	6.4	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部内面へう磨き、下端・底部回転へう削り	中央部・北壁部床面	P10379, 90%, PL54
2	土師器	坏	12.4	4.4	6.0	雲母・赤色粒子	橙	普通	縁部縁へう磨き、縁・底へう削り	南西部下層	P10380, 70%, PL54
3	土師器	坏	[14.0]	4.5	[5.2]	石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	縁部縁へう磨き、縁・底へう削り	南西部下層	P10381, 30%
4	土師器	坏	[13.0]	4.7	[6.6]	赤色粒子	にぶい橙	普通	縁部縁へう磨き、縁部縁へう削り	竈火床部	P10382, 30%
5	土師器	坏	[14.6]	(4.0)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	縁部内へう磨き、下端半へう削り	南壁寄り下層	P10383, 20%
6	土師器	坏	[16.2]	4.3	[7.8]	赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部下端手持ちへう削り	竈火床部	P10384, 20%
7	土師器	坏	-	(1.5)	6.6	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	縁部縁へう磨き、縁・底へう削り	東壁際床面	P10385, 20%
8	須恵器	坏	13.5	4.8	6.4	長石・石英	灰褐	不良	縁部縁へう磨き、縁部へう削り	南壁下層	P10386, 60%, PL54
9	須恵器	坏	[14.2]	(4.2)	-	長石・石英	灰白	普通	体部口ロ口整形	南東部床面	P10387, 10%
10	土師器	高台付碗	-	(2.4)	6.7	石英・赤色粒子	橙	普通	底面縁へう磨き、高台取り付け	中央部床面	P10388, 30%
11	土師器	高台付碗	-	(2.7)	6.7	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底面縁へう磨き、高台取り付け	中央部床面	P10389, 30%
12	土師器	高台付碗	-	(2.7)	6.1	雲母	橙	普通	底面縁へう磨き、高台取り付け	中央部下層	P10390, 20%
13	土師器	高台付碗	-	(2.4)	[6.4]	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底面一方へう磨き、高台取り付け	中央部床面	P10391, 20%
14	土師器	高台付皿	13.3	2.3	7.2	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内面へう磨き、底面一方へう削り、高台取り付け	南東部下層・床面	P10393, 70%, 墨書「匚」, PL54-65
15	土師器	鉢	-	(4.5)	-	赤色粒子	橙	普通	体部外周口ロ口整形、内面へう磨き・黒色処理	南東部床面	P10394, 5%, 外面墨書「匚」
16	土師器	甕	[21.4]	(6.6)	-	長石・石英	橙	普通	縁部削り・縁部、縁へう削り・縁部	南西部下層	P10395, 10%
17	須恵器	甕	[19.8]	(5.3)	-	雲母・石英	灰黄褐	不良	口縁部内・外面口ロ口ナテ	竈火床部	P10397, 10%
18	灰釉陶器	瓦製瓦	[13.0]	(5.3)	-	緻密	灰白・緑灰	良好	口縁部・胴部口ロ口ナテ、縁は波し削り	中央部下層	P10398, 10%, 墨書14号煎式
19	灰釉陶器	碗	[13.0]	(3.1)	-	緻密	灰白・灰オリープ	良好	口縁部・体部口ロ口ナテ、縁は波し削り	中央部床面	P10399, 5%, 墨書煎式
20	緑釉陶器	碗	[16.0]	(3.3)	-	緻密	灰白・浅黄	普通	口縁部・縁部口ロ口ナテ、縁の大型磨き	中央部床面	P10400, 5%
21	須恵器	瓶	-	(10.4)	[14.3]	雲母・長石・石英	暗赤褐	不良	体部外周縁部の平行削り、下層へう削り、内面ナテ・底面削り	竈火床部・中央部床面	P10401, 20%
22	須恵器	甕	-	(6.4)	-	雲母・長石	にぶい黄橙	不良	体部外周縁部の平行削り、内面ナテ	北壁際上層	TP10010
23	須恵器	甕	-	(11.6)	-	雲母・長石	灰	普通	体部外周縁部の平行削り、内面ナテ	中央部下層	TP10011

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
24	浮子	5.2	4.1	2.3	9.3	磁石	表面磨滅、不整形。	西壁部床面	Q10013, 100%
25	磁石	(2.2)	(2.7)	(1.3)	(7.5)	凝灰岩	破片のため磁石一面を確認、全体の形状は不明。	北東部埋土中	Q10014

番号	器種	長さ	幅	重ね	重量	材質	特徴	出土位置	備考
26	刀子	(4.8)	0.9	0.3	(4.2)	鉄	切先・茎尻欠損、両側有り。	中央部床面	M10078

第1331号住居跡(第135図)

位置 調査区西部のP10b0区に位置し、平坦な台地上の南端部に立地している。

重複関係 南壁際を第1300・1301・1302号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出されたため、壁の立ち上がりは確認されず、平面形状は長軸3.50m、短軸3.08mの南北に長い長方形で、主軸方向はN-2°-Wである。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は東壁際と西壁際の一部で認められる。

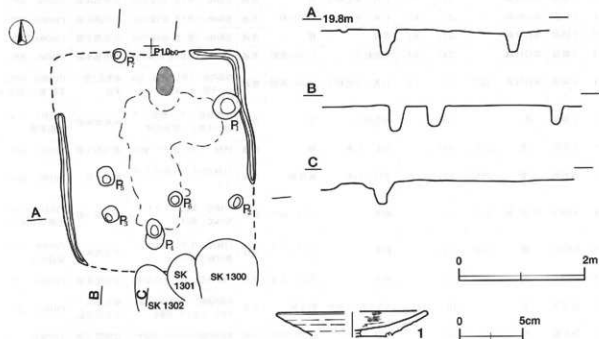
竈 北壁際の中央部に付設されており、遺存状態が悪く、火床面とその周囲の床面から粘土粒子や砂粒が検出されただけである。火床面は北壁ラインより内側に位置し、火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 7か所。主柱穴は3か所でP1～P3が相当し、深さは26～38cmであり、北西コーナー寄りに推定される柱穴は精査したが検出されなかった。P4は深さ35cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5・6は深さ34cmと27cmで、位置と形状から見て補助的な柱穴と思われる。P7は深さ26cmで、壁柱穴の可能性がある。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片6点(碗3, 高台付皿1, 甕2), 須恵器片2点(杯1, 甕1)が出土している。第135図1はP1の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、須恵器の出土が少ないことや柱穴から出土した土器の形状から9世紀後葉と考えられる。



第135図 第1331号住居跡・出土遺物実測図

第1331号住居跡出土遺物観察表 (第135図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付皿	[116]	(20)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	体部内面へラ磨き, 底部回転へラ切り後, 高台貼り付け	P1 覆土中	P10402, 10%

第1333号住居跡 (第136図)

位置 調査区西部のP1112区に位置し、調査区のおおむね中央を北に向かって入り込む谷部に堆積した黒色土中に構築されている。

重複関係 第1311号住居跡の東側部分の覆土を掘り込んでいる。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され、壁の立ち上がり方が確認できなかったため、硬化面の広がりから見て、N-0°を主軸とする長軸3.90m、短軸3.30mの東西に長い長方形と推定される。

床 西側部分と北東部に硬化面が認められるだけであり、調査前に硬化面のほとんどが削平されたことが考え

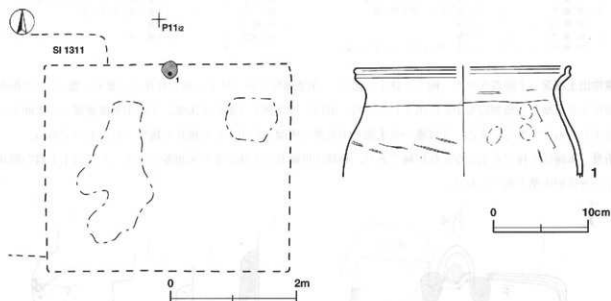
られ、壁溝も認められない。

竈 北壁際の中央部から火床面だけが確認されている。火床面は火熱を受けて赤変しており、付近の床面には竈材の一部と考えられる粘土粒子や砂粒が散在している。

覆土 確認されなかった。

遺物出土状況 土師器片3点(甕3)、須恵器片7点(坏4、甕3)が竈付近の床面から出土している。第136図1は竈の火床部から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から9世紀代と考えられる。



第136図 第1333号住居跡・出土遺物実測図

第1333号住居跡出土遺物観察表(第136図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	[222]	(115)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	内面・外底ヘナナ、内面磨製	竈火床部	P10405, 10%

第1335号住居跡(第137・138図)

位置 調査区西部のP11c4区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長軸3.48m, 短軸3.40mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は24~32cmで、北壁はほぼ直立し、それ以外の壁は外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、竈の手前から出入り口施設にかけてよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで120cm, 両袖部幅100cmである。壁外への掘り込みは40cmほどで、袖部は床面より若干高く掘り残した地山を基部としてその上面にローム土混じりの砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床面は浅い皿状に掘りくぼめられて赤変硬化しており、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 にぶい赤褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック・炭化粒子・粘 3 暗赤褐色 焼土ブロック・砂粒中量, ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化粒子・粘 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量, 炭化物中量, ローム粒子・灰少量

- 5 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック・粘土
 粒子・砂粒少量
 6 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
 7 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子・

- 炭化粒子少量
 8 暗褐色 粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土粒子・
 炭化粒子少量

ビット 2か所。P1は深さ26cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うビットと考えられる。P2は不明である。

覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

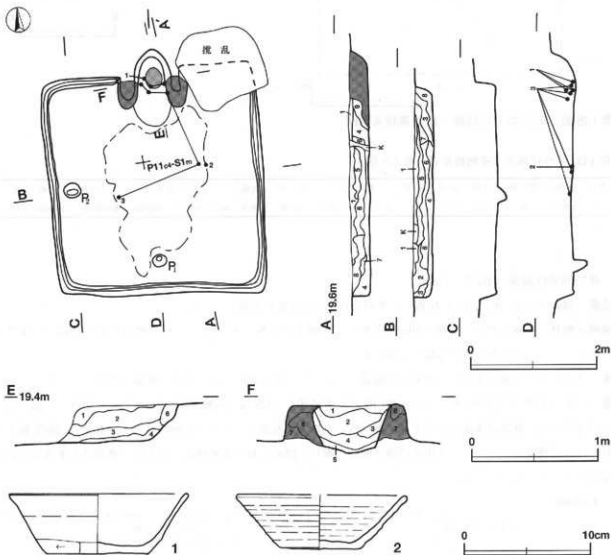
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
 3 暗褐色 ロームブロック中量
 4 暗褐色 ロームブロック中量
 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量

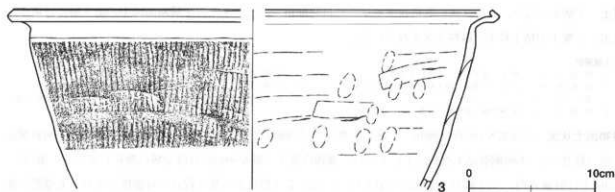
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
 7 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量
 8 暗褐色 ロームブロック中量
 9 暗赤褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量

遺物出土状況 土器器片9点(碗3, 鉢1, 甕5), 須恵器片16点(坏6, 高台付坏3, 甕6, 甌1), 灰釉陶器片1点(瓶)が竈周辺を中心に出土している。第137・138図1は竈の火床部, 2は中央部東寄りの床面から出土したものである。また, 3は竈の火床部と中央部の床面から出土した破片が接合されたものである。

所見 本跡は主柱穴をもたない住居跡であり, 時期は供膳具の主体がまだ須恵器であることや出土土器の形状から9世紀中葉と考えられる。



第137図 第1335号住居跡・出土遺物実測図



第138図 第1335号住居跡出土遺物実測図

第1335号住居跡出土遺物観察表 (第137・138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	14.0	4.8	8.0	雲母・長石・石英	灰	普通	底面内へう型(多方向へう型)	竈火床部	P10407, 50%, PL54
2	須恵器	坏	[13.4]	4.2	6.2	雲母・長石	灰	普通	底面内へう型(多方向へう型)	中央部床面	P10408, 50%
3	須恵器	鉢	[38.0]	(14.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄褐色	不良	体部外面壁位の明き。片首へラナゲ・指頭痕・輪墓み痕	竈火床部・中央部床面	P10410, 10%

第1336号住居跡 (第139・140図)

位置 調査区西部のP10h9区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 東壁の北寄りを第1242号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.98m、短軸3.28mの東西に長い長方形で、主軸方向はN-97°-Eである。壁高は18~36cmで、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、北壁際を除きよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 南東コーナー部に付設されており、焚口部から煙道部まで120cm、両袖部幅95cmで、壁外への掘り込みは60cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中の第8層が天井部の崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多量に含んでいる。火床面は皿状に掘り窪められて赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1 灰赤色	焼土粒子・砂粒中量、粘土粒子少量	6 にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量
2 明赤褐色	焼土ブロック・砂粒中量、炭化粒子少量	7 暗赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土ブロック少量
3 にぶい赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子・砂粒少量	8 にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒多量、焼土粒子少量
4 にぶい赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・砂粒少量		
5 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量		

ピット 2か所。P1は深さが20cmで、竈と対峙する位置にあり、硬化面の広がりや併せて出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2は深さ19cmで、南壁際の中央部に位置しており、壁柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設され、平面形は長径85cm、短径75cmの楕円形を呈している。深さは29cmを測り、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。また、覆土下層からは竈材と同質の粘土粒子が検出されている。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	4 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量	5 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
3 褐色	ロームブロック多量		

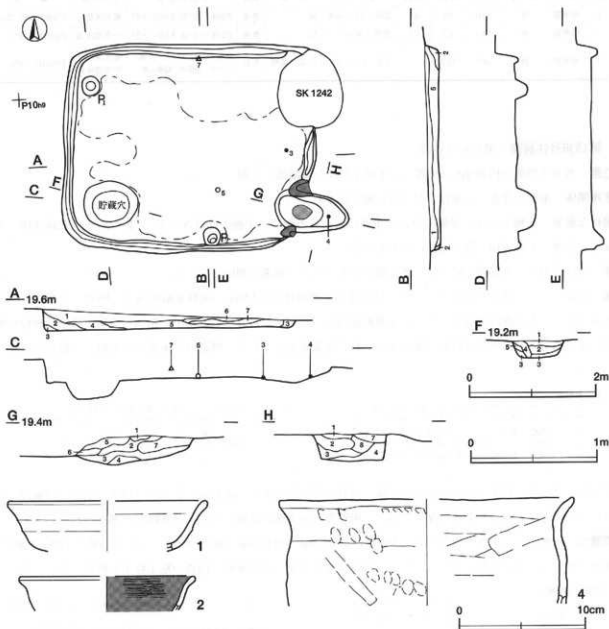
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。また、土層断面図中の第7層には竈から流出した焼土や粘土粒子、砂粒が含まれている。

土層解説

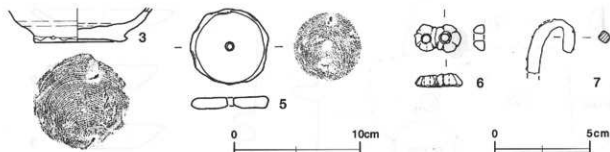
- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | 7 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量、炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片107点（碗96、小皿1、甕10）、灰釉陶器片1点（瓶）、土製紡錘車1点、不明鉄製品1点（鉸具カ）、不明鋼製品1点が出土しており、遺物は覆土下層を中心にほぼ全域に散在している。第139・140図1は貯蔵穴内、4は竈の大床部から出土している。7は形状から見て鉸具の可能性があり、北壁際の覆土中層から出土している。6は出土位置を層位でとらえていないため帰属を明確にし得ないが、蓮華状の刻みを有する輪を連結した形状であり、飾り金具の一部と考えられる。

所見 本跡はコーナー竈を有した住居跡であり、時期は出土土器から10世紀後半と考えられる。



第139図 第1336号住居跡・出土遺物実測図



第140図 第1336号住居跡出土遺物実測図

第1336号住居跡出土遺物観察表 (第139・140図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	椀	[17.6]	(4.0)	-	石英	浅黄褐色	普通	体部ロクロ整形	貯蔵穴覆土中	P10411, 10%
2	土師器	椀	[13.6]	(2.8)	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部ロクロ整形, 内面ヘラ磨き	西部覆土中	P10412, 5%
3	土師器	環	-	(2.7)	7.1	赤色粒子	浅黄褐色	普通	体部ロクロ整形, 底面刷毛切り	東壁際床面	P10413, 30%
4	土師器	甕	[23.4]	(8.4)	-	長石・石英	橙	普通	胴部内・外側ヘラナデ, 外縁面刷毛	竈火床部	P10414, 20%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	紡錘車	62	0.9	0.4	35.9	土師器	土師器環を転用, 回転糸切り装置有り, 浅黄褐色を呈する。	竈手前床面	DP10016, 100%, PL65

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	不明	2.4	1.4	0.6	5.6	陶	蓮華状の文様有り, 鐙り金具の一部。	覆土中	M10078, 100%, PL70
7	絞具	(2.3)	(3.0)	0.7	(5.7)	鉄	弓金具の一部, 片側欠損。	北壁際床面	M10080, 50%

第1338号住居跡 (第141図)

位置 調査区西部のP11a3区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 東側部分で第1337号住居跡, 北側部分で第1345号住居跡を掘り込み, 中央部の東側を第1118・1119号土坑, 南東コーナー部を第1121号土坑, 西壁部分を第1237号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され, 壁の立ち上がりが確認されなかったため, 床面の広がりや竈やピットの位置から判断して, N-5°-Eを主軸とする1辺が3.50mほどの方形と推定される。

床 中央部の西壁寄りと南壁寄りに硬化面が認められ, その他の部分は耕作等により削平されたと考えられる。また, 壁溝も認められない。

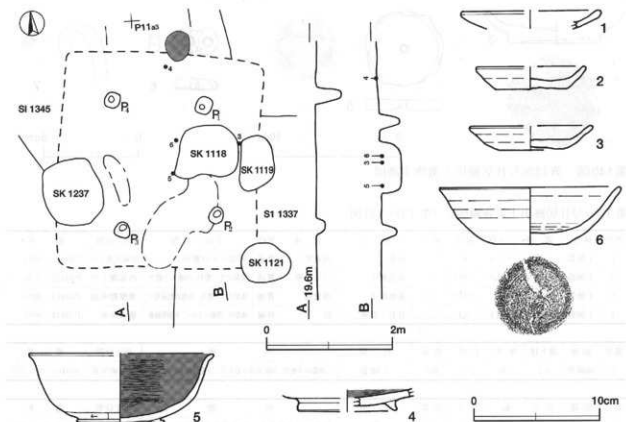
竈 北壁際のはぼ中央に粘土粒子や砂粒が散在しており, 竈材の一部が流出したものと考えられる。赤変した部分は検出されていない。

ピット 4か所。P1~P4は支柱穴で, 深さは16~36cmである。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片13点(椀8, 小皿3, 甕2)が床面から散在した状態で出土している。第141図4は竈手前の床面から出土している。

所見 本跡の時期は, 10世紀代の住居跡を掘り込んでいることや出土土器の形状から見て10世紀後半以降と考えられる。



第141図 第1338号住居跡・出土遺物実測図

第1338号住居跡出土遺物観察表 (第141図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	小皿	[10.8]	(1.4)	-	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部ロクロ整形	覆土中	P10419, 10%
2	土師器	小皿	[8.5]	1.8	[5.6]	灰石・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロ整形, 底部回転ヘラ型	覆土中	P10416, 50%
3	土師器	小皿	[9.6]	1.9	5.0	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロ整形, 底部回転ヘラ型	中央部床面	P10417, 40%
4	土師器	高台付碗	-	(1.8)	[7.8]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ型, 赤色粒子付	覆土面床面	P10420, 5%
5	土師器	高台付碗	[14.4]	5.6	[6.6]	雲母・赤色粒子	にぶい黄	普通	底部回転ヘラ型, 赤色粒子付	中央部床面	P10418, 30%
6	土師器	碗	14.2	4.6	5.6	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロ整形, 底部回転ヘラ型	中央部床面	P10415, 60%, PL54

第1339号住居跡 (第142図)

位置 調査区西部のP115b区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 西側部分で第1334号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東側部分が調査区域外に延びているため、南北軸は3.40mで、東西軸は1.08mが確認されただけであり、平面形状は方形または長方形と推定される。主軸方向は、西壁の指す方向から判断してN-4°-W、あるいはN-86°-Eと推定される。

床 ほぼ平坦であり、硬化面や壁溝は認められない。

竈 検出されなかった。

ピット 3か所。P1は主柱穴、P2は補助的な柱穴と考えられ、深さはそれぞれ22cmと30cmである。P3は深さ15cmで、長方形を呈しており、貯蔵穴の可能性を示すが、全容が不明のため断定はできない。